日間瑣錄

大正十四年一月起筆

特別
イ4
1919
369

176637

日間録

大正十四年一月記事

○ことし八五郎といふこと四めるを新聞紙にのせるもの
四五の新聞紙にも余が肖像の掲載せられ、余が肝煎つた十二村の溜池涙ながら
ものも、新聞紙にもうつされ、同雪具の新聞にも
これも自分が掲げしめたるものであるから、私切ぬき
をこゝに取めておく
外に遠喜の人から利子一二出のと同じ図(黄
紙一枚)、生に就ての地方行政に関する仮
令

思ひ出多き明治文化展

（てに俯瞰大ふのき）氏吉謙鳥市る見を品の愛遺愛の八泉小の乗つたり村艦と文化論者通

前書に張り
込みし記
念帖
都新聞
所載

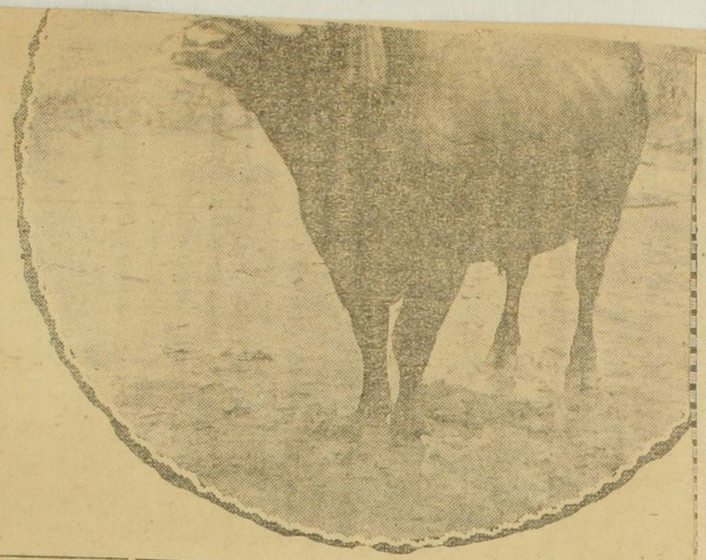
38- 9158

○新年二日熱海へ行き伊豆屋に宿る
翌朝一日井上辰九郎と散策中大沢鮑をひさぐ
あやしき家に ミコシを振く白書に酒を呼び沒策
を弱手れ、性癖の講義に一生を敬るかす、盃を傾口
を衛に出で、うんうん豊命ならん感、酒醒め来
れば皆忘る、筆に托して見れば皆平凡也

酔後吟

一世に顔が多くもとを殷もすくも
一交換に交換子かはせ時四八
陽晴する男の面あり、
一世に男を為して可なり、ウツキ
男のみと注入する女ときく粉空也

十二行



にて輕裝し牛の鼻綱の先に鳥の毛を挾みたるものを肩にして曳

も八も、車屋も人足も入り込む、少しも身分の高下等を論ずるなく一堂に會すると云ふ式の早く開けたのは牛肉屋である。こ

背後を取抱きシ人レ
叫び手を拍ち醉を揚げ聲を叫く
やら背を打つやらかくして應援
助勢に努めるその互角の取組で
角闘激烈になつて來ると牛若い
衆は益々牛に接近し殆と牛の見
へぬ程になるともある、もしも
一方の牛が飛びこまれ突き返さ
るゝが如き場合には勞者の背後
に立つて居る若ものは左右に人
波をうたせて巧にこれを避け頻
勢を挽回せしむるやうまた〳〵
押し寄せる優者力のものは一層
厳援を與へて突進する、その一
進一退虚々實々の活闘は筆舌に
盡し難はざるほど壯觀を極める
多くの職場を經て來た逸物になる
と一度や二度の追撃、突貫位
には容易するなく却つて勢ひを
増しこちらより攻勢に轉ずると
もあるが、到底力及ばずと自覺す
る時は平生の遲鈍性にも似ず疾
風迅雷的に逃げ出すものもある
されど大抵は終局の勝負を見す
して引分くるやうだ角闘數十分
に及び双方疲れた樣子が見へる
と一方から引分けの相談が出る
見物人からも引分けの相談が出る

じた。そして宿へ引揚げると約に牛肉を命じ一杯に奏して快とさけんだものである。（市島春城大人談）

大相撲前色
横綱。萬象。總。迎新。北斗。轉長。納。
舊。萬象。總。迎新。北斗。轉長。納。
後。風。氣。運。頭。年。新。
顧。想。品。貴。根。本。義。
服。應。聖。旨。果。何。人。

することがあるかくして無事に引分けが濟むと牛を東西に分け双方一時に鯨波をあげて元の場所へ曳いて行くそして勝を占めた時は勿論比較的強かつたと云ふ時でも牛は意氣揚々として醍醐高く咆哮し牛の飼主は牛の傍らにて酒樽の鏡を抜いて祝杯を擧げそして應援隊の勢を稱ふのであるがもしも負た時は牛も悄然として眼には涙を浮べ人をも近づけずして無念骨髄に徹するの樣が見へるかくて夕陽西山に暮き晩鴉啼にかへる寂散實を告げて一同歸途につく

馬場孤蝶と闘牛

二十村の闘牛は凡そこんな鹽梅に行はるゝのでとこかに原始的のところはあるがそれが却てこの技を一種の奇習、奇俗であるとして價値づけてゐると思つて居る、殊に東西一對の奇習同しく闘牛の名によつて呼ばれてはゐるなれども四班牙のそれの如く殘忍なるところは微塵もないこの點いさゝかもつて誇とすべきである西班牙の闘牛

牛肉ずきの隈公

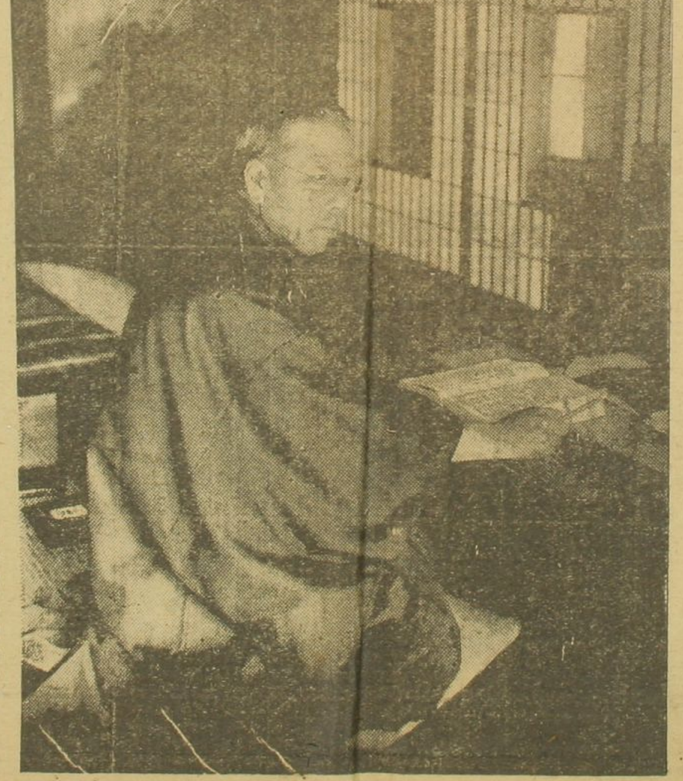
本年は丑か……丑の年支にちなんでの話と云へば誰も越後で思ひ出すのは二十村の闘牛であらう。少し遠方では嵐山附近の桑の牛祭だの鶴宗の十牛、支那流の詩人は牧童をや、たらに材料につかひ、ボーイは譯すると牧童であるけれども皆、荒くれ男で、博奕をやつたり、なぐり合をやつたりして常にバーを騒がせる人物である。自分はこれ等いろ〳〵のものを、委しく語るの知識も、暇もない。今は大好物の牛肉について語つてみようと思ふ。

そも〳〵日本人が牛肉を食ひ初めたのは何時頃からであるかそれも詳べたとはないが比較的近頃の事かと思ふ。多分御一新前位であらうかと思つてゐる。勿論外國人が日本へ來た、その結果として日本人も矢張牛肉を食ひ馴れたと云ふと、はかなり早い頃からあつたかは知らないが、それは極めて少數の範圍に行はれたので、自分の知つて居るところでは水戸烈公がひとく牛肉を好まれたと云ふことを、會てなにかについて聞いたことがある。また大隈老公がこれも非常に牛肉好きであられた。隠れもない事實は老公の若い時分長崎に居られた頃てあつて、長崎の下宿屋某、今丁度その家の主婦は五十をこえた位の婦人であるが、老公下宿時代には三四歳の頑是ない子供であつて、よく老公に抱かれた位のものであつた、その婦人の語るところによると、老公の牛肉好きは大變のもので毎日の如くに牛肉の注文がある。すると母が臺所がくさくなつて困ると、何時もこぼしたものだ。そんなわけで牛肉好きの大隈公は、會ては佐賀の閑叟公に牛肉をすゝめたことがあつた。閑叟公もそれを味はつてみると、おつな味がするのでひどく喜ばれた。そしてその後またやつてみたくなつたので、執事をして大隈公にその事を傳へしめた。その時の手紙が今も殘つてゐる。その手紙によると牛肉と一緒に料理番をも送して臭れると書いてある。

大隈老公は晩年になつて動もすると牛鍋の事を思ひ出され、俺もこの歯では牛鍋が食ひなくなつたとて時々遊慨の聲をもらされたことがある。

一体牛肉を鍋に入れてめい〳〵が勝手に煮て食ふ、一種面白い仕方であつて、牛肉は外人がさかんに食料として それを煮つて居るとは云ふまでもないが、牛鍋式にこれ を食ふのは日本の特色で、外人は窓にそれを羨んでゐるとのことである。この牛肉と云ふ奴、見たところではそれほどでもないが食つてみると存外淡泊で、大味ではあるが食ひやすく嚥味がない。また消化もよい、如何に多量に食つても腹に障りを生ずることがない。日本の習慣として非常に多量に用ゆる、それを 外人が見て日本人は贅澤であると云つて驚いてゐるとのことであるが、無理もないわけだ西洋人は僅に一片のビーフステキで滿まして居る。日本人の分は形こそ小なるビーフではあるが、それを幾十片、甚だしきは幾百片となく食ふのであるから西洋人の見て驚異とするのも無理はない。

自分ともの書生時代なんとには一ツ橋の大學の書生の爲に、神田今川小路、小川町、神保町筋に非常に澤山の 牛肉屋が軒を列ねてあつたもので多くの書生は毎晩の如くにそこへ入り込む。その當時は如何にも廉なるものであつて、今はハツキリ記憶はないが一鍋一人前十錢位のものであつた。勿論今日の如くロース、ヒレ、タング等それ〴〵階級を附して賣るとはなかつたがしかし上肉下肉の差別はあつた。この廉なる食料を相手に酒だ飯だと云ふて大勢よりたかつて突つきながら議論を闘はす、勿論牛肉屋は入込てあつて一室に幾組も入つてゐる。一種の興味のあつたもので、今日では民衆食堂と稱するものが方々に出來て居るが、恐らく日本に一番最初に起つた民衆食堂はこの牛肉屋であらう。これは決して或る階級に限られて、下等の階級だけが炊食するところてなく、學者も行けば華族も出かける、紳士の如きは頗るの健喰家で、まだこの上に 蕎麥の二つ



してゐた某の如きは頗るの健喰家で、まだこの上に 蕎麥の二つ位は食はれると云ふてゐた。

こんな馬鹿話をすればまだ〳〵いくらもある。自分の經驗に於て、牛肉を見て一種痛快の感に打たれた一事は、青鳴に行つた時のことである。こゝには獨逸の經營した非常に大きな屠牛場がある。青鳴は牛の名産地で、神戸牛が非常に美味だなど云ふてゐるがその實は皆青鳴牛なのだ。自分の見たのはこの屠牛場が日本の手に歸した時分であつたが、中に入つてみて如何にもそこの規模の大なるのに驚かされた。百坪以上もあると思はるゝところに鐵の柵が縱横に廻され、檻の如きものが作られてあつてそれに皮をむいて臓腑をとつた牛が五六十頭もブラ下げられてゐる。こゝは云ふまでもなく冷藏庫で、一見なんとなく凄壮の感に打たれざるを得なかつた。血は流れてゐる、一種の臭氣が漂つてゐる。しかしその臭ひは牛肉の臭ひで穢臭ではない。自分の如き牛肉好きはその臭氣に辟易もせずに、むしろ痛快に感じてゐた某の如きは頗るの健喰家で、まだこの上に 蕎麥の二つ

の壁が今日までも不拔變持藏されてゐる。

東京で一番初めに起つた牛肉屋は四谷の三河屋であると聞いて居る。これは維新の初に陸海軍の御用を勤めたに始まつて居り神田小川町の中川もふるくから名高かつた牛肉屋である。この三河屋と思ひ出さるゝのは私どもの舊同窓、一ツ橋大學時代の學友がまだ二三十は生き殘つてゐる。この範圍には大臣もあれば學者も居る。多くは學界の明星で人物が少くない。そして年齡は六十五六位のものが多數を占めて居る。これ等のものが書生時代を記念する爲に一年一二度三河屋に會して牛肉會をやる。ツイ先頃も一會を催したのであつたが、その時の出席者は少くて十一人であつた。なんしろ昔の如き意氣は年と共に、衰へたもので、その証據には一向に酒を飲むものがない。僅に三人だけが左黨振りを發揮してゐた。只肉を食つたには驚いたものだ。勘定をする時に調べてみると五十幾人前を食つてゐる。十一人のうちで酒ばかりを飲んで餘り多く肉をとらなかつた三人を控除すると八人となる、この八人が五十幾人前かの牛肉を平げたとすると一人平均七人前位に當る。その人々はみな 六十五六の老人だ。この事を考へるとまだ〳〵書生時代と同樣に一向に胃腑は衰へて居らないとが知られた。中にも會て長崎に知事を

昇平已治文明化。皇澤無窮又二春。
六
萬象紛新淑氣湧。聖時上頌答昇平。
簡樸野水黃昏後。思到梅花不世情。
七
陰初見早梅新。雪裡香野寺春。
孤標安顧無一事。乾坤容此太平民。
松舟 永井 鐵
磨屏天地已霽明。一笑迎新酒細傾。
氣々祥雲膨帝宅。熙々麗日映王城。
野無遺老謳歌徧。朝有哲人寶宇清。
何幸此身逢盛世。慰波駕見滿孔瓶。
漁村 小林 芳之進
松竹千門色。旭旗萬戶翩。慰波
似海。惠澤溢如泉。父老醉携酒。
兒童放紙鳶。野人生聖世。謳頌樂
新年。

越南 山田 鑒
山光水色變春容。聖化蒸埃雨露濃。
方外返民無所補。昇平作頌愧凡庸。
二
蒼々東海接遙天。白玉美蓉帶瑞煙。
初日映梅香滿室。春風又迎太平年。
三
開端聽盡五更鐘。春意清新佳氣濃。
一樽屠蘇迎旭日。淋漓染翰畫美蓉。
四
好對春盤把酒杯。昇平佳氣醉中催。
未消屋角臘前雪。忽地東風吹老梅。
五

大州 [illegible]
舊。萬象紛迎新。北斗轉長柄。
東風蕩蕩。千門啟四海。聖
德民。鼓腹酒樽司。鑑跡鳥兎。
清嬉多逸興。獨占草堂春。梅妻鶴
子外。坐上無雜賓。醉餘吟欲盡。
推窓碧嶺鮮。

東風 [illegible]
堯日舜天達聖辰。群賢雷踏國威新。

も八も、車屋も人足も入り込む、少しも身分の高下等を論するなく一堂に會すると云ふ式の早く開けたのは牛肉屋である。こじた。そして宿へ引揚げると特に牛肉を命じ一杯に喫して快とさけんだものである。（市島春城大人談）

の闘牛

習も衰微に傾いたのであつたがその後また許さるゝことなつて今日に至つて居るその闘牛のやり方は昔時、今時も少しも變はつたことなく闘技としての角力のそれの如く猶侠然たるものであるとのことだ二十村出身で能く生活をしたとのある某の談記録によつてそれを記してみやうならば

春の一番角突き

闘牛のことを二十村では牛の角突と云ふて居るかこの角突の催しは春と秋とで春の催しは四五月の頃一番角突と稱して雪の消へたばかりの頃村々で申合せ毎年番を定めて行ふことになつて居る一番角突の時が最も賑やかで牛にも盛装をさせれば見物のものも今日を晴れと着かざつて出かけるので非常の盛況を呈するいよ〳〵その日が定まつて村々へその案内があると闘牛の飼主は牛若い家をしてその飼育方に心を配らしめ飼すまや、糠を澤山與へるばかりか中には餅をついて食はせるものもあるそれから水でもつて軀を洗ひ後胡桃油をにて新裝し牛の鼻輪の先に鳥の毛を挿みたるものを肩にして曳き出すのであるが鼻輪の先に鳥の毛をつけ置くのは角突きの時には古き鼻輪をすてゝ新しいのを用ひるのが例となつて居り角闘終はつて後鼻孔にさし込むに便利なるやうかくするのであまた鼻輪を若い家が持ち行く時は何れの牛とも取組ませる意思の表示、目標ともなるのであるこの時は熟心なる愛牛家は自途に際して牛をば神棚の前に曳き行き切火をかけ神酒をさゝげ武運長久當日の全勝を願り座敷の口より曳き出すもある全く戦場に赴く勇士の待遇だ

晴れの角突場所

それから角突の場所は四方高く一方開きたる平地の五六百坪もあるところに設けられ見物人は高いところに座を占めて見物し牛と牛捕若い衆とはその平地にて活動するのであるが牛を闘牛場に曳き来る時は牛をして先づ地理を知らしめる爲に彼方、此方と曳き廻し殊に危險と思はるゝところへ連れ行き一歩を誤る時は敗を招くと云はぬばかりに導き敢へ然る後山手の驛留所へ連れ行くのであるかくて日漸く

角と角と相撃つ

かくて曳き出したる牛は東西に分れ双方偏頗なきやうなるべく中央に進ませ牛と牛と睡るゝ二三間位のところで鼻輪を引き抜きそして取組ませるのである、牛の中には術策を弄しわざとわき腹の体を裂ぶて敵の油断に乗せんとするものもあるかくして互にジリ〳〵一歩一歩を進め慮よ敵機の熟するや渾身絶りをもつて滿たし電光石火の勢ひにて取組まない中には術策を弄しわざとわき腹の体を裂ぶて敵の油断に乗せんとするものもあるかくして互にジリ〳〵一歩一歩を進め慮よ敵機の熟するや渾身絶りをもつて滿たし電光石火の勢ひにて取組ませるのである、牛の

一女と称する程の男子の秘密を探る

一女は男の姿を変じて男の業を為すもの

一女は男の姿を変じて男の業を為すもの

物を探ること一時の度胸を探るべし

一どんなあぶない時でも決して一件と指を染む

一男の妓女に執着すること甚だしく

金の欲望の為に殺人を敢て

一女の秘密を探ること障碍あるべし

一時殺しの大切の秘密を取り行なす

泣くこと女人の如し

涙を要す、今は性友

情を要すと説く

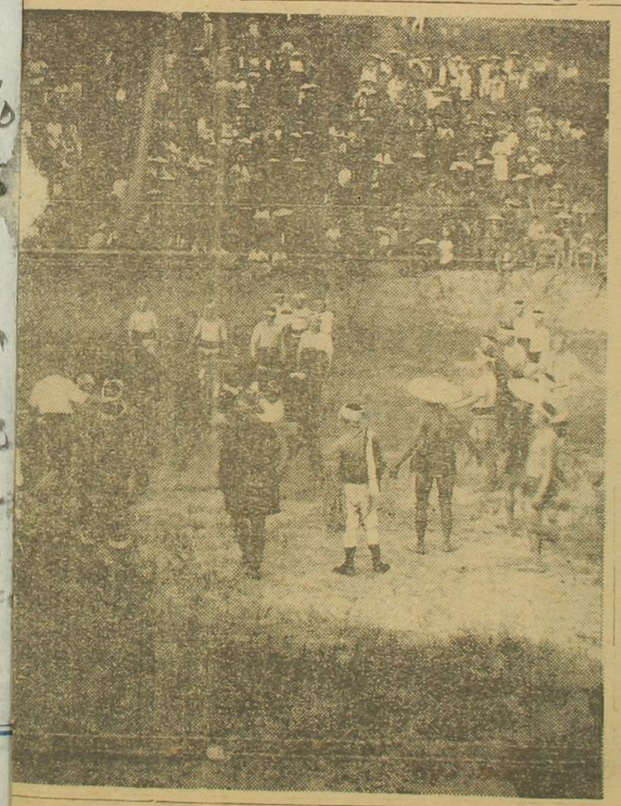
○新年三日の熱海と行き場所の道連の好者にあること上の巻

闘牛

暫も衰微に傾いたのであつたがその後また時さるゝとなつて今日に至つて居るその闘牛のやり方は昔時と、今時も少しも変はつたとなく國技としての角力のそれの如く旧格依然たるものであるとのことだ二十村出身で記者生活をしたとのある某の覚記録によつてそれを記してみやうならば

春の一番角突き

闘牛のことを二十村では牛の角突と云ふて居るがこの角突の催しは春と秋とで春の催しは四五月の頃一番角突と稱して雪の消へたばかりの頃村々で申合せ毎年番を定めて行ふことになつて居る一番角突の時が最も賑やかで牛にも盛装をさせれば見物のものも今日を晴れと着かざつて出かけるので非常の盛況を呈するいよ〳〵その日が定まつて村々へその案内があると闘牛の飼主は牛若い衆をしてその飼育方に心を配らしめ鼓すまや、糊を澤山興へるばかりか中には餅をついて食はせるものもあるそれから水でもつて軀を洗ひ後胡桃油を



塗り出すのであるが鼻綱の先に鳥の毛をつけ置くのは角突きの時には古き鼻綱をすて〻新しいのを用ひるのが例となつて居り角闘終はつて後鼻孔にさし込むに便利なるやうかくするのでまた鼻綱を若い衆が持ち行く時は何れの牛とも取組ませる意思の表示、目標ともなるのであるこの時は熱心なる愛牛家は首途に際して牛をば神棚の前に曳き行き切火をかけ神酒をさゝげ武運長久當日の全勝を祷り座敷の口より曳き出すもある全く職場に赴く勇士の待遇だ

晴れの角突場所

それから角突の場所は四方高く一方開きたる平地の五六百坪もあるところに設けられ見物人は高いところに座を占めて見物し牛と牛捕若い衆とはその平地にて活動するのであるが牛を闘牛場に曳き来る時は牛をして先つ地理を知らしめる爲に彼方、此方と曳き廻し殊に危險と思はるゝところへ連れ行き一歩を誤る時は收を招くと云はぬばかりに導き教へ然る後山手の繋留所へ連れ行くのであるかくて日漸く

大村横綱の出場と共に場面は一変し悦み合つて敵を案かんと容易に取組まない中には術策を弄しわざとわき視の体を装ふて敵の油斷に乘せんとするものもあるかくして互にジリ〳〵歩一歩を進め意と戦機の熟するや渾身怒りをもつて満たし電光石火の勢ひで両方の相撲か激しく機會を見て甲方の若ものは乙の牛を捕へ乙方の若ものは甲の牛を捕へるこれは捕へ方が一刻でも後るれば後るゝだけ不利益となるから公平を期する爲かくするのである

大村横綱の出場と共に場面は一変し悦み合つて敵を案かんと容易に取組まない中には術策を弄しわざとわき視の体を装ふて敵の油斷に乘せんとするものもあるかくして互にジリ〳〵歩一歩を進め意と戦機の熟するや渾身怒りをもつて満たし電光石火の勢ひ

については馬鹿孤蝶によつて書かれたものがある西班牙のゝは二十村の如くに牛と牛とを角せしむるのではなくして牛と人とを闘はしめるのである一方が猛牛、一方が人間この對象からして戯風味のある

（以下十四面へ續く）

山岸製油所
電話 番号六四八番

社名 新潟市豊照町
久保田鑄工場
久保田鐵工所
同 發動機製作部
同 酸素鎔接部

新潟市本町通九番町
久保田金物店
天然酸素及吸入用器具一式販賣部

鑛業株式會社
炭特約店
佐藤重信商店
新潟市西堀通六番
電話一二九三番

新潟材木組

正

賀正
元祖 東京羊かん

賀 糸長商店

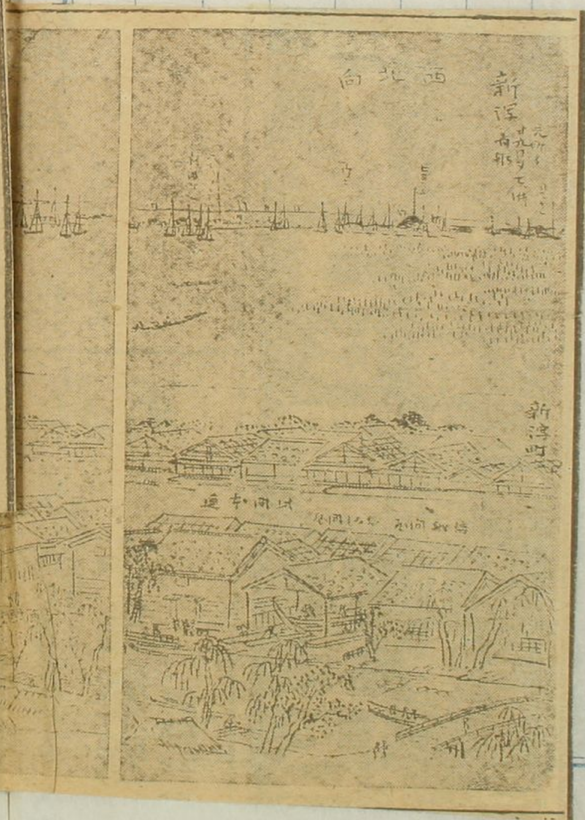
年賀缺禮

支店 中

賜東宮職御買上榮
越後名菓 越の雪
本店 長岡市岸
新潟市東堀前通六番町
取次所 若清商店
電話七一三番
振替東京三三二九番

これて一層興趣の深いものがある、市街のスケッチは今の西堀通で其後が古町らしい

□故きを溫ねて新しきを知るといふ。茲に新春の紙上に於て曾て新潟を飾つた繁昌の彼樓と、それをめぐる其時代の空氣を髣髴させることの出來たのは記者の誇とする



名匠の筆に殘つた

古き新潟の片影

畫面から浮ぶ時代の面影

其昔の花街趣味

□長谷川雪旦といへば江戸名所圖繪によつて著名な畫家だが、雪旦が出羽地方を歷遊し、その間に越後を遊歷し、其時新潟にスケッチの筆を留めたことは恐らく之を知る人が少かろう。雪旦に即して傳へらるゝ繪畫も少くはないが、今はそれを省くとして、其スケッチは遂に上木されずして終つたらしく其後になつて疎されたものが、今好事家の手に秘藏されてゐて、幸に原圖の眺りに接され、其中の極めて少數な繪畫が家の間に珍藏されてゐる。茲に掲ぐるものは齊藤市郎氏の所藏に係るもので其中より特に新潟に關する部分丈けを寫眞版として紹介する。

□長谷川雪旦といへば江戸名所圖繪によつて著名な畫家だが、雪旦が出羽地方を歷遊し、その間に越後を遊歷し、其時新潟にスケッチの筆を留めたことは恐らく之を知る人が少かろう。雪旦に即して傳へらるゝ繪畫も少くはないが、今はそれを省くとして、其スケッチは遂に上木されずして終つたらしく其後になつて疎されたものが、今好事家の手に秘藏されてゐて、幸に原圖の眺りに接され、其中の極めて少數な繪畫が家の間に珍藏されてゐる。茲に掲ぐるものは齊藤市郎氏の所藏に係るもので其中より特に新潟に關する部分丈けを寫眞版として紹介する。

□吐齋によつて先づ最も知りたい一の妓樓――といふよりも實際新潟の茶屋が纏つて來たこの新老屋の繁昌ぶりや、其後どうして沒落し、又其遺族などはどうなつたかといふ點から推して、新老屋に關する知識にもなるので、隨分故老などに分故老などに明確に答へるものが一人も無かつた。併し吐齋から考へると當時新潟の茶屋が纏つて來た其後所謂若狹屋火事で焼失するまで茲に一番町（四ッ町）でこの三ノ丁の會津屋と相對してゐたとも考へられて一層興趣の深いものがある、市街のスケッチは今の西堀通で其後が古町らしい

□故きを溫ねて新しきを知るといふ。茲に新潟の新上長に於て曾て新潟の位置を畫つた昌の妓樓と、それを

（十三面より續く）

ア下されば、どうぞ此の方に拔けて下さいと、調子が変つて来た。

やがて、しばらくの間、一緒に話をしてゐた一人の男が、そこへ入つて来て、

「お前さんは、何処の方だ。」

と、問ひかけた。

「私は、東京の者です。」

と、答へると、

「東京の者だと、何処の方だ。」

と、重ねて

（日刊）（明治廿五年三月廿五日第三種郵便物認可）　大正十四年一月一日　THE HOKUETSU SHIMPO　第一萬四千五百二十一號　（木曜日）

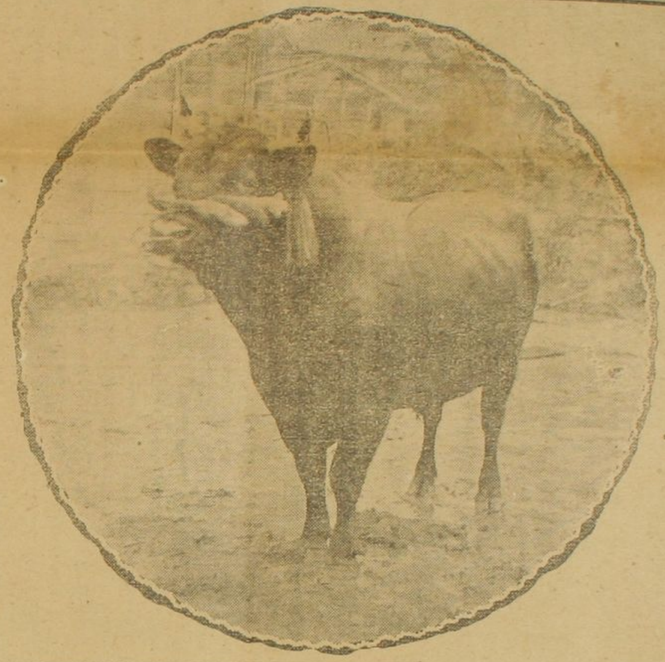
北越新報

第四

電話
編輯局 湘一六〇一
同 同 六六
營業部 湘一六五一
同 同 八〇三四

發行人兼編輯人 佐藤善

發行所 長岡市大手通二丁目 北越新報社



二十村の闘牛

一種の民衆娯樂

二十村と稱しても闘牛の行はるゝは南荷頃、虫亀、小栗山、鷹谷、木澤、葛、竹澤、濁澤、鳥谷、中野の各部落に亘つてのことゝ時は勝敗を爭ふ、雌雄を決するにつけられた、餘り若い衆、今の言葉で云ふならば慰撫、ファンなるものが時々喧嘩をする、偶には血を流すこともあつたので警備に於てこれを禁じ爲に二十村の誇りとするこの奇習も遂に微に傾いたのであつたが、それの後また盛ざるゝとなつて今日に至つて居るその闘牛のやり方は昔時、今時も少しも變はつたことなく獨特依然たるものであるとのことであつてわが越後に於ても二十村の外三島郡の宮本にてもこの技能を減せられたのとあるが今も尚それが存して居るかどうかは知らない闘牛の起源、その行はるゝに至つた理由等については樣々に說くものあるが、一説に曰く、島が馬四郎義良を名として行はるゝにしてもその實一種の遊戯、一種の娯樂の爲に減せらるゝと同じやうにその出發點は山間僻陬の地何らの娯樂機關を有せざるところからそれが減ぜらるゝに至つた民衆娯樂と稱する方が當つてるべく只二十村のみは伊豫宇和島に行はるゝ略奪的の無茶な琉球の各地にて行はるゝやうな興行的のものでもなく極めて民衆的で、そして開放的で、純なるところがあるとされてゐる

一時衰微に傾く

春の一番角突き

闘牛のことを二十村では牛の角突と云ふて居るがこの角突の催しは寒ると云ふ説と、雪の消へ始めの頃一番角突と稱して雪の消へたばかりの頃村々で申合せ毎年一番角突の時期を定めて行ふことになつて居るにも盛裝をさせれば見物のものも今日を晴れと着かざつて出かけるので非常の賑況を呈するいよ〳〵その日が定まつて村々へその案内があると闘牛の飼主はほ牛若い衆をしてその同僚方に觸れの牛とも取組ませる意思の表示、目標ともなるのであるこの時は熟心なる愛牛家は百途に際して牛をば神社の前に曳き行き切火をかけ神酒をさゝげ武運長久當日の全勝を願り座敷の口より曳き出すもある全く戰場に赴くにて編裝し牛の鼻綱の先に島の毛を挾みたるものを肩にして曳き出すのであるが鼻綱の先に島の毛をつけ置くのは角突きの時には古き鼻綱をすてゝ新しいのを用ひるのが例となつて居り角闘整はつて後鼻孔にさし込むに便利なるやうかくするのであつた鼻綱を若い衆が持ち行く時は何れの牛とも取組ませる意思の表示になり、牛の鼻綱の先に島の毛を挾みたるものを肩にして曳き出すのであるが鼻綱の先に島の毛をつけ置くのは角突きの時には古き鼻綱をすてゝ新しいのを用ひるのが例となつて居り角闘整はつて後鼻孔にさし込むに便利なるやうかくするのであつた

晴れの角突場所

それから角突の場所は四方高く一方開きたる平地の五六百坪もあるとこころに設けられ見物人は高いところに座を占めて見物し牛と牛、若い衆とはその平地に活動するのであるが牛を闘牛場に曳き來る時は牛をして先づ地理を知らしめる爲に彼方、此方と曳き廻し殊に危險と思はるゝところへ連れ行き一歩を誤る時は收を招くと云はぬばかりに厚き敬へ然る後山手の驛所へ連れ行くのであるかくて日暮れ傾き午後の二三時頃となると方々から集まる牛もその數を增し武者振ひしてゐる樣は餘に靈に響いて物凄く全山を震撃するばかり先づ三歳、四歳の小牛より取組ませいよ〳〵六七歳の闘取組となるや各村の牛若衆連は場の一隅に打寄り甲村の某牛と乙村の某牛とを取組ませはどうだ、それは同年なれど枝幹に相違あり、むしろ丙村の某牛と取組ませたる方可ならんなどと取組方に仲々の苦心を費し回の交渉を經て後牛の飼主、牛若い衆、村の應援隊等の同意を得こゝに一同手を高くさゝげて兩度もしくは三回パチ〳〵と手を打ちて約束、申合せの出來たる事を証するのである

觀客片唾を飲む

取組が決定すると牛若い衆は先に立ちて繋いである牛のところへ行くそして牛を取卷き攘來れる神酒を牛に吹きかけ闘援者に飲ませ、しつかり結むせとの掛け聲もろともに牛若い衆が曳き出せば應援隊は聲を張あげて牛をば晴の角突場所、闘牛場乃ち戰場に送りこむ牛は勇んで鼻けこむ見物人は片唾を飲んで牛の方に視線を注ぐ滿山の觀客一段の活氣と緊張味を加へ興はこれから湧いて來るのだ

角と角と相撃つ

かくて曳き出したる牛は東西に分れ双方鼻頭をきやうなるべく中央に進ませ牛と牛とが觸るゝ二三間位のところに對峙せしめたところで鼻綱を引き拔きそして取組ませるのである、牛の中には直に飛びかゝるものもあれば大相撲になると大抵はかたみに睨み合つて敵を突かんと容易に取組まない中には鼻綱を牽しわざとわき腹の体を裂ふて敵の油斷に乘せんとするものもあるかくして互にジリ〳〵一歩一歩を進め應援隊の熱するや激昂するや電光石火の勢ひをもつて突進せしめ或は突き或は引きして突撃的に攻撃をとるものもあればまた敵に乘せられて闘牛場の外に横ざまに身をツと寄せて角を牛の前足をからみわか身體をば牛の背に托する又牛の後足に綱を結びて引くのもある大勢のものを捕まへる、そのうちに鼻を持ちあげて鼻綱を眞通するのが順序だしかし暴猛なる牛になると角を振つて容易に人を近つけないその爲往々牛若い衆の怪我をするとがあるかくして無事に引分けが濟むと牛を東西に分け双方一時に鯨波をあげて元の場所へ曳いて行くそして勝を占めた時は勿論比較的強かつたことは云ふ時でも牛は意氣揚々として鬨高く喧嘩し牛の飼主は牛の傍らに立つて應援隊の勞を稱ふのであるがもしも負た時は牛も悄然として眼には涙を浮べ人をも近づけずして無念骨髓徹するのが見へるかくて夕陽西山に春き暮れ場にかへる頃散會を告げて一同歸途につく

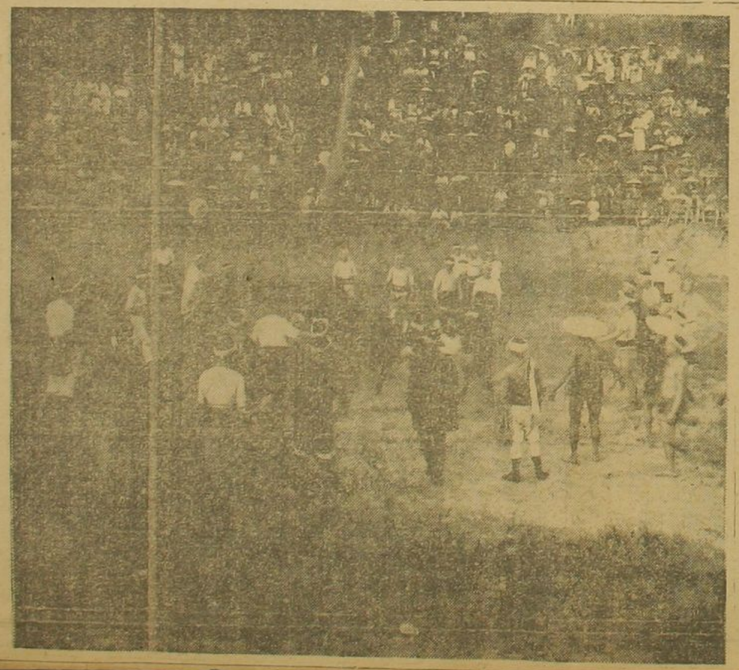
馬場孤蝶と闘牛

二十村の闘牛は凡そこんな樣に行はるゝのであるこゝに原始的のところはあるがそれが知てこの技を一種の奇習、奇俗であるとして價値づけてゐると思つて居る、殊に東西一對の奇習同じく闘牛の名にして引分けるやうだ角闘數十分の一の大抵は終局の勝負を見ずして双方疲れた樣子が見へるは直に飛びかゝるものもあれば大相撲になると大抵はかたみに睨み合つて敵を突かんと容易に取組まない中には鼻綱を牽しわざとわき腹の体を裂ふて敵の油斷に乘せんとするものもあるかくして互にジリ〳〵一歩一歩を進め應援隊の熱するや激昂するや電光石火の勢ひをもつて突進せしめ或は突き或は引きして突撃的に攻撃をとるものもあればまた敵に乘せられて闘牛場の外に横ざまに身をツと寄せて角を牛の前足をからみわか身體をば牛の背に托する又牛の後足に綱を結びて引くのもある大勢のものを捕まへる、そのうちに鼻を持ちあげて鼻綱を眞通するのが順序だしかし暴猛なる牛になると角を振つて容易に人を近つけないその爲往々牛若い衆の怪我をするとがあるかくして無事に引分けが濟むと牛を東西に分け双方一時に鯨波をあげて元の場所へ曳いて行くそして勝を占めた時は勿論比較的強かつたことは云ふ時でも牛は意氣揚々として鬨高く喧嘩し牛の飼主は牛の傍らに立つて應援隊の勞を稱ふのであるがもしも負た時は牛も悄然として眼には涙を浮べ人をも近づけずして無念骨髓徹するのが見へるかくて夕陽西山に春き暮れ場にかへる頃散會を告げて一同歸途につく

牛若衆牛の捕方

牛通に鼻綱をするものになると鼻綱に横ざまに身をツと寄せて角を兩手にしつかと握り足にて牛の前足をからみわか身體をば牛の背に托する又牛の後足に綱を結びて引くのもある大勢のものを捕まへる、そのうちに鼻を持ちあげて鼻綱を眞通するのが順序だしかし暴猛なる牛になると角を振つて容易に人を近つけないその爲往々牛若い衆の怪我をするとがあるかくして無事に引分けが濟むと牛を東西に分け双方一時に鯨波をあげて元の場所へ曳いて行くそして勝を占めた時は勿論比較的強かつたことは云ふ時でも牛は意氣揚々として鬨高く喧嘩し牛の飼主は牛の傍らに立つて應援隊の勞を稱ふのであるがもしも負た時は牛も悄然として眼には涙を浮べ人をも近づけずして無念骨髓徹するのが見へるかくて夕陽西山に春き暮れ場にかへる頃散會を告げて

（以下十四面へ續く）



兩牛死力を盡しての角闘（小栗山）

（十三面より續く）

る鰐であるかの如くに考へさせられる事實西瑠璃の技は猛牛とカベ編蝙蝠は、それを寄ろ寄ひに、双方アドオル、ピカドオルによつて行はるゝので如何にも、ぶつ、血も就いた戰ひは天地開闢以來の驚き、ところがある馬鹿君の書いてゐるところでも幾度牛ぱ山から轉け寄る緩のやうに前へ突進する一瞬間のやうに檢の曲つたのが見へる程の殺い鋒先が牛の鼻（突き鋒さ）とそれから全く恐ろしい、幕が演ぜられるのだ孤り立つた戰ひの力のある頭は馬の腹の下に見えなくなる角が馬の腹へ根本まで沈む牛が乗者を馬をさし上げると見る間に空陽へあがり馬の擧げられた後ばかり見へると乗者は地へ落る馬は彼の上へ轟かり倒れると後のメリ〳〵といふ音が聞へる馬、乗者、そして後から一緒にゴチヤ〳〵した塊を遠くそれを牛が踏付け〳〵その上角で抉ると云ふやうな文句が書きれるこれは牛がカベ〳〵ドオルとつてなぶられる赤いケエプでスツカリ怒つてしまい狂氣の如くなつて狂ひ廻るそれを馬上のピカドオルが槍に て突つつき〳〵さらに一層怒らせ狂はせたその揚句が牛がピカドオルの乘つてる馬を角に突いたところの光景を描いたのである

赤く染まる馬場

この演技に關れない、ものは只これだけでも面白き喜べる書いてあつてかくして幾四かの馬が猛牛の角の餌食となり馬場を赤く染めた上最後に牛を屠るのであるがこれが國に馬場は馬の血、馬の臓腑、牛の血にて凄惨の場面が呈せられるのである馬鹿君もの終りに於て「かういふ見物を火の描寫のみで知りそれから後になつて自分自身の眼でそれを見る人は老へざるを得ないのだ死の如きかくまで凄いかくまで絶對で絶洋得られざる物を見るのを最高の樂として喜ぶはなんといふ惡べき人民であらう」と書いてゐる

偶話二つ

西方木冠

一

イージーゴーインといふ言葉が、いつの頃からか日本語として使はれてゐる、日本語である以上、語本來の意味と違ふは勿論であるが、つまり、因縁の事は成るべく避けて一時讓歩化なり、處世上極樂左道を行かうとする、卑怯な度をいふのであるらしい。といと具体的には何のやうな事になるか、それは鳥と獣との合戦を例るほうが一番に分かりがよく具体的だ。鳥と獣との大合戦それはいつの頃になるか、とに角いつの人間が人間らしくなかつた頃から鳥獣分先きだ。そして鳥獣これは日本とかイギリスとか限られた國の話ではなく、どこの人間に限り分る山來事であるらしい。だかつて「詳しい說明は無用と思ふがあの時に蝙蝠のとつた態度が、そのまゝ愛にいふイージーゴーインの初めであつたといふ事である。

蝙蝠はその度毎に鳥ともなれば獣ともなつた。衆目をいゝ鑒極に誤魔化して自分だけは何ういかしし勝つ仲間に入りたいと焦つた譯である。

獣日後に兩軍はひどく疲れた餘が、併しながら一面思へつてみれば斯うした裏合、鳥か獣かの察者の居なかつたといふ事は蝙蝠の過ぎ以上に遺憾だ。なぜかといふに、蝙蝠は實に鳥目晝夜なのだ

二

かつて兎と龜との競走があつたとか、動物界では人間と云つなぐ家につかないうちに、その森き

とか體休の知れぬ主義のさばり出て、すぐに濟んだら事を思ふと、返すゝも殘念である。

番早いかといふとになつた時、兎が早い、いやそれよりも龜のほうが早い、といふ事になつて、龜がその拿い使者に立つ。

ところが龜は元來足ののろいものである。だから龜が向ふの大に

牛肉ずきの隈公

本年は戌か……戌の一支にちなんでの話と云へば誰も遠後と思ひ出すのは二十樣の闘牛であらう少し遡ぶ方では嵐山附近の奉の牛祭だの鄙宗の十牛、支那流の詩人は牧童をやたらに材料につかひ、牧童は小兒であるかと思ふと活動寫眞に御贔屓のカーウ、ボーイは譯すると牧童であるけれども活荒くれ男で、博奕をやつたり、なぐり合をやつたりして常にバーを騒がせる人物である。自分はこれ等いろ〳〵のものを委しく語るの知識も、暇もない。今は大好物の牛肉について語つてみやうと思ふ。

そも〳〵日本人が牛肉を食ひ初めたのは何時頃からであるかそれも眞べたとはないが比較的近頃の事かと思ふ。

位であらうかと思つてゐる。勿論外國人が日本へ來た、その結果として日本人も矢張牛肉を食ひ調れたと云ふと はかなり早い頃からあつたかは知らないが、それは極めて少數の範圍に行はれたので、自分の知つて居るところでは水戸藩公がひとく牛肉を好まれたと云ふことを、會てなにかについて見たことがある。

大隈老公がこれも常に牛肉好きであつて、ある時分長崎に居られた頃であつて、今より丁度その家の主婦は五十をこえた位の婦人であるが、老公下宿時代には三四歳の頃是ない子供であつて、よく老公に抱かれた位のものであつた、その婦人の語るところによると、老公の牛肉好きは大變のもので毎日の如くに牛肉の注文がある。

すると母が臺所がさくなつて困ると、何時もこぼしたものだ

そんなわけで牛肉好きの大隈公は、會ては佐賀の關要公に牛肉を

をすゝめたことがあつた。そしてその後またやつてみた

味がするのでひとく喜ばれた。

くなつたので、執事をして大隈公にその事を傳へしめた。その

時の手紙が今も殘つてゐる。その手紙によると 牛肉と一緒に料

理番をも遣して與れると書いてある。

大隈老公は晩年になつて動もすると牛鍋の事を思ひ出され、傳

もこの頃では牛鍋が食ひなくなつたとて時々遊慰の席をもらさ

れたことがある。

一体牛肉を鍋に入れてめい〳〵が勝手に煮て食ふ、一種面白い

仕方であつて、牛肉は外人がさかんに食料として それを、つて

居るとは云ふまでもないが、牛鍋式にこれ を食ふのは日本の特

色で、外人は勿論それを羨んでゐるのとである。この牛肉と

云ふ奴、見たところではそれほどでもないが食 つてみると存外

淡泊で、大味であるが食ひやすく嗜味でもある。また消化もよ

如何に多量に食つても腹に障りを生ずることがない。日本の習

慣として非常に多量に用ゆる、それを 外人が見て日本人は贅沢

であると云つて驚いてゐるのとであるが、無理もないわけだ

西洋人は僅に一片のビーフステツキで濟ます居る。日本人の

は形こそ小なるビーフではあるが、それを幾十片、 甚だしきは

幾百片となく食ふのであるから西洋人の見て驚異 とするのも無

理はない。

自分ともの書生時代なんとは一つ樽の大學の書生の寓に、神

田今川小路、小川町、神保町筋に非常に繁山の 牛肉屋が軒を列

ねてあつたもので多くの書生は毎晩の如くにそこ へ入り込む。

その當時は如何にも廉なるものであつて、今は ハツキリ記憶は

ないが一鍋一人前十錢位のもの であつた。勿論今日の如くロー

ス、ヒレ、タング等それ〴〵階級を附して 物るとは なかつたが

しかし上肉下肉の差別はあつた。この廉なる食 料を相手に酒だ

飯だと云ふて大勢よりたかつて突つきながら議 論を闘はす、勿

論牛肉屋は入込つてあつて一室に幾組も入つてゐる。一種の興味

のあつたもので、今日では民衆食堂と稱するものが方々に出來

屋てゐるが、殺らく日本に一番最初に起つた民衆食 堂はこの牛肉

屋であらうと。これは決して或階級に限られて、下等の階級だ

けが飲食するとこなく、學者も行けば華族も 出かける、權

も八も、車屋も人足も入り込む、少しも身分の高下 等を論ずる

なく一堂に會すると云ふ式の早く開けたのは牛肉屋 である。こ

の頃が今日までも不相變持續されてゐる。

東京で一番初めに起つた牛肉屋は四谷の三河屋 であると聞いて

居る。これは維新の初に徳川軍の御用を勤めた に始まつて居り

神田小川町の中川もふるくから名高かつた牛肉屋 である。この

三河屋で息ひ出さるゝのは私ともの酒同窓、一ツ 橋學時代の

學友がまだ二三十は生き殘つてゐる。この範圍 には大臣もあれ

ば學者も居る。多くは學界の明星で人物が少くない。そ して年

齢は六十五六、位のものが多數を占めて居る。これ等のものが書

生時代を記念する 會に一年に二三度三河屋に 會して牛肉會をもる

。ツイ先頃も一會を催したのであつたが、その 時の出席者は少

くて十一人であつた。なんしろ昔の如き意氣は年と共に 衰へた

もので、その酒量には一向に酒を飲むものがない。僅に三人だ

けが左藏振りを發揮してゐた。只肉を食べたのには 驚いたものだ

。勘定をする時に調べてみると五十幾人前を食つて ゐる。十一

人のうちで酒ばかりを飲んで飲り多く肉をとらなかつた三人を

控除すると八人となる、この八人が五十幾人前かの 牛肉を平げ

たとすると一人平均七人前位に當る。その人々はみな 六十五六

の老人だ。この事を考へるとまだ〳〵書生時代と同樣に一向に

胃腑は衰へて居らないとが知られた。中にも曾て長崎に郷事を

してゐた某の如きは頗るの健啖家で、まだこの上に 蕎麥の二つ

位は食はれると云ふてゐた。

こんな馬鹿話をすればまだ〳〵いくらもある。自分の經驗に於て、牛肉を見て一種愉快の感に打たれた一事は、 青嶋に行つた時のことである。こゝには獨逸の經營した非常に大きな 屠牛場がある。青嶋は牛の名產地で、神戸牛が非常に美味 だなど云ふて

るがその實は皆青嶋牛なのだ。自分の見たのはこの屠牛場が 日本の手に歸した時分であつたが、中に入つてみて如何にもそ

の規模の大なるのに驚かされた。百坪以上もあると思はるゝと ころに鐵の柵が縱横に廻され、檻の如きものが作られてあつて

それに皮をむいて臓腑をとつた牛が五六十頭もブラ下げられて

ゐる。こゝは云ふまでもなく冷藏庫で、一見なんとなく凄壯の

感に打たれざるを得なかつた。血は流れてゐる、一種の臭氣が

漂つてゐる。しかしその臭ひは牛肉の臭ひで腐敗ではない。自

分の如き牛肉好きはその臭氣に誘惑もせずに、むしろ愉快に感

じた。そして宿へ引揚げると特に牛肉を命じ、數一杯に喫して

快とさけんだものである。（市島春城大人談）

乙丑新年書懷

小谷鳳仙

昇平已治文明化。皇運無窮又一春。
蔦葉紐新泉氣淡。聖時十紐答昇平。
鶏花卯水流春後。恩到梅花不世情。

三

孤耀安蘇無一事。乾坤容此太平民。
松舟　木井　螢

四

齊諧天地已蠱明。一笑迎新酒細傾。
雪々雲臥帝宅。熙々鼎日映干城。
野無遺老論・限福。郊有人登字・清。
何時此身逢盛世。愚說聚見藩屏。
小林花之進

五

松竹千門色。旭旗萬戶鬧。恩波養
仰海。惠澤被如泉。父老所把酒。
兒童放紙鳶。野人生聖世。鼓腹聲
年年。

滝齋南　七藏

六

後氣運興年新。一望君民和恰春。
賀思詩書根本義。肌膚雪盲果何人。

二

新私天地敬祝第。大江加餘第。大平
仕春々朝鶯老鶯。青空呼欲答休則。
而江　大盤　忠陽

七

夸朝ブ十九年。親ブ四九年。白鶴
北加第。新郷寿雪。望裕蓬萊瓦石。

大地開顔色。陶泓未揮毫。群情已
東風誘緩闌。千門醒遊。四海擊
清緩多逸興。隱占草堂春。梅妻鶴
千外。坐上無雜式。醉餘叫歌聲。
推窓望鳴鶴。

越南　山田　寧

山光水色驚春容。聖化無垠詩客。
方外逸民無所補。肩平作丸愧其扁。

三

開鑰聽盡五更鐘。春意清新自氣濃。
一樽屠蘇迎旭日。沸騰梁編賞芙蓉。

四

着光東布接遙天。白玉雪帶塩慶。
初日映梅香滿室。春風又迎太平年。

大地開顔色。陶泓未揮毫。群情已
東風誘緩闌。千門醒遊。四海擊
清緩多逸興。隱占草堂春。梅妻鶴
千外。坐上無雜式。醉餘叫歌聲。
推窓望鳴鶴。

越南　山田　寧

山光水色驚春容。聖化無垠詩客。
方外逸民無所補。肩平作丸愧其扁。

五

好對春盤把酒杯。昇平住氣醉中催。
未消屠角腦前雪。起知東風吹老梅。

大勢の動物は皆死んでしまつた。もつと早く誰か本當に早い動物が使者に立つてゐたなら、大きな森の動物は皆かつて、世界にはもつと多くの動物が棲つてゐたらうに……（おはり。）

冠木つ

西洋人は僅に一片のビーフステキで沸まして居る日本人の
は形こそ小なるビーフではあるが、それを幾十片、幾だしきは
幾百片となく食ふのであるから西洋人の見て驚異とするのも無
理はない。

自分どもの書生時代なんとには一ツ橋の大學の書生の爲に、神
田今川小路、小川町、神保町筋に非常に澤山の牛肉屋が軒を列
ねてあつたものであつて多くの書生は毎晩の如くにそこへ入り込む。
その當時は如何にも賑なるものであつて、今はハツキリ記憶はな
いが、一鍋一人前十錢位のものであつた。勿論今日の如くロース、
ヒレ、タング等それ〳〵階級を附して煙るとはなかつたが、しか
し上肉下肉の差別はあつた。この賑なる食料を相手に酒だ飯だと云
ふて大勢よりたかつて突つきながら議論を闘はす、勿論牛肉屋は入込
つてあつて一室に幾組も入つてゐる。一種の興味のあつたもので、
今日では民衆食堂と稱するものが方々に出來て居るが、恐らく日本
に一番最初に起つた民衆食堂はこの牛肉屋であらう。これは決して
或る階級に限られて、下等の階級だけが飲食するところでなく、學
者も行けば華族も出かける、權も八も、車屋も人足も入り込む、少
しも身分の高下等を論ずなく一堂に會すると云ふ式の早く開けたのは
牛肉屋である。こしてゐた某の如きは頗るの健啖家で、まだこの上に
蕎麥の二つ位は食はれると云ふてゐた。

こんな馬鹿話をすればまだ〳〵いくらもある。自分の經驗に於て、
牛肉を見て一種痛快の感に打たれた一事は、青鳥に行つた時のことである。こゝには獨逸の經營した非常に大きな屠牛場がある。
青鳥は牛の名產地で、神戸牛が非常に美味だなと云ふてゐるがその實は皆青鳥牛なのだ。自分の見たのはこの屠牛場が日本の手に歸した時分であつたが、中に入つてみて如何にもその規模の大なるのに驚かされた。百坪以上もあると思はるゝところに鐵の柵が縱橫に廻され、檻の如きものが作られてあつてそれに皮をむいて臟腑をとつた牛が五六十頭もブラ下げられてゐる。こゝは云ふまでもなく冷藏庫で、一見なんとなく壯の感に打たれざるを得なかつた。血は流れてゐる、一種の臭氣が漂つてゐる。しかしその臭ひは牛肉の臭ひで惡臭ではない。自分の如き牛肉好きはその臭氣に辟易もせずに、むしろ痛快に感じた。そして宿へ引揚げると特に牛肉を命じ、飲一杯に喫して快とさけんだものである。（市島春城大人談）

二

かつて兎と龜との競走があつた爲めに、動物仲間では（人間と云つとか爲体の知れぬ主義のさばり出られずに濟んだら事を思ふと、返す〳〵も殘念である。

二

一番早いかといふとになつた時、兎が早い、いやそれよりも龜のほうが早い、といふ事になつて、龜がその尊い使者に立つ。

ところが、龜は元來足ののろいものである。だから龜が向ふの大になる森につかないうちに、その森き・

「年の寫眞」……十三面百關の牛は古志郡太田村由龜佐藤新之

昇平已洽文明化。皇澤無窮又一春。
六
萬象維新淑氣滿。聖時上頌答昇平。
園樓野水黃昏後。思到梅花不世情。
七
墻陰初見早梅新。雪裡幽香野寺春。
孤榻安禪無一事。乾坤容此太平民。
松舟　永井　鐵
君扉天地已忘明。一笑迎新酒細傾。
霧々蒸騰帝宅。熙々麗日映王城。
野無遺老謳歌編。朝看賢人衮宇清。
何幸此身逢盛世。恩波慶見滿乾坤。
漁村　小林花之進
松竹千門色。旭旗萬戶翻。恩波深似海。惠澤溢如泉。父老醉巴酒。
兒童放紙鳶。野人生聖世。鼓腹樂新年。
滚齋　南　七藏
後輩氣運頭年新。一致君民和協春。
顧思詔書根本義。服膺聖旨果何人。
二
新歲天地物皆清。大耳加餐茶太平。
伏櫪今朝憐老驥。青冥唯欲答休明。
而江　大鹽　忠順
今朝六十九年春。幾度春來氣自雄。
北邦春盡跡有雪。東籬獲笑瓦石中。

○迎賓館の村荘に寓し、ある例の書斎に坐す、閑に任せて床の小架に陳列されある小冊子を把て見る、皆シェークスピヤに関する豆本なり、前年士行洋行の中、ストラットフォード、ラン、アヴォンより持帰りたるなり

例の豆本全集一架は自分も不持するなれども、特に記すべきものなれば、玩ぶ小沙弥手彫の聖書を縮小したるを要とす、玩ぶ小沙弥自筆のアミリー、豆本としたるなる也、北冊中、ラムレコード、二ヶ所あり、活字に組みたる原稿、花形千貫こんも縮刷されあるが、こんも原書を無きものを深くとるなり、北の小冊を収めたる函箱は、沙弥が送れを受けたる桐箱にて、トリニテー、カレッチャーケの大学校を以て作りたるなり、北のバイブル原書小義し北

寺院に花しまる完也、他の一小冊は聖書より形大なる矢張り豆本なる ストリー、ラブ、セークスピヤ侍入本、標紙に板を用ゐたる、北秋も矢張りトリニテー寺院の大しりなる、おもしろく作りたり、セークスピヤ、ボルスデー、ブック、こんも一年の月日を記し、生誕日を記したる様なるなるが、各日に沙弥の詩を録したる、こんも米国出版なる丸善にあるべきなる也、活字の小冊一個、こんも沙弥自作の詩に因る、矢張ストラットフォードを吸く紀念品なり、白色セルロイドにて作りたる沙弥の小像一基、時小品なる、尚ほ形大なるものなる北宝に掲げあるなる数個なり、者宝さい

河内慕徳の抜本倫敦にうつし掲げられ、トリニテー寺に
買かれある河内机に落りぺンを把るの図像を確細に
まて模さんがが類とうつし掲げられ、外に一二言葉
に元りがが肖像もあり、書斎の一隅に大小の河内
こちらむきあり、河内の絵巻を云いん七敢て述へ
さる也、遠遠なる自筆の帖
と冊しあり、往年机海岸に初めて別荘を営
みてより人々の知れ村に移し、新の角の眺望の
茅屋に庵さんとの気色、漸やく其地を婚ま
茅屋と名付て得りす素びるを知し初恋を
交へて記文一渡あと共を底し、閑に位を全文
をたに録す

十二行

さるうるた情

海内の右野の波の音四季のえしを二月のれ
ちを小料理屋に松とものさてぎ（のらりのかしま
しさに悩ましくて大正八年の秋の末まもなく
しあるたの家をおもひすて河内山手なる
村の一角に地をトして先づの垂蘭を刈り除か
せ新宅を造まむ心ひすかくて明治五年
二月に建前を終へ五月ごろ入りてとまり
す地名村といへる遠く梅屋敷に近き
る二三の家をかへてごこと二十数つうんるきざ
まべきに新義をおのく家をたてり
一棟七間あり、もとより凡山房の

[illegible]ゝ南東ゝ見えるか
さゝ伊豆の海ゝ見ゆ遠く深みゝ和
島西日かに和東ゝ山の風ゝ又赤松の西風
を防めひしめの山西屏風のやうに打立ゝ主
ちなる流くる遠きに近き山く或ハ東南に低く
見おろさゝ田畑ゝ多のあちこち麓をつらぬる
熱海町の家ゝ或ハ海とゝ町の木の間ゝちの
ぞる湯の煙きゝ秋ゝ遠近ゝ寒る梢
のくんゝ柑橘の黄色ゝあかき藪椿
ゝきゝ梅春咲けるはとゝゝハ桃櫻梨書書
の花ゝ黄ゝ葉ゝ菜の花緑ゝ麦の波すゝれ
んぞ〻咲けゝ夏〻ゝ涼く山を

いろゝゝ木々のわかゝ葉ゝ[illegible]四季おりく
此目のなくさゝゝ[illegible]すゝ[illegible]
ゝ明ゝ[illegible]ゝ海と山ゝ南東ゝ
掛くゝゝのつくゝ海を[illegible]
なゝゝゝ[illegible]ゝ

海山の目路のかきりもさゝゝ
おゝ國ゝゝゝ見るかぎりの
山ゝゝゝゝゝ[illegible]ハあれと
住みもたさゝゝよりも老蒼

のしも二百年ハ経ゝゝむとおもへゝ梢の大樹
の二百あゝ国ゝゝ所ゝを双抱ゝゝゝけつゝ
か　一見ハ踏ゝ四方の景色めつゝく時ゝ

静寂乾坤大湖中の月長
てふと口すさみつゝ飽ぬ
人の世のすがたも見あきぬ
移りかはる海山おいる
かきうつす爪おかし　朝ぼらけ
やまいろ〳〵に秋のいろ〳〵
老い柿のいさゝ玉石板のをち方より
ちゝ原も見ぬ秋のあけぬ
山を見て柿うゝあけ海を見て
住をおもふ或の住居
かくうつろふつゝ日を経しまゝ一月も過ぬ
をうしにもくらうるも紫某わう屋の事

おもてに一棟の茅葺をうつしを建て
まゝけぬやのもなかさかゝとをひえてわう命ゝ
めつゝ前山のすがゝをなをけひかゝれてつの
かゝたをひのゝ大すきみのまつの古さまし
廃けもーこつのやのもなかの自然と
うつゝし妻をうくすやのもなか
うひけ家とうんをかこたゝ比家ゝ
ゆのをとうをを住あるわの妻ゝ婦を
月かゝ千砧聞うもこくへやし
ちをうつ海山をさへきんう家
ちあまを人しすまはやみかゝとゝもおもひあき
ゝぬひ人まけんを何かゝ家ゝ家ゝ家ゝ後こゞ一

永二庭訓おちゝ人の御ゝしことゝ[illegible]の文を住む
人々訪ひくる人々ゝゝ四年を経つゝ[illegible]ひと思
ひ絶えるむと力めつゝ[illegible]なきつゝ
色うなし

何ゝおもひとゝつく世をを経し
[illegible]の文を[illegible]
我[illegible]ひう思ひとゝて[illegible]をちうゝ
[illegible]おもひ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]かゝ[illegible]
かゝうゝ[illegible]くゝ世をし経きしを
[illegible]ゝ[illegible]四年[illegible]
[illegible]思ハぬ[illegible]

十二行

七[illegible]つゝ[illegible]
さゝ[illegible]ゝ[illegible]
十三年九月の大震[illegible]
[illegible]
[illegible]

年二月十五日

[illegible]

おもわをかくしまのしこくも海

四年[illegible]

[illegible]

[illegible]

けれ人の世を論[illegible]

何[illegible]

[illegible]

四十年をかへりえすれとこれに似し

うんかくさんひのあり一たひのあり

かくて[illegible]をこいれ文)その若子[illegible]の不潔天

十二行

真自[illegible]の生と成[illegible]全うせむよすがの[illegible]

[illegible]

さ[illegible]の比[illegible]

わ[illegible]

一要江之ハ薩摩麻野谷とゆ村ニ牛合とゆ事あり
ちゝことを云ふ二方の競合ハことさきのうち牛を双方
ら出し戦へ一めてゐ相することゝ云ふ者と猛烈
のようにて、ようゝつき入をふことのとき、小競す時うち
双方の間ニ仲帝をせゝこと也、他のものゝ
一向動ゝけんど、これを直と動ゝ、牛ハ作ゝ
眼を傷けんことをひとゝ恐ゝこゝ所とゝ
一化州ゝい牛馬といふ行ゝあり、東牟婁郡及南牟
婁郡地方ゝ行ハゝ、田植仕高の歴ゝとゝ使ゝ者ゝ
或ハ馬方ゝ云ふ異行的ニ使ゝこゝもあるこの牛新ゝハ
大凡一定の法式がちゝて見ゝ牛を場内ゝ引入れゝこと
田面を三度田ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ

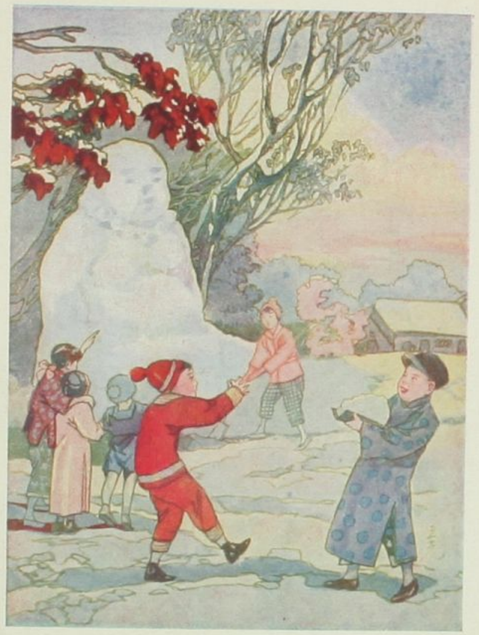
形に駈足と変り更に舞ひ廻りを駈けめぐること
ふい必ず一名づゝの追手がつく、

一　備後三次所在ひへ一種異風な田植の行事が伝つた
後田植休みの時を約して牛供養といふことの行へ
みる、主に馬喰ろかが主催するものなるが、寄附金を
募り市の一隅に祭壇を設け神官僧侶を招き式を行
ふ牛へ国百頭も及ぶ数を一列とし四の中と奉
き充る傍らの護摩祈祷を前列とし牛が
整列すると行列を作り進む牛へまづ装飾さ
れ、幸辛も雑穀を揃へたものをつけ花笠を
冠つて大幣帛を持ち、ちやうど壮観ひ面
る、牛を前列と進ませくこの時祝詞を奏し

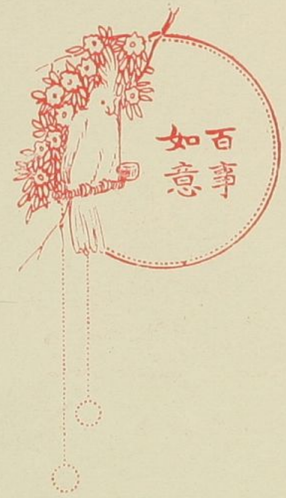
前列の牛が一歩を誤ると全部の牛列が乱れるので
前列の取方は成に大役ひである、殊にものもう行列の行
進が済むと植手が四方に散くといふ、次の行列が済
む田植の真似をやる、この時黄色を戴いた早乙女
が供養人の役をする、供養人は馬の上に「と唄
ふを例とする

十二行

東京市牛込区矢来町三番地
工藝美術研究會
杉山寿栄男
田村壮七郎



東京市牛込区矢来町二番地
工藝美術研究會
杉山壽榮男
田村壮七郎



大正乙丑元旦

幸至野口多田鶴彩

被鐘聲敲斷了殘年;
却鵲聲喚出了新年.
眼前景物都鮮妍;
喜氣象, 上眉尖.
裁一幅紅箋,
祝幸福緜緜.

東京市牛込区矢来町三番地
工藝美術研究會
杉山寿栄男
田村壮七郎

の芭蕉の人風狂俗惟然の称呼は通例イチンといふを
あるが、イゼンなといふものもある、蕉門の江戸文学
研究に、イゼンとある仮名を挙げたのみくある

武人は鬼貫句選の中に

惟然●が伊丹の我の宿とまりていふ句

秋晴れにあら鬼つらの面ぶくやな

とりあくす

いたんおいやつれ時にまぶる夜

とあるのを捨てそそイゼンであるといへば、まんち
惟然を此前にあげた西鶴ひあるそ物の俳
会にから、仮名遣まで武士なといふ
武程こんも現在庵にあるこの次偶然四

十二行

山集といふ句集を手にするのみに、元禄十六
年に蕉門の俳集に出たものの門下及び
その海風を慕ふ姿の人々千山（北文庫蔵十
三年版）指山、元藩、蕉門等の風を主とした惟然
鬼貫、智月、舎羅、月尋等の句を交へ挙
げて居る、今その中から惟然の句を拾へ

この風に冊とは誰かたれくか　指山

一つかりとこをわかれわかれつ　惟然

けふもくるるものもあさてを稲かるか　指山

おし合て海よりの冷ひる　惟然

ひころへだてぬ中を社その巻この巻を繰とみな
ゐこゝろ今思ひ立て四山集に幸するものこゝと
一宿山の湖寿屋はほうきの姫路の風
宿をすまし島見をひろしまるの海の毎
量坊が俳句と社　島義人
まゝ茨ひろの月ろうが芋月か

よい節句でごさるどなる菊の花　惟然
はす立にあをひと
あつちからこちらも花典謝庵　いちん
旅賛那知
天氣やらあんやらあと沖かゝる　惟然

十二行

コ湖の人はおくんなるを悼もおの〳〵
ぜひもすきと世と思いんつけしの花　惟然
京瀬の納涼
今ここへ何所から蓮が来たるか　いちん
右の歌二ヶ所はけいちんと俳名吉はけをある
こんゝ見ると思賀の海者の無現ひろくやはり
イゼンが正しかつたのである
○抵後抵味をもて修行如しに芭蕉も荒い時と思ふ
やせ蛙と抵味があつたのどうか、飯村文家業の
如かから故大阪西作が浅生庵野坡の門人風体
の随筆「ほばう」と云ふ中に師野坡法をして
「寿貞八尚の荒き時の意うと、とくに尼ところ、

其子次郎兵衛もつかい被申しとある一書を書て
し、えんこうを得て、芭蕉の集中の
尼寿貞尼身まかりける時
数ならぬ我身といひながらも
のゆをそつけ、況沒後貴きをいかに
妻を持つてくやしきもとまれ
況男子なりとも
乳母にとつかもなる、肥後八代の俳諧文晩の芭蕉
談（自筆本）のい寿貞尼の芭蕉の乳母とうつる
文晩の芭蕉談ハ芭蕉の僕次郎兵衛の談話なる
崎の郎七が方より江戸へ
いしいたかなると蕉門乙男の江戸文学研究こゝ

十二行

てゐる、妻う乳母かなどの何れか、断し難きも、又芭蕉
の門人杜国ハ萬菊丸と童らしい名を変て芭蕉
を追慕し此所から芭蕉の家童ひとりなうの疑を
抱くこともあるが、これもハッきりとハいしきれ
○本年初めて図書を蔵千を婚山格お合心のあるし
一二を掲す

一 致知啓蒙　二冊
四次七年西内の著す所　論理学大
意ようロジックの日本に渡せられる
が初めてなるべし

一 北野夢房記　一冊
弘化四年西田直養の著し写和豊公

北野大夫房の記を、古文書古記録を
考証して一六庵の記をものしるすなり
大保和尚の庵なり

一　薑陰白題　一冊

蕪村の人大魯の句集なり蕪村の序
凡董の跋あり跋本極めて稀なるなり
脇蕪村研究会自本をもて複
写せるなり、世に流布する所ハ
誤多しとて正誤表附あり

一　官私印章鈕式　一冊

田敬之の著すなり、鈕式を載せて
る印者ヤかからざるも単行本なり

十二行

なり、印章考えて自本をもて之れ
を校す、蕪田香遠の印記あり、田
敬之蒐集せる四大器数
遠信博物考と云ふもセーリスピヤ、ボルスデー、ブ
ツク会かい物屋の定尺に照ら合はすると一部婚入と
丸美函屋を詰めて少けれども、もとや品切にて、已むを
バルンスとスエウトの図じ生涯帖を婚い入れ
廣中比おく

一月十二日記

列風外出と疾ちまち体を撫し
ゆる京偶尼西蕉本ちまち強引粉帖を渡す、南
伯五原の流の言葉やうに通人の迷のやうなる駄洒
ヤレ駄洒で充ちた北等の思ひなるべく誤のまく

解し難きものが多く、殊に高僧の直筆の本
書は、こゝに存ずるのみ、後学これを得ざるは如何ぞ、之れを謂ふ
のみ、之れ文一段の価値本は江戸の在る時代の文学
世風俗を知るを欠きかれひ必要がある。
黄表紙洒落双紙等の人との関係のもの、或いは江戸から一冊
読み慣れさんは面倒のものを、[illegible]
と渡るを通じて、あは無い、[illegible]
流れに渡り慣れたものは、ドンナ細密の物も今者
堅実校に形を成すことを、[illegible]
ちく読むを、及ひもつかぬ　十二月記

○会佛者の説、因果報徳、二人比丘尼、[illegible]
期の他を家義を[illegible]、こんな此者のことを[illegible]

十二行

[illegible]
此北の位置石平道人[illegible]木正三に就て垂しき記
あり、正三は天正七年三河の国に生れて武士の血を受け
て禅僧となり、漸次[illegible]の秘奥を悟り、禅に托
して武を論し、武に於て禅を説く、徳武合体共
の言葉所頗る傾聴すべきものがある、春井乙男共
編の首に曰く
武士として思慮の軽重大小を論ずる業を
[illegible]と貶し、解脱の大法を[illegible]の
業とする聖を罵りて「仏法高人」と称ば、世間の
仏法を「慰み仏法」、「出家仏法」、「向上仏法」さ
び仏法、「活達仏法」なる仏法、「悟り仏法」「へご仏

法と数くて、この外様々の私し佛法多くと異も、唱こ
の病を我僧も好かず、我は唯朝から晩まで
きつと果し眼しをつて居るか好き、我も如是
勤め人なる如是勤めるを佛法修行とす、我法
は果し眼佛法なりと唱破して「二王性禪」を唱
道し、各七六異をして大小十文字なれさし働かし、
八情と云て祢ち四いし、脱みつけて性禪を仕
なるべめさるよ、古道なる道あるべ佛法なる
着も性禪仕習ハセなし「織の方に織の法
をめけなるべ如くて心を張立て公を勤むべし
是即性禪」侍は鎌倉の中を用みる性禪
を仕習へ、ものはず、紙砲をばなくと打立て、

十二行

五は鍵先を掛くてはなくと云て亂合あやまて
為度用めて変ひ使ハ侍は何とよき佛
法なりと云ふ、鎌倉の考の中を用ゐ立てぬこと
あり心、捨ひがよきと云て設きて武士の禪法を拔
決なしハ即ち三河の武士松木四三石平為人

三

心三の年の時代なる本能寺の変なる朝鮮の役あり
五年時代なる関原の役あり後大阪陣なる役
ほら弓槍を把り兵馬の間に馳駆し、関原の乱な
も役ひきなり、役れの著破キリスタンあるも偶然な
らず、役ハ四慶元年七十七なりて逝く
○又佑間を過り二三の図書を購ふ（一月十二日）

一 増集續傳燈録　六卷　寛永版　全三冊

巻尾に左の刻文あり

續傳燈者古来日域未有板行
今使工模寫爲竟畢其功業后
代不朽矣

寛永十八辛巳歳孟春吉辰

二條通　観音町

風月宗智刊行

此書永禄十五年閏三月、泉山寺比丘文瑛の編
まゝ不凡例に云く
大報恩寺金刊大藏經、新収續傳燈録、
其主名亦甚定旨、但此書成於倉卒、所収

太略、自大鑒禪師十八世、至二十世、三世止収得四
一人有機緣語句、其他皆空名而已、況四十人
中、差悞又多、今於續傳燈録所収外又增
集之、故名増集續傳燈録、
増集の二字注長すぐし續傳燈録と別
書也、

一 京雀　元禄刊　一冊

京都名所記洛内洛外二冊合本巻首に
御所の図あり、禁裏の図入まる寺町通に
本屋の図あり、洛外の部まる風景図
あり、稀本なれども北村季吟入日まる増し

もくじ

一 神宮寺伽藍縁起并資財帳　一冊

北縁起資財帳共に「僧綱之印」を捺紙
押し切るこのまた延暦の文書なり、神宮寺
ハ幸名郡多度寺と号する一寺なる縁起
に拠れハ源を天平と為し寶亀十一年前
迄三重塔を起し天応元年法華を建
つとあり、奉書摺大本紙数十三枚
刊年を欠く、北者今ハ稀覯のもの也
○井原西鶴の文名高かりし時代に別て於帳を拵へ初めて
著作と名乗る○作者ハ[illegible]

閲歴ハ[illegible]論其事名すら知れざりしが
流廿九年六月の早稲の文[illegible]
[illegible]訴状の[illegible]を[illegible]し漸ゆく[illegible]
[illegible]井乙男の江戸文学研究を[illegible]
解れ[illegible]、元来都と錦とハ和漢の[illegible]
其の書きぶりも初め得る程[illegible]
集[illegible]自家[illegible]、[illegible]
こ数見て人を感ずるもの[illegible]
彼れ[illegible]自述の経歴と[illegible]
彼れハもと播州作用郡の[illegible]
を稱す、八田上宮内[illegible]
時[illegible]

任官を修め、傍ら北村季吟に師事し、和歌の道を学び、和歌の書と共に、[illegible]を六条[illegible]に遷されて島原[illegible]を始め、金子つもること三千兩、縄手なる祖父の所持町屋敷を作計を以て春永寄りとかし、為め親族縁者の勘当を受け大に困窮し、翌年二十七歳の春、新黒谷の前を引込み小庵を結び、仏法修行に志し、山科大宅寺の月波和尚と参禅し、名を誠舟と改め、粉川の[illegible]名和法を修り、浮世すること二年半、その後立身の望み、同学の徒仮状を与え元禄十六年四月三日江戸に下り、深川の人を頼り行方知れず、十方に尋ねて所々徘徊する中に無右衛門の後人に

十二行

指へられ、同年青蓮院山内金山に海さんしが川四の船をうけそこに住居す、一日過ぎて[illegible]を捨てて人家の身と為り、徹心の苦悩かれけん心宮寺を[illegible]し、自分京都なる都の錦と云ひしも結い社業大寺紀とのの寺なりと云ふ、以上大概なる彼れの著と風流[illegible]代表なり風流の[illegible]なり[illegible]前お伽婢子其の他[illegible]放屁生涯に浮名[illegible]材料を用ひて仮説しなるもの[illegible]為元禄為我[illegible]、伊津白波、播磨楊原[illegible]最後の[illegible]獄中のあらはしなるもの、[illegible]ハ西鶴後の俳の[illegible]を紀[illegible]、彼れに深[illegible]新[illegible]金同表

山人その別称も多山稼の折りの猟か、彼れハ一霧を走面とし、りとも面白ハ彼しとおもふ、一霧を
揚げ、城を霧ることわけの重なりける、西路なるこ
酒の文とくまの」を不めて撰かある、北の人の酒
を汲む低名の浦士揚富なり、荒名の浦民離路家
弋如白浦弋を沿板富の芭蕉なり、
一月十三日録
○北海道談として聊の思い出るまを好す、汽車
八東京を根府川まで)まだ、根府川より十町だ
かり徒歩のもあり、ここを雷鳴山つるみのいろ
線路を汽車とたと堀没しなるもの今為ひり
出す洞窟、堀り出すもの別に大工事を起す方が
寧ろ易用軽しといふ、その大崩壊なる、今を

線路を海岸と変しここを城橋を立架しなる事
えを設立すれハ北海まで全通する事疑ひ今
の高三月一日開通と路定さるあり、熱海の停車場
の建築七分通りハ出来上りなり、北の停車場と
入るトンネルあり、こんを前年二十事中に湧出
しのかるす工事を迂流し、なる高なる其の地名と
なけはるの紙といふとう、其の名を少けば出る
伊豆なるす首肯かれるなり、雷鳴こと大小風景
を失ひなるとなく、此部ハ終に現場をもさ
りし、熱見海なる線花と列る崖(全)中
錦ヶ浦といふの目比谷列り見れば無残や興崖
八海峰のなる其の崖身を失ひ、今を霧上

し一株の松をもあめず其の上に僅の葉も破壊したかの
小葉某なり、常に風雪はメチヤクチヤに成り終り僅の
一本聊のもとの面影を存するに不あるも、もとや名園
とすべき價値なく、帳面自分するの久しかりし但し
震災後城内二丁目に付の式條かの自動車道路
の開けなを寧ろ高めとするに過ぎず頗る数寄屋の
感あり、此等の道をひらく為めに熱海の温泉が多く
の運動費を費しなることも想像に難からず彼等い震
災後道路杜絶の為浴客減じ其の為の負債を償なるべきは
運動費なりとも負債の一部を形つくりなるべし。
今日旅館相のことき自家のふしぎなる其原因を

十二行

ちらしあんど今の三十箇の債務を負ひ箇も四いらぬ
なり、割合に震災の損害と言ひまた相当の損
害なりとも、城道なるものは入り込みなる極板の上
支等の数は三四千の多きあり其の数する金いるなり
なのからさるに似なり、熱海は城道の開通と其の
運命を繋け其の開通を待つこと大旱の雲霓
なるなる事あり、開墾しなる熱海ホテルが賊力不出来
なるの後に一なるも熱海城道の後に的待するなる
べく、また遠在下の町に国が益と道路を接続する
四しの的待に因るなれ、北豆内に二分ひらかあを
使しなる外、熱海に於て割合に上箇の変なり、余が
一昨年書き遺つなる遠熱道路の三字数の今も

金粧され、生涯の思わしきを物語りあり、月とうま一笑を催し、北橋と坂を拓き、遠近の「琉海の栄」を唄いしあり、心の久しき者と云えしが、近年杵屋佐吉と北九州のあ
近へて三味線の手をつけさせたとかや、唄ふをつけは
そうそうの味あり、北九州の漁父の唄三つ五つ入んあり、
を漁父ら、少艾、遠近、言ふ、骨牌、ねたぶ、語ら、
北唄、赤穂義士、西国、の準備うること言ふまじかりし

（一月十三日記）

古遠方と滞在中、高田屋久兵衛井上（長次郎）を古遠方と
呼べ、答、抽亀、井上、紙幅を絵し、高田和歌を
高田屋、画をかく、答、寄書の幅の紙白と「情因年
の、酒因境多」と書く、余の拙くして小画用まる答

十二行

抽亀、古遠例と伝う劇、紙というべく、紙す、曰く
邦彦と紙て、祈完、きこの、カツラのこと限
元りのことなど、いまじ何人七手を着けず、日本特の
のこの力から、とて、大百、濁百、車輪貨を例と
取り落ちるを特の、大百八百日繁
の力も、毛の延びるを、大を冠する所以ひあるが
もと入牢、もし、サカイキの延びるをあらいし、悪
童、石川五右衛門、の、絵、の、百日、門を、濁を、髪
百日、枝、ふ、ふ、ふ、日、門、を、濁を、髪
ぬ、ふ、態、今の、髪、ふ、ハカスマチ、ふ、つけ、ふ
ふ、似、ふ、廻、ふ、車、輪、貨、ふ、ふ、荒、ふ
ふの、拾、髪、ふ、毛の大きさ、縄の如く、ふ、が、菊花の咲

き亂れることゝ左右の相反に陥り出してゐるものゝ如し、其他邦人あるとは思はんとする也、道遥又仏取物語：就て云ふ、あんは深順の心と傳へらるゝ事なれども、此の時代の心ひとあるが、雅俗分るゝ事なし、一方の師も立ち敗の中に凡ゆる、どこともなく抵現あり、おのづから滑稽味もある、荒し外国語を解し、彼んと組合ひんとする、北物語こそ、たゞ道中の面白味也といふべきものゝ、道遥斎基能氏の面白味と書かんとする脚色なるべし、美術工芸と文学も姉妹芸術であるのに、幸不幸のあるのゝ、美術工芸は眼を訴へて黙語するに反し、文学は其の土地の語

十二行

：言せざれば理解し難き事が出来ぬ、こんが為不幸のある所以也、日本の語学は況と世界の問題を任、言葉の賞賛を博してゐるが、文学は然こんはエスペランドが無い、之れを理解するは容易ひなる外人の之れを鑑賞し得るは無理はないが、困つたことは内地の文学の為の研究が極めて粗漏で或人と馬琴する文合後人びてそこに癖に、左と口を開いて日本の文学のすべて西洋と及ばずと一概に断ずる時代つてはなほ高し、およそ文学の比較を為すべき時代が回復するまでは基礎とし、こんばるべきものとある、こんな事を全く閑却して世界と云ふ西洋とのいふ度俗の舞台と時代摂ゐすべき一の文学家を標準とし

まんこ一概に度のすと断ずるは禁ぜざるべからず、
行ることを内々つうる偏るこに於ては男女を問はず
世界の批判を得べき筈、今日は外人に数人の先つ内地の
文学者と談ずることが寧ろ多く多方面に例を
もとめて彼我比較評を下すべし、流石に公平を得
感ずるなれども、今日の文界と称して過ぎざるを奈何
江戸時代の作品と通してみるこの無い、道遥が年の
文学者に対し相撲を取るの八無理ハなし

（十三日録）

○坪内逍遥氏の遺業を揚げて標榜したるの
知新刊行なり、第三集三冊を刊行すること
つと板元が来る、此書は家蔵するから、沼久
の文学もまるいから板元のの内を知らるべ

十二行

るから出版を取めておく、原本が難波の四屋屋と
あること、影写の為の特と一人を難波に流せ
もしること、毎年一冊づつ刊行を続けること、近
代弘訓が精刻を極めること、五山堂紙を新
許さんこと、弘化二年天竜を出すこと、第一
第二巻八行成り、第七巻公任卷なること、
業者の[illegible]言の外八七弘表紙なること
五山堂紙八美なる冊表紙といふこと、
う新作を出すこと八初耳也

賜天覽（弘化二年）傳世尊寺大納言行成卿四條大納言公任卿筆蹟

塙本元暦萬葉集 第一、第二、第七、全三冊 一帙（非賣品）

故 文學博士 井上頼圀 先生
文學博士 芳賀矢一 先生
醫學博士 井上通泰 先生

解說付

特製　勅許五山表紙用紙丈長磨水引手刷二度刷緞子表裝裏鳥ノ子金砂子帙入
上製　勅許五山表紙用紙改良糊入手刷二度刷太ゞケ表裝裏銀砂子帙入
會費　特製金貳拾圓　上製金拾五圓　外荷造料箱代書留小包料共金五拾錢

且當分特製ノミ頒布シ上製ハ希望者ニ限リ特ニ調製ス
屏風、懸軸、額面用烏ノ子黑色一度刷一枚五十錢外ニ筒代郵送料共二十枚迄三十錢

申込方法　會費全額拂込次第頒布スベシ

本書は塙保己一先生の大努力を以て特に門下の諸大家を難波に派し田原屋に就き元本を臨摹し當時の名匠江三八左工門をして同心篠原清八監督の下に印刻せしめられし稀有の珍書なり世に有栖川切と稱し一首の歌片れに數萬圓を投じて猶且つ得難き筆蹟とされなり此三卷を印刻せしは第一、第二は世尊寺大納言行成卿、第七は四條大納言公任卿の眞蹟疑なしと諸大家の斷定に基ずしものにして元本と一點一畫と雖も違はざるは有名なる國學者足代弘訓先生の書簡の一節

此度御開版原本のまゝよく御寫なられ感悅仕候何ぞ貴命の通り毎年一冊づゝ御上本に相成候樣奉祈候

表面見本の說明

赤表紙は　勅許五山表紙なり
黑書の半影は卷七の一片にして四卷

天覽、台覽各宮家御用手續中

正二位二條基弘公序文
磯稻綿道秀先生著
長歌軌範　全三冊

國體學者にして磯稻綿道秀先生の本著は我國の長歌の法を詳導し併も系統を加へて規矩を示し以て長歌の紀綱等の長歌の如き緊要字脫字も本書を一讀して初めて得べきを大著述にして實に千載一遇の機會なり眞に千載一遇の眞體を捕へ長歌の作法を知悉し日本文學を世界に發揚せんとの眞意なるかを知るに足る

塙保己一先生遺業繼承

發行所　須布所

追て木版群書類從の御申込は溫故學會法人岡

萬葉集巻

入數

鳥者靑竹と吾者

ルビ 眞 タケト キミ

代價七圓六錢
郵送料二十三錢
日本紙和裝上製帙入

公任卿の眞蹟より

禁裏御所は特に五山表紙使用を　勅許せられしにても明なり故に帙
として床上の珍となし散じては屏風、懸軸、額面と爲し愛賞し得べく特に明治四十五
年七月十日
明治天皇陛下大學御幸に際し本會維持會員國學院大學長文學博士芳賀矢一先生より
本書三卷は檢校の努力に成りし旨を奏上せし名譽ある天下の珍寶なり故に屢諸方より
の刷立懇囑謝し難く今回本會の秘庫を開き純日本紙丈長碧水引の上紙に一流の刷工を
して丁寧に印刷せしめ一部同好者に頒つことゝせり從て印刷部數も僅少につき此機を
逸せず無二の家寶を得らるべきなり敢て薦む

御照會の事

温故學會出版部
（東京市麻布区三番地）
日本協會仮事務所
（東京市四谷区三九七七番地）
（東京市麻布区十二番地）

冊標紙は何れも新仕立をなすやと思ひしが
北の標紙まゝ龍の標紙あり、まゝ為めと存ず
○昨日の奉下公廣卿の文行書を拝のを左の通を
嬉ぶ
一　北文書　孔氏傳　一冊
北書支那と通じてひろく日本に存する国宝
の一なり、巻子本覆刻を巻末と
なす二年前當の奥書あり　河部正

精の不審なる文政年間阿部氏に与へ刻に附せられたるが故に阿部本といふ、
又弘安鈔本なるものあり、北書喜保年間作南
の本にして高麗に持ち帰りたるものなり（其の
影本をもしるべし）勢廷博氏の考証し隋
唐代に於ては雕摹せられたることあり、支那に於ては北書を宋元
以後のものとなすこと甚し恐らく
不充分の影本を見て斯くあるべきなれ
ども南齊を見ずんば古隷點畫の間之
改字以前の史料なること疑を容れず

林述齋の逸存書にも亦北書を収むれ
ども影写のあるべきかなれ其の書体を
見る能はざるの憾あり、龍右阿部侯
の稗上影本を得て上梓せらるるに以
也、巻末阿部侯の跋あり文政癸未冬
十月と記す、而して此書の手に入
りたるは文政の久しく我邦に保存さ
れありしを見るべし、但北書序文
二行を脱するもの、本書に序とする
るものは天喜元年十一月廿一日附清原
良枝とある鈔本なり、
北書と隋とは同時代に成る

やまや、原楊氏の外市上に現ずること
ままあり且つ原楊本は頗る稀覯なる板
なるべし唐人の摩也阿の印度は即ち本邦の西方
町を欲しいままに奮走也　一月十夫の記

○武蔵三馬の和義未だ詳らかならず
彼れも蜀山経彦のごとく義士癖あるに似たり、義
井乙男の江戸文学研究に三馬の傳を如何、如何
彼れは彼れの都市癖のあるごとくかの
彼れの父は版木彫刻を業とし彼れ書肆たるの業
をとりしこともあり、幼弱なる者なり、彼
れ又がごとく不義に依るも、自分は義士たるべ

十二行

人の為しに方物を大切なる紙と本の表紙を
附与するまでもして保護をつとめたるとあり、彼れの三
馬といふ不次は其の和漢しに長未三和の一家と親交
なりしを為馬の一人なること取りたるなり、彼れの先輩と芝
金交といふ戯作者あり、彼れは之を私淑し二代目
金交なりと擬せしこともありしが、彼れの才は之れ
ることもなく獨り三馬を以つて主つことを得たり彼
れは滑稽警世戯作に於て一九と並び称せられ、保し一九
より三馬の方一歩オ也三馬の方一歩以上なり、
彼れは大子を以て許されたるも、剃髪は無かりし彼れ
の性格を多くは他の著作の中に表したるなるべし、
彼れは酒を嗜みて徒に人と爭へり、之れの為めに交友

かう、彼んの不形の心浮世床と浮世床と、一九の
膝栗毛の話如何きく刺激さんと出せしものなり、浮
世風呂の初篇の出し時は彼は三十五才なりし、彼んの
心は社会のあらゆる面を深刻
や、笑ふべきものあるべし、彼んは馬琴と對抗し難き
中がらなりし、三馬は馬琴の学者振ることを嘲笑
しなり、馬琴は三馬の無学を嘲笑し、馬琴
の稿本は、鞭撻一冊毎に、早大国書彼と花しなり
乃ち三馬の心を深しと丈の欠點を指摘したるなり、彼ん
は合巻本を刻叙し、それらは立巻なく表紙も異
なる出版とお座而倒なりしなり、
之を補ふとも浮世ふことなく、彼んは

く筆早なりしと侍くらる、校元の費徒と思ふ程の
は二三の間の走り書なる為の誤りなるものなり、
馬琴程度等の遅筆なりしと同かるべし、彼んは滑
稽の天才なりしと、洒落なる坐談なるもおもし
ろかりしと、狂歌も出来なんと、寄る丈の本
錦絵なる事、但し書面合なるべし他人の書と渡する場
合などは書印め丈り神速の思持なる筆を寄
を欲せしめなりと、彼んは戯作者なるの少きかしと
のいろくの事をうまく料理して仕あべし、コツメイル
浮氏は修拙紙を研究するなれば切を思事を
妨くとなくり、馬琴とは絶ることなく遠しとふ感情
し三馬は寡なり戯作の真髄と解なるを謂ふ

いき類、後れハ者も情信を為ん者ハ
美多也

三馬通称を西宮大助といふ、本姓菊池名ハ春輔字
ハ久徳安永四年浅草に生る、父ハ八戎文政為相
大明神の初夏菊池壹岐守う庶子なり父の名
を武兵衛と呼び、新刷を生業とす、西宮も
姓とし名ハ茅場町地本問屋春好軒西宮新
六と称す、関係なき人受多数の
年の頃本石町四丁目の書賈駿河屋市郎兵衛
仁兵衛（一説に中橋の人、北林堂）の丁稚となり
後山下町の書林蔦屋重蔦屋太次右衛門
が婿養子となりなる人物の死し以後

十二行

離縁して四日市に去れを高山彦九郎を出し北海道
蝦夷を始め文政十年四月廿四日死す
○木挽町の新富座庭園成る
九代目市川団子を当り狂言に相応の新作に
の新作に座に出き新富、北条氏康の
海老蔵大雷雨切り幸に新作に
成を出せる也、実説に日光式の木造にて石垣に
造りなれば、新富と情にもとのまに二十間に
四土間に椅子を入る設る設け、花道に石二
方に椅子、建築費三万両と注せる、帝劇もかく
洋風の長味にて、客席ハ地下室にて
ハ室に洋風の設備し為るに四座と比すれハ設備

るものかなり、人数容積は二千石余と称せり、一番目
家康八重と云へる冨本侍従の影法師なり、義経をひらきといふ
ものなり、宮ものの仕方なること、ハ[illegible]すなり、入石前家
康まで公に従つて北条を伐ち、其賞として武蔵の江戸
に家康を置くといふ事、北条の舊領を割し、北条の舊臣
真田と風間を出して、真田流浪中、真田幸村を雇ひ
を以て江戸の城主に戴りす、別城を設き、其の報酬に
家康に従ひ大名となし、風間を家康の首を
別所に豊臣の恩賞を得んとし、風間は盗賊頭目
となる、間幸村と浅野幸長の両人八年目にて解散
の取り扱ひする、真田流の後風間は捕へて磔刑
に、幸村が未会ひ難き山に江戸別城のことを説くを

十二行

之を聞きしに、あらかじめ出おくるものを入をもよと強ひ
まるを韓田は邪魔なるを拒ひて元会はず、風間は常に
幸田のつき纏ひ終に苗原迄追ひ隠れと隠伴し家
康をつけ狙ひて終に捕はる、真田は家康を一番
花の墨付をもらつて足れとなす其の墨つきをかり
別にて、家康殿へ、又風間を放還するといふ後
向なり、北の割はこれなり、家康真田風間
三人のものなり、国兼左衛門は家康国
十風間左衛門は真田左世なりは、家康国
田と風間は兼左の流を汲む羽左と左国次つとめ
大体後はまつたく前の兼左を見る時
は別る抱生らぬ感なり、歌右二つの家康を取り

書し見おとり[illegible]し比、新聞紙迄ならの文字、家
原の体格と充合なる事、且つ北傷もそやもそ例の
不自由の身体、今ハ著を著しく、出行者と困難と
又言けるなれか、主つすらる者と位せさるものゝ如く、何
人も交る義をなくさるの感を無くとも
北の羽左衛門其子其板を家相と改称せしもの
の設家あるべきと就而子を[illegible]なるハ
中華五洋新聞曰式の割合
仁左衛門の警部を例の大阪風を以て
ちこゝき底熱を使さるべし、歌右ニつの
後家様の方ハ涙を家原ともに出来よし
文弥世方ハ世方なるべし、二番目五平の五郎

十二行

羽左衛門と萬助迄ならの者ハ見くもの俳
こゝから新、左と「家原入四」の方面を収むい
新作なるか如き、後者の心ハ可なるの出来なる北
人山年江戸絵本と設既、ナカく実用也

○又二三の者を雑ひ入る。

一把朴子　　一月十八日

志摩屋　宋本ニ　校リ刊　ノ誤ルモノ

ふ[illegible]の活子数をおよそ使くんとある毎時　　蔦屋　八冊

ふ[illegible]も其一ツ、北方極めて稀人也弥生

べし、架中の的の活子既、十行を[illegible]

一蘇長公小品　　萬屋　二冊

こんも在もし、日本ニ北者を刻して多く

流布す、支那の坊間に得ること甚難しとす

一女かゝみ秘傳集　六冊

此書刊行を刻さいなと、萬治頃の版と覺ふ、萬治の版に女礼集あり、甚だ似たり、或は同じ書を標題を改めたるか、貴族の女人の心得とすべきことを著はせり、挿絵に一種の風味あり、卷ニ表紙十二ヶ月の図あり、尤も板

十二行

役割			
徳川家康後室萩の方傾城皐月	歌右衛門	本多與七郎星影組門弟穴生多九六	村右衛門
劍客星影土右衛門	中車	徳川の家來	芝賞
すつばの大將風間八郎正國白頭の獅子實は狂言師右近俠客御所五郎藏	羽左衛門	すつばの手下物頭關口玄蕃門弟鮫洲の五平次	羽太藏
遠山丹波守直宗掛取吾助	市藏	徳川家來北村彌八足輕大將澁谷小左衛門	七百藏
傾城逢州	秀調	高木九助	翫右衛門
徳川家來榊原小平太康政	壽美藏	徳川の家來臺屋の男牛助	歌五郎
村人御所組子分海野小彌太	龜藏	すつばの手下徳川の家來	調右衛門
大久保治左衛門忠佐布屋五郎助	鶴藏	徳川の家來元腰	千代壽
徳川の家來按摩瘤市	千榮藏	遊女徳川の家來	龜松
徳川の家來若い者喜助	薫	星影組門弟荒波喜六太	吉之亟
星影組門弟沖崎岩八	荒次郎	星影組門弟蟹塚素平	新十郎
御所組子分秩父重藏	三舛	赤頭の獅子實は狂言師左近御所組子分二の宮太平次	竹松改め橘家
布屋の娘お千代	十藏	里の子太郎吾	兒太郎
妹娘初花姫御所組子分新貝荒藏	芝鶴	井伊兵部少輔直政安倍采女之助	千代之助
遊女修驗者若葉如嬢桂姫御所組子分梶原平藏	福助	眞田市右衛門信尹	左團次
織田信雄甲賀塚金藤次甲賀與五郎	仁左衛門	俳優萬一病氣等の際は替役を以相勤申可候條豫め御諒承願上候	

三

流布す、支那の坊間に得ることを

しとす

岡本綺堂氏作
松居松翁氏舞臺監督　演藝畫報所載

第一幕　江戸淺草觀音堂の場

すつぱの大將風間八郎正國
遠山丹波守直宗　羽左衛門
すつぱの手下
同　調右衛門　市蔵
同　市家三郎　羽太蔵
同　橘咲
同　羽壽蔵
同　若松
同　万蔵
同　二之助
同　羽之助
同　梅男
同　かもめ
同　目次郎
同　二門郎
同　大八
同　みかん
同　八
同　祿蔵
同　荒平
同　橋五
同　市芝
同　亀三
油さしの僧　左團次
眞田市右衛門信尹

第一番目　家康の入國　三幕

第一幕　江戸淺草觀音堂前の場
第二幕　小田原織田陣所の場
第三幕　江戸よつや街道の場

相州酒匂川渡場の場
小田原德川陣所の場
江戸城大手前の場

江戸淺草觀音堂前の場

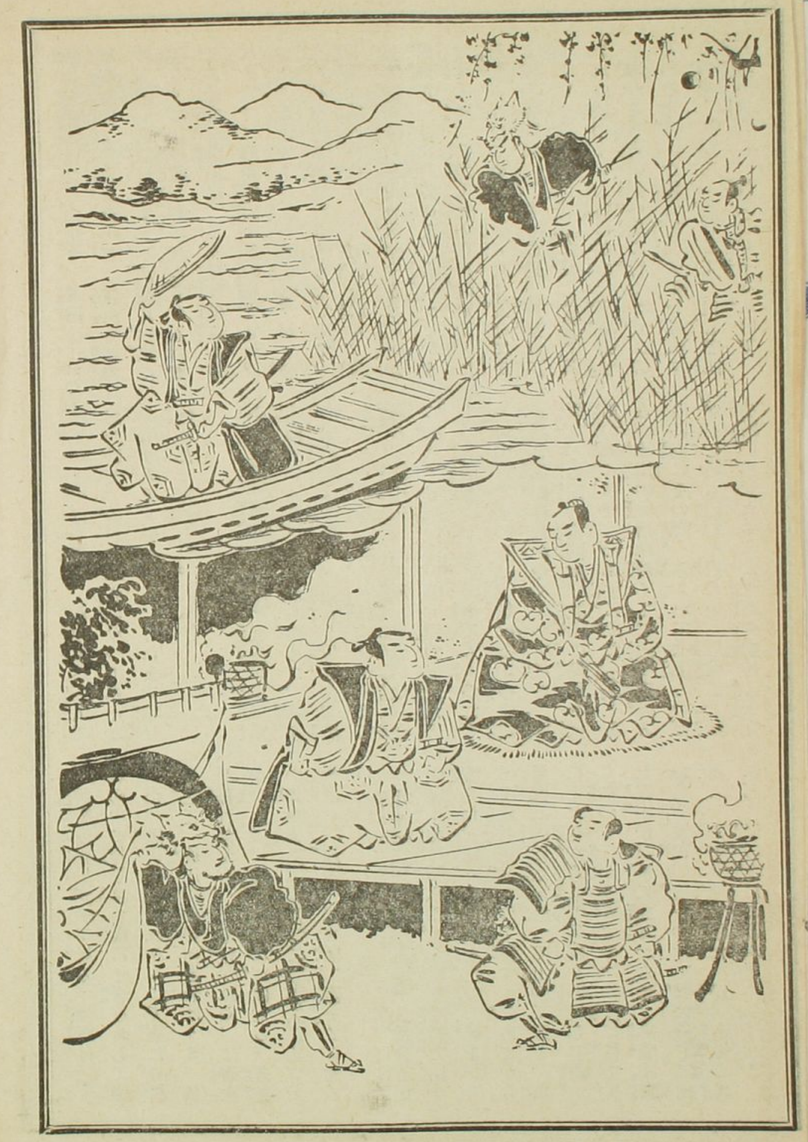
天正十八年四月半の事である。豐臣秀吉は德川家康と共に陣をすゝめて、小田原の城を圍んで居る。

武藏野の江戸淺草の觀音堂に日は暮れてあたりは寂しい。緣に腰かけて眠つて居るのは、武藏相模に隱れのないすつぱの大將風間八郎正國である。一人の浪人が參詣に來た。風間が起上つてその浪人の笠をさゝると、八年以前共に武田に仕へて居た眞田市右衛門信尹である。二人は武田の亡びた時、十年目に遭はうと場所を定めて分れたが、今此處で圖らずも遭つた。風間は既に五六百人の手下を持つて居るが、眞田はまだ浪人だ。が大名にもならう、さうなつたら又風間の手を賴むこともあらうと云ふ。風間は、大名の株が石ころの樣に路傍に轉がつて居るものかと笑つて、二年後を約して別れて行つた。遠山丹波守直宗が緣傳へに來た。眞田は此人を待つて居たのだ。此人の伯父が江戸の城代で今小田原に籠城して居るので、江戸城は弟の川村兵部秀重と甥の直宗とが預かつて居るのだ。太閤と德川の兩族に攻められて小田原もやがては落ちる。北陸道からは、上杉前田が攻下つて既に武藏へも寄せた。江戸も早晩落城に定まつて居る、城を枕に討死は立派な覺悟だが、城を亡ぼし身を亡ぼし、妻子眷族を亡ぼすのも

結句犬死にはならぬかと、眞田は江戸城明渡の媒に來たのだ。遠山も城内のものを無益に殺すも不憫ゆゑ約束に違なくば江戸城をあけ渡してもよいと云ふので、眞田は、子々孫々疎略あるべからずと云ふ德川の墨附を見せた。遠山の腹は城あけ渡しと定つたが、叔父川村を說き落されさうもないので、眞田が城内へ行つて、辯舌を以て、義氣金鐵の川村を說き伏せやうと相談が出來た。遠山の案内で、眞田が行かうとする時、物蔭で今の話を聞いて居た風間が呼びとめて、浪人だと云ひながら城の賣買の媒する眞田の智慧に感心して、眞田が智慧で大名になるなら、おれは腕づくで大名になる、家康の首を取つて秀吉の處へ賣に行くと云ふのである。遠山が頻に風間の事を氣にするのを、打棄てて置けとて、促して江戸城へ向つた、風間は呼子を吹いて、手下のすつぱを集め、小田原へ一人で出かけて、やがて大名になつてみんなを取り立てゝやるから、それまで稼は休みだと言渡した。

小田原織田陣所の場 此度の小田原攻は長いくさと初めから定めて、寄手織田信雄は陣屋で、遊女を侍せて、酒をのんで居る。隣にも鼓の音が聞えて居る、德川の家來榊原小平太康政が使に來た。取次がないので通つて來たので、若敵方のしのびの者でも入つたら如何すると戒めると、敵は釜の中の蛸同然と信雄はたかをくゝつて居る。榊原は、太閤の指圖で、織田の陣所を德川の隣に移せと云ふ使に來たのである。德川の陣所は狹くて、困つて居るのに更にその隣へ移られては困るのだが、これも己むを得ない。信雄は、狐を馬に乘せたやうな太閤の癖を嘲つて陣替を臆劫がつて居る。榊原は、今夜の中に陣を移す樣にと念をおして歸つた。織田は、暮れかゝつて來た日脚を見て、德川の使が何と云はうと、日が暮れたから、出て行かれぬ、と燈火を呼んで、遊女若葉に舞はせる。若葉の舞を喜んで、若葉とは誰がつけたぞ、やはり一座の花だと稱て盃をさらせる

相州酒匂川渡場の場 眞田は德川の家來北村彌八に送られて渡船で川を渡つた。味方の相印を持つて居るからして北村を勞らつて歸す。其あとから風間八郎が水を潛つて上つて來て、腰にした包から狼の皮を取出して頭から被つて行かうとする。物蔭に見て居た眞田が行手に立塞がると、風間は驚いて、眞田の後をつけて來たので、何處までもやり通す積だ。が、商賣の妨をして氣の毒だと云ふ。



第二幕

小田原織田陣所の場
相州酒匂川渡場の場
小田原徳川陣所の場

徳川家康
同織田の家來　歌右衛門
同神原小平太康政　羽左衛門
徳川家來北村嶋八　左團次
眞田市右衛門信尹　壽美藏
風間八郎正國　七百歳之助
同織田の家來　芝鯉三郎
同同　荒目次郎
同同　左千代丸
同同　千代子藏
同同　半平
同若侍　市太郎
同同　蓮羽之助
同徳川の家來　うぐひす八
同同　梅若藏
同同　鯉之助
同同　みか男
同同　かも五郎
同同　めん松
同同　大十郎
同同　門羽藏
同船　二郎
同織田　壽之助
同遊女　亀藏
同遊女　若信
小市千千　蛭女　五左之市助　頭雄　葉
同姓　代代　松丸松長　輪
同同　同同　橘之助　福成　福仁左衛門　彌助　枝
同調　三喜知　咲郎　八郎

眞田は、此商賣を仕損じたこと、天下は廣い、又ほかに口はいくらでもあるこ云つて、ついて行かうこする風間を避けて、急ぎ足に去る。後追はうこする風間を、徳川方の軍兵がこりまいた。それをやり過して、風間は、渡小屋の屋根へこび上つて、窺つて居る。軍兵はうろ〳〵して居る處へ、眞田が引返して來てそれこなく敎へたので、風間はかなはじこ、川へ跳込んで逃げた。

小田原徳川陣所の場

織田の陣屋より粗末である。榊原小平太が歸つて來て、樣子を言上して居る。家康は小牧山の陣で、織田への義理をすましたが、それ以來太閤の疑は晴れない。織田と徳川を一網にすいざこなれば、織田の陣を此隣へ移すのも、る積であらう。小田原が落ちたら關八州をくれるこ云つて居るが、關八州を貰ふこ舊領三、駿、遠を捨てねばならないここになる。家康が小平太こ今の狀態を話して居る處へ眞田が來た。眞田は早くも忍んで來て居る風間を見つけて之を制した。榊原はそれを聞いて、此間も狼が出たこ云ふから狩り出さうこて出て行く。眞田は、江戸城を預つて居る遠山丹波は、話が早く分つたが、その叔父の川村兵部は中々得心しなかつたのを說き伏せて來たこを報じる。家康は、その骨折を勞らつて、江戸は要害の地こ云つても小さい城、力づくで攻め落すに仔細はないが、これから根城にする大切な城、軍馬で踏荒し度くないこ、思つて居た處へ、丁度調寶な男が見つかつて仕合せだ。江戸入の上、骨折の代は十分に遣す。それを樂に働いてくれこ慰めて、歸つて來た榊原に引合せ、明朝出發せよこて、奥へ案内させる。

よつや街道の場　此の邊は未だ武藏野の草が深い、昔は霞村と呼んで居たが、布屋に梅屋、木屋、茶屋の四軒の家があるのでよつやと呼び慣れる樣になつたのだ。

天正十八年八朔、家康は、榊原、本多高木その他の家來をつれ。布屋五郎助の案内で此武藏野へ入つて來た。

甲州街道の關門で江戸城にとつては大事な關門なのに何の用心もしてない。家康は此處に床几をたてさせて、切り拓いて行かうと思ふ廣い都を思つて樂しんだ。小田原や、鎌倉は今は繁昌でも土地が狹い、それに引きかへて、江戸は、東は海に限られて居ても、三方に擴けられて行く餘地が有餘る程ある頼朝の後を履んで鎌倉に移さず、北條の古巢をかりて、小田原に住むことも しないのは、此原を開いて、鎌倉、小田原に十層倍する都を作つて見せやうと云ふ意氣組である。人間が大きい事をするには、未墾の曠野を開拓するに限ると喜んで居る。

さて五郎助の家で休んで江戸からの使を待つ事になつて立たうとする處へ、眞田が迎として來た。赤坂のお宿まで迎に行つたが行違になつたので引返して來たのだ。

眞田が此草原を關東第一の都にするには、骨が折れやうと云ふと、家康は、濱松の大火のあつた後二月計りで元の町續にしたが、江戸は之と違ふ、でも工夫をすればごうにもなる、只小田原の殘黨で、關東は面倒だらうから、結局太閤に山流にあつた樣なものだと歎じる。布屋五郎助が娘千代をつれて、用意が出來たからとて迎に來る。家康は路でうまごやしを見つけて軍用になるとて喜びながら行つた。風間八郎が出て來て其後を見送つて、眞田のついて居るのを邪魔がる。家康の家來が出て組みついて狼の皮を剝ぎ取つて、揉み合ふ。榊原康政が出て、風間の山刀を打落す。家來が寄つて、つひに風間を組み伏せる。

虫捕に來て居た子供達が、落ちて居る狼の皮を見つけて之を拾つて奪ひ合つて居たが、その中の一人に狼の皮を被せ、今の風間を捕へた樣に、二人が、これを捻ぢ上げる。

江戸城大手門前の場　家康の到着に、城内の遠山、關口、澁谷の主だつた面々が出迎へる。家康は、尋常に城をあけ渡し、改めて家康に奉公するとあれば新規に召し抱へる。との言に、遠山等は忠勤を誓ふ。遠山の叔父川村兵部は剃髪して立退たとのことである同勢の到着を待つて入城することになり遠山等は退いて沙汰を待つ事にする

（第三種郵便物認可）　大正十四年一月十九日

鎌倉の大佛初めて坐わる

昨日内田博士立會で二年越しで元の座へ

鎌倉の大佛は一昨年の大震で大破したので再鑄十二月一日から東京戸田組の

請負で

大修繕に着手し同組では特に内田祥三博士を工事監督として工事を進めて居たが臺座の工事が完成したので十八日午後一時文部省から出張した中川忠順氏及神奈川縣技師田中工學士立會の下に高く吊り上げてあつた重量三萬五千貫の大佛を花崗石の臺座の上に復坐し了り兎に角舊態を示すに至つた、本修繕工事は來る五月下旬までに全部完成し單に

原形に

復する計りでなく幾多改造される筈で佛像の修繕は彫刻家新海竹太郎氏が心血を注いで之に當る事になつて居る、佛像の大きさは從來五十尺ミ稱されてゐたが實際の高さは佛像が三十七尺五寸で臺座が四尺五寸である、佛像の内部には今迄一本の石柱があつて重量を支へて居たがそれでは甚だ

脆弱な

ので今度は幅二尺厚さ一尺五寸ある鐵筋混凝土の柱を三本入れて頑丈にし又後部には縱四尺五寸幅二尺三寸の出入口を設け其處から高さ五間の鐵製梯子に依つて自由に大佛樣の腹の中を見物する事が出來る樣にする

第三幕　よつや街道の場
返し　江戸城大手前の場

徳川家康　眞田右衛門信尹　欵右衛門左圖次
遠山丹波守直宗　柳原小平太康政　千壽市美藏
井伊兵部少輔直政　千代之助藏
大久保治左衛門忠佐　鶴右衛門
多賀七郎助　村右衛門
本木九兵衛　新羽太百藏
高頭助　七
物頭關口玄蕃
足輕大將淺谷小左衛門
德川の家來　芝賀、同歌五郎、同千代壽、同千榮藏、同調右衛門、同龜松、同薫、同小半次、同大八、同鶴二、同千代長、同市平、同十喜知、同調三郎、同千代長、同蝶次、同太郎、同祿藏、同橘之助、同橘平、同五市、同がん八、同荒平、同東子、同軍兵市家三郎、同成彌、同門二郎、同かもめ、同目次郎、同半次、同美太郎、同橋咲、同羽藏、同二之助、同市家三郎、同新太郎、同千代子丸、同左代次、同羽之助、同匠、蛭丸、同福次郎、同左代次、
僧侶　我十、旅僧　羽壽藏、所化　うぐひす小坊主　中丸、旅の男　甚太郎、
船頭　万藏、同芝龜三、同若松
漁師　羽之助、同二之助、同鯉五郎、同左代次、同千代子丸　馬士　蓮八
町の男の子供　中丸、同市輪、同祿之助　藏
布屋　五郎助　鶴
鳳凰　八郎正國　羽左衛門
旅の女房　千代丸　町の女房秀次、同千代松
同娘芝喜松、同福枝、同女の子供市輪、
同祿之助、同小鶴
布屋の娘お千代　十藏

柳原が召捕つた風間を引立てた。風間は其處に居る眞田を見て、よくも度々邪魔をしたと、恨みがましく云ふと、眞田は、お前こそ邪魔をしたが、昔の友達の誼で首だけはつないで置いてやつたと云ふ。風間はそんな事を一生恩にきせられて堪るものかと減らず口。家康は、風間に向つて、本來なら獄門にかける筈だが、入國のめでたい折ではあり、眞田も命乞をするから命は助ける。關東で家康の息のかゝる處に立廻ることはならぬ、遠い處へ勝手に行けと云渡す。家康はてやらうとて、今度の骨折代に、これをさつて置けとて、書きものを渡す。眞田は開いて見て、手を濡さずに江戸城を受取つて、其優美が一萬石、恐れながら此一の字を書直し下さいませぬか、二か三か、多い方がいゝと云ふ。家康は、柳原はじめ井伊、本多、酒井の譜代も、何萬石は一人もない、皆三方ケ原から今度の小田原まで血の雨をくぐつたのだ。お前は他國の浪人、舌三寸を元手に何萬石をねだり出すは餘り慾が深過ぎる。どうでも不足なら一萬石をやめにして五千石に書直さうと云ふ。眞田はいつそ白紙で頂戴じやうとて墨附を引裂く。家康それを見て、お前も風間同樣、家康の領を離れ、他國へ行き、十萬でも、二十萬でも惜氣なく投出してくれる腹の大きい主人を持てと云渡す。眞田は膝の塵を拂つて立上ると、「お前も同じだ、一所に行かうか」と笑ふ間風の申出を拒つて、路違へて立去つた。

井伊、大久保を先に德川の同勢が到着した。柳原が開門を促すと城門が左右に開いて、遠山はじめ城内の武士社杯で出迎へる。貝の音がおごそかに鳴り渡る。家康は靜かに立上つた。

○支那小說ハ德川初期ニ漢文ニ飜譯セラレ、其文那說ノ
紹介者トシテ功績ノアルコトハ今ハ多クノ人ニ知ラレタルモノ、蓋シ
ソノ一人ハ中村惕齋ト長崎ノ通詞ナリシ、唐話便覽、唐詩選、小說選、法華經
、又唐話便用、唐詩便覽、唐話纂要、和語纂要、訓蒙圖彙、冠山、一人ハ史記、平家物語
、西鶴の浮名を敷衍したる、小說精言等の著アリ、今其著作ノ概要ヲ抜キ出シテ、小說精言等
ノ雜話ヲ說集ヲ編入シタル京都ノ書肆ニ向ヒ、千人ノ一人ハ大阪ノ儒者ニ、浪華ノ書肆ニ向ヒ、千
里渡海ノ遠名ノ下ニ、雜話ヲ說ノ翻案ヲ試ミタル、英草紙、繁夜話、莠句冊等ヲ

十二行

著シ、白駒ハ西鶴ノ世評ト同ジヤウニ本朝ノ儒者ニ、西鶴ノ如ク說ハ大ヒニ盛リヒアルヲ、而シテ
ソノ著作ハ利記ニ者ハ、都賀庭鐘ヒアル
勞燈新說ハ大文ノ說我國ニ渡來シタル、唐本ハ、
流行本ハ、ナホ多ク、整校ヲ加ヘタル、之ヲ和譯
シ飜案シタルモノハ、ナホ多ク、ソノ中ニ淺井了意ガ最
初ニ支那ノ伽婢子ハ、ヒトヲ行ハレ、之ヲ全ク人名
地名マデモ日本ニ化シ、流麗ナル文章ヲ用ヒ、來ル
ハ、其用ヲ集ヲ、當時ノ人ヒ、ヒ、ヒ、

といふものがあるこれを能く知れる者のみか世有の鶴峰の行をも留山に出版せしめ北条八北六郎ひあるに六郎は松平君山に漢学を学び能游戯文は也者を先輩として学ぶ文は也者は山本を師と及ぶべきうに北人も屠蘇こと仕へ寛政三年七月二十日八十三歳で歿しれ、

墓は田沢花寺

弾し別に紀六、護花関未定稿、蜂幡尾森の国文の弾あり

一月十九日記

寛政九年国田玉山の絵事大関記出で、頗る評判よるうしが、その後江戸に歌麿の書き太閤五世花見の図、其節の忠津に解を深を誘る

北及び、その後波延て北者も絵版を金せしうる
ん、北者玉山の署名をも、玉山は只美書をか
きしのみうえ実は北斎の門人なれば北斎の著作を
八篠崎三島の門人なれば文を能くし、徒を集め
教授す、文政九年十九歳歿す、阿也可志
禅(文化九年)後本玉蘭洲(文化十四年)等玉山
の名を署するも北斎の著作を不なり
上田秋成の著に桜梅抄と秋雨物語ある校著
云いんとみるのを誤りでし、其の誤は雨月一風が物語
雅録に秋成の著と誤まり認めも云ることなりいと
から、一般に人を誤ることなりいと
遺物抄)和漢の東高人の一節を翻案し

此の外、藤井氏の元禄に拠られし北五冊本を江戸の版元雲府版天保十年の版であるといふことは、時代も同しく而且和語と同く経篇にあるものから誤認したらしい。秋而和語と秋成と春而和語と春而和語があるからの誤認であらう。藤井は之れを寛政十年四月出版江戸の流雲寛主人としてある四冊本の雅篇集也

小形本の西鶴本は何時ころ如何なる版か、後来は明和年間の版と称する者もあるが、方言を以て之れを擬せしか早く寛延七年三月江戸版の異素人帳(同年六月大阪出版西王堂)廓(一名雪月花)あるいは舊説は誤れり、今は書き改めて北二書を初とすべきも

なり、さて北枝ものの研究の欠如たること多く、寛延二年大阪版泉基沿革と題する本一冊あり、大阪の人藝後者中村松兵衛氏にして異土に赴き岡庵主の立教者を受くることを報し、贈答の往復を載せること多し、内容に於ては稍と西鶴本の持説を缺き、寧ろ風来の根本草の先驅たるいふべきものなれど、表題萬象(二世風来)の田舎芝居の如き題材(全くなし)是れ多くあるも、其形式ら西鶴本と許すべし、是れ西鶴本ら得て優れる一点を論ずれこれ多くの実の上ら暫く異書の版元説を破ること不十分なるを如何か

別に大阪板の『花伝抄』といふ本あり、獻笑閣主人の序文あり、次に江南牧谷と称して漢文序島内の牧谷を訪ひ、次に燕山高と称して花伝抄といふ標題の牧谷欽の『元曲』を高橋氏一章異書小帖あり、また遠州の人、沖森氏の本質を具備す、これの刊行年月は記載せざるも之を推知すべき書証あり、即ち寶暦七年正月刊行の穿鑿弥説（一名比喜抄南）は同一心為が『花伝抄』の吹聴あるをいひて推考月光館伝は『寶暦七年以前の版なるべし』とこれも森井の研究に見る森井は尚は一歩を進め沖森本は大阪に移る

十二行

ほぼ同じ頃早く刊行されたりとなして、獻笑閣主人の著に『猪の文章』といふ小説あり、遊べの事を評論雑説述べたるものなり序に辛未の春とあり、辛未は寶暦元年と推定すべく、採花亭主人の『百花評林』（後に浪華柳亭種彦の改題）は太夫天職庵恵芽の改作なり花に喩へ一々漢文と和文とを対比して評論説明をかくしあるが、其序文に「丁卯春正月之吉」とあり、この書名は享和二年の沖森本評判記『花折紙』に見えたれば、その丁卯は延享四年と推定せらる、是芽の『寶暦七年』の異書小帖以前に大阪に於て早くも形本の沖森本発生せしを知り得べく

西義本を江戸起源とする説は承認し難しと思ふ。
先づ第一に江戸時代の西義本は奥
書六帖一部の外存在せず、大阪産上梅の外に陽
童遺編、峯陽英華、煙華漫藁、浪華名
八卦等、幾層年間の作と認むべきもの多数
存ずるに、西義本の為めに氣を吐くものといふべく
殊に聖堂廟の孔釋奠の三聖が李白の物語
ひ出ひ、その後篇列仙傳が孔子の命を受け
て子路が日本国の風俗祝祭に来り、六弘化
の歌舞を奏する事、吉田篤敬が説かれる李白を
と、既今思ひ切つて世の中を考かしたるもの
後年江戸の風説 庚寅三月記

十二行

の名を出すこと、云ふ。
茅井侍士の江戸文学研究は遠海生や毎夜寝後
面白き話を指て讀み、よく人を笑ひ坊ちゃ
時々ひ出多し。後の終に讀み、遺忘の傾向あり
初稿すること一二の事止まず、益々不ル多し
新年かめて後多くハ北書と新村博士の南蛮
更紗とを、南蛮更紗のみ記すもの
あり

一月二十日記

○熱海温泉遠方に数日滞留せんとす
自筆の「さるうの記帳」ハ面白味あること
中自分の共金文を写し記
めるが、先年温泉自筆の一帳を写す物語

る花しなく、山高後を宣尺と言ふ小杭を投かし
求め、其面くもし抽意を以ともに乞家、早速
出来一時掘手し、沈、道道例の走り者も
敷意を持くさる者、天ぢる海の味あり、珠と北
の冊ぢる三頁にてくさる要あり道道荘の附近の
山ぶを経方解す、これ本ぢ
時と言と無んとする小書冊あり、所々に絵味の
深きこハ道道のこれを才一に推すべし　一月廿三日記
○左松の蟠に出する一小嶋ハ我庭園中の一景趣ぢる大
震災ぢる為め北嶋嶋全部沈下し池形多き時
ハ嶋上の樹を潮あするる嶋の一角にある大巨
石ハ杭を以て支へられしぢ杭を外れて水中

に沈落し、此嶋四辺のしがらみハ早く腐朽し、
しが故に震災と共に皆崩潰し、しがらみし支へられ
あらし多くのクロボリも皆水中に落ち、一面に毎
海上の土砂ハ洗ひ流され、嶋ハ半ばく危急に瀕し
左松も其の結果運命同りかなしいとも言ふべき
なれハ、急修理を板木藤
しカを尽くしつあり、先つ四辺のしがらみを改造し、老
松の根ぢハ多くの土を盛て、沈落の大巨石を
機械を以て動し、石下にしがらみを心り、鷹
のごとく杭を以て沈下を防き、漸やく災前の地
位ぢ復することを得べし、嶋嶋の上ぢる七八寸の土
を盛り、庭園のしがらみの中ぢる破壊をつめこ

而、奥後仕事に窮し、屋敷の隅に積み置きし破
瓦北の工事の後、初めて一掃し、土を多く加へ
しに、ながうに工事成りしは、幸とす可し　一月廿三日

右面印　在我
款云　明治十二年春日
八十一翁可亭信

古池書三
特来り示す
一月廿二日

文云
風月双清

文云　陽春只我以恢景
大観終我以文章

十二行

三人の植木職、四方を廻りて路の復興、初めて成る、初めあるも
の巖石庵木等を元り去り、四園にしがらみを組み、大石
の位地を四に復する等に、つかしめ、時を費し、漸やく石
を落不に復する能はざるも、南軒の陰かるるもこ
掛ると移しを日前の工事を見るに、未来山の
興味を感せざる能はず、駄ボクと唱ふる石を組み合せ
セ元から自然の大石のごとく見セ、或を他の石の鑄除を
之れを以て補ふ、酬を敬ふこと走一行の義
べく、同じく庭内といへども石の元数は
野のあるらし、玩ん北方の仕方にいつもの様
の如く一人来りて石を石を
自生と動かすの仮価流石に熟し、ものの大石

石を吊り上げて起重機といひて、横杆で撥きたるのだが、間に合はぬ主義で僅かに二三本の丸太をつかつて起重機とし同じ働きを為すし得るハ此の職人の仮価と見まくし、功成つて池を掘つて島脚を見んだ、池は浅くして沿邸のこがらこと皆あらはる、沿ハ可きかいなるも箱庭と過きずと一笑す、一月廿四日記

○又拾間と一二の図書を得たり　一月廿四日

一清水拾遺　寛永十七年版　二冊

北山正伯と再版あり、こんを創刊して絵を開く、徳川初期に儒仏三教を兼ねて説くこと行はれ、こんも亦其新教のあり、但し仏を排して益ちきこうの上、本書の此書は寛の書の雅号和山嘉森庵とあるあり

北人印のうしろ朝山嘉森庵とあるあり

素心といふ後文化二年後光明天皇に進講、寛文四年七十三歳で歿すといふ、地獄作ハ順礼と同じく自家の抱負を投擲す、その仏を排する所以儒に偏し仏を排する所以なり

北書巻行日数年号後清水拾遺

といふこの外人と伝り著はさる、其間に一日廿五日と入りてあり

心根を早しと評し来れり

一 西鶴織留　六冊

元禄二年浪華と刊する所の書
首西鶴の序のみにて人間万の序
ありこれと掲れハ西鶴歿後遺稿なる
巻現し一版と成りしなり、北村季吟
一本羽町八幡宮に奉納の
と尾崎雅嘉が所蔵の
現に七十五冊を投じて焼ひ入る、
黒川真道舊蔵本也

一 墨法集要　一冊

北村既に家訓まんを武英殿聚珍
版の輝図刻板也を特、善可本と大い
に同から ず、北村の如き後に重きこと
おくこと其の刻の自を採らざる可ら
ず

一 鏌鋣記　平沢元愷撰　小島知足手写　一冊
濱春海校評　極彩頭評
澤元愷が不得意の図学畑のいろはのな
源を考証し如き元と新しく春海が字説
弁誤を著して濱氏が字説弁誤和
考を著しても、其の二書も原撰と

併せ北冊まとめて牧まとめて みる、鬱氏
の細字の藝を評のあるのを狩谷棭斎
であるが、いろはの字源と就ては契沖
其他の先輩早く説あり、元恺のぬき
漢字を書かれ指を染むるのを畑違てあ
るけれども珍い乃ち孫であるが、元恺のハ一
掖軸を生さんと試文なり、春海の一
々折破れとある、春海の字源并漢
ハ流石に一讀の價のあるものであるい
うはを[illegible]といふから北の輝を
[illegible]したものであらう、北者ハ狩谷棭
斎の門人也

十二行

○昨夜高等二年校教授鎮西氏寄宿舎と
酒会を共にして語る、北人帝国化学雑誌
其の研究をなすことなど左の如く語る
日本の舊来用ひ来たる薬の具の内毒素の
多き辯書の如き其一なり、今ハ薬の具代用物
多く出て来り、従つて其しき薬の具漸やく廃
れあく傾向あれども、日本の風土や其他の事情に
適応しなるき薬の具の耐久力無変色な
どなつき特に二風さんなることの如無きあるべし
例へハ辯舌の如きハ[illegible]を辯いて給来する薬
なるがこれをハ春夏の時度の日光に四
五日も赤湯熱におかれても変色

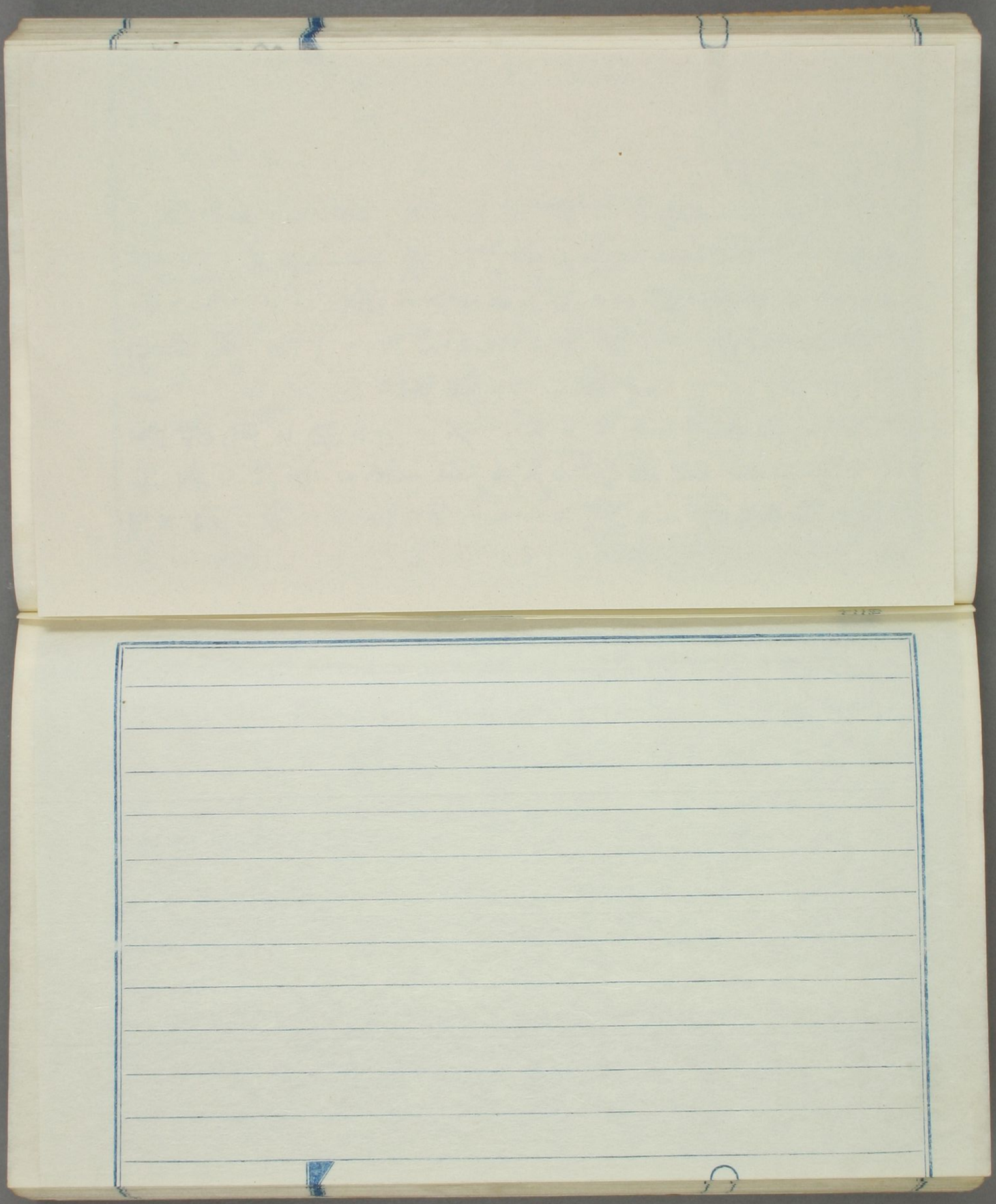
を見さるこの世、夏合は常て絹本に墨の汚れ
未だも三十数種の顔料を横に充から絹の
かく塗り、さてその絹を竪に四切りして其の
一片を日暮らき部に保存し、他の一片を毎日太
陽の輝く下に置き充分日に当て、他の一片は退
氣ある所に一夜置き、日々の変化を暗らき所に置き
なる一片と比較して表を作り試み略々要領を
得たり、亦日本の社会に隣接した所のなる
を例とし、他の一つは夏の暑い夜と顔料
をおかすことあるの思い切り、信濃の絹の
一片を厨に置かくのけ置き、これも日々変化を
捨しなるか、北斎の試験と節しまるこ変化なき

八詳なる其他こてやうに絹本とせこ腐朽をあらしむ
なるもあり、とおもしろき物なり也

他の試験の結果を更に詳なんことを欲す

○昨夜神田の書肆に唐本益智図二巻を購ふ、
同流文年巣睫山人の著る所、本邦の智慧と板
を組合せ模さの形とする巧を兼ねること、其
源支那にあるこの否や未詳なれども北斎
は智慧板の成形を図したるものと上巻は人物
下巻は器具の形を収めたり、余前年北斎に似たる
ものを購ひたることあり、其書は七巧図と標題
あり、の今此書の序を見るに本書実は七巧
図に倣ふと云ふ、仍て七巧図の本書らも

刊行、前々あるこ
[illegible]ことを知る、北七巧図ハ[illegible]長崎の[illegible]と称ハれ
なるとぞ覚しく、雅新前本邦にて覆刻されし
あり、その書も余が第十あり原本に比すれ
ハ幾本大いに優る者あり[illegible]り、今七巧図と
益智図を比較するに、七巧図ハ七片の
板を用ゆるに過ぎず益智図に於ては十五片を用
ゆるの差あり、その十五片を用ゆる所以ハ一画両
儀四象八卦の数に本つくものなるべし、又七巧図ハ唯
形象をあらはしなるのみなれども益智図ハ
あらゆる及び、こんなと一々説明あり、各図とも面白
趣味あるものなり、例へハ「酔人の図」に「家々扶得酔人
帰」、船中二人物の図に「舟人夜語貴潮生」、人物を
活るの図ハ人跡板橋霜」とあるが如き流石に文
那の図ハ物を面白く美化するの概あり、智慧板の成形
稗史の玩弄するものなり、文人の図の後異なることなし論也
益智図二冊の内上巻人物の図中知るべきの
多し、蓋図ハ思構あり有り　一月三十日記
○蕉風皇上ども文の場合図物あり、之れを基とし
今の基を巻うんとす、他を敬意を表するの
要あり、明年余の行する不のうるの石の如しあるの
いまだしのうるうす、更らに推敲を要す
二月一日



○書物雑想　享和の年、尾張の蔓屋平七（吉田重三郎）の著し比筑紫紀行十巻、梅南翁の東西海紀、次くの大紀行と云ふべきものなり、九州山陰中国一巡の委しい紀行八飯り他に無へ、北紀行ハ南翁か隠居体に書いたものとハ趣を異にし全く日々の行程を委しく注し紀行体の風景叙事に入こそ為る、長崎の風物こあこがれて成りを思ひ立つとあつて、ちゆの事が一切委しく大人の時馬酒の羅漢寺の事や四国の名所や山陰の紀やるる余人家の事、祥地等市場村の事も出て為る、人家四五十軒、宿屋茶屋もあると云ふる（きこえいけんなり、別る家の宿駅を通らさるを一証とするなる、人馬の賃銭なども注してあるから時代を見るの料ハ

もある、

東大寺大仏殿縁起一冊（紀年間の版び絵入上中下三冊）を一冊とし比ものゝ、この絵を載せ比仮書ものもあるが、事が東大寺に関せるなりけれ、業が比の板ゝ為る、大仏殿（東大寺）大仏供養に就て不思議なる冥助があつたことを極めて放膳に書いてある所に馬鹿氣比事もあるが、亦おのづから興味ハ〻〻ある

江戸浅草の書肆慶元中和泉屋庄次郎が往典報文三十冊を翻刻比こと八著れなる実比が北沢坊間に「往典報文盛衰書」と題する十一枚許の一冊を見出し比、これを慶元年か北方を翻刻し比時、慶

先ず各所に配つたあと完しく、注典雅文の種々の
本を考証し、後篇虞文弼が攷本及攷証二十
本ハ宋本を参校し比較し善本であると断じ去四
望瞰が終に此書を見るを及ばざりしを慨し
乾隆辛亥重鐫の本を覆刻する次第を叙し
最後に左の一文を附す

翻刻注典雅文始末

本舗翻刻する本の注典雅文并考証ハ享和辛
酉の初夏友人敬月書屋に得る所なり春世
の好本なり老家書を惜まれて業となすこと二世
三十年にちかし其父の時数ゝ火災に会ひ
家貧しかりしが寛政の初今の地に移りしより家

十二行

業を日々に広くなりし事倩ら四方の書を求め江
戸子の庇蔭により余年来有用の書を翻刻
利欲に拘らず長く世に伝んことを思ひしは
かゝる此書を得ることを悦ひ翻刻を命ずること
凡十年ありて其功を成す然りと雖刻の始
あるなくして千部を弱くこと得さるハ其費
用を償ふことを得ず希くハ四方の君子一本
を求て余が力を助ケ給ハヽ幸甚ならん其價
の品目左に記す

全三十冊　粘紙上本　價金壱両三分
美濃紙摺　價金壱両弐分
右ハ市中の定價なり其他郵送の表ハ此の

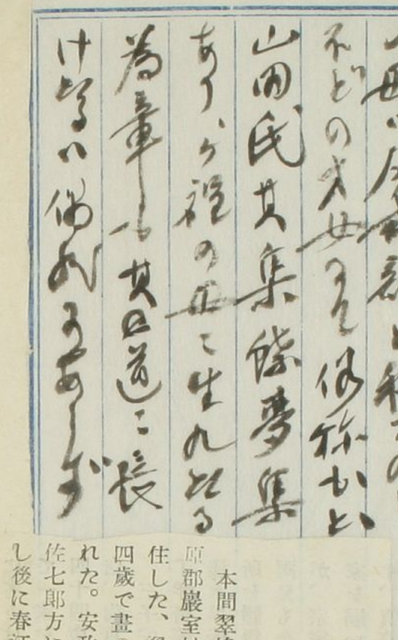
遠近にうつし傳へんことを希ふ人是也
天下に流傳して長く不朽に傳へんことを是望
の所なり
文化七庚午春正月
江戸浅草新寺町板元物之本屋
和泉屋庄次郎記す

吉田豆腐の店主傳兼の序跋に慶元堂が豆
腐の霊の刻板を献ずるよし載せたり慶元堂
が豆腐の門ひろくことをもとくり参考まく
書史に関係あるを以て右の始末書を物
(四巻)也
徳川時代に各藩相続をして図書を翻刻しうることあり

十二行

明史藁の如きも稿刻ありて一部も流布せざる
所以は刻板と搨本とを運搬中船覆没せし故
なり中に没し了るか為のうつ次日山本書店の人り
ありるを以て雖船中僅に漂ひ一部を
拾ひ上げたるものあり之を一覧しうるといふ北の
勅刻は城後方の柳原家に伝らんことを願ふ或へ
東條琴台の巻の書しうる数
文政三年四月幸宮場教授かの清書をして出版せ
めた物語考古書講の黒川真道が撰述
が豆腐輯(黒川真道)
殊に書巻物を検物と考証に於ても的沒後の
著述として特のうる貴ハ書といふべきものあるが出版

[illegible]
出す、且つ其の板木かえびとことを考へまゐらせ貴
重のものとそうろう比、價二十七匁にて賣り
[illegible]
[illegible]
[illegible]



本間翠峰傳

古川修

本間翠峰字は子欣、通稱は榮吉一に荻渚と言ふ、越後西蒲原郡巖室村樋曾の人伊次の第四子であつた、伊次は後卷町に住した、翠峰は天保十二年辛丑五月五日同郡卷町に生れた、四歳で畫の眞似をなし十歳に彌彦神社の燈籠を畫いて賞せられた。安政元年寅年四月十四歳の時同郡彌彦村大字上泉多賀佐七郎方に奉公した、佐七郎は二峰と號した、初め春睡と號し後に春汀と改めまた彌彦角田の二山を望むの地に住するを以つて二峰と改めた、山本梅逸の風を學び詩書も少しく見るべきものがあつた、國中に東西の兩國と稱せらるゝ下田の金剛酒と對峙する銘酒白雪の釀造元である。考るに二峰は行田魁庵の門人であらう、翠峰は二峰の奴となつたが主人二峰の畫を作るを見て酷た喜び、暇あれば筆を弄してゐた、二峰が試みに蘭竹の粉本を與へてこれを寫さしめたが下筆凡ではなかつた、二峰が驚いて「此子教ふべし」とて自ら書畫の手本を與へて前後四年指導した、二峰の手記に「二峰遂に及ばず云々」とある程であつた。安政五戊午年八月十八歳の時に二峰は翠峰を伴ふて三條町に至り長谷川嵐溪に入門せしめた、それより翠峰は三日に一度づゝ嵐溪の方へ到つて教を乞ふたが嵐溪も大に望を囑し其の勸請に依つて翌九月から入塾して所謂内弟となつた、初め主人二峰より名付けられて峰翠と言つたが此時師命に依り顚倒して翠峰と改めた、而して膝下に在て畫道及び詩作の教を受ること前後六年で文久三癸亥年三月京都及長崎に遊ばんことを乞ひたけれども許されず同年十月上泉に一戸を構ひこれに住し、同郡の碩儒西水新保正與に詩文を學んだ、元治元甲子歳二十四歳にして二峰の媒酌で同郡石瀨村淨泉寺住職堀川秀敎の妹とみを妻とした、彼が嵐溪の許にゐた時其業は駸々日に進んだ、自ら技多く先生に讓らない、一つ大作を畫いて見たいと謂つてゐた、時偶々鄕里の某が屏風を嵐溪に請に來たが嵐溪が丁度不在であつた、翠峰がこれを見て技癢に勝へず、竊に山水を描いた、經營慘憺殆んど寢食を忘れたこと數日、畫成つて頗る意に稱ふた、そこで師名を款識し人をして某の許へ運ばした、某が大に喜び

一日置酒して嵐溪を請した、言ふには大作屏風裝潢成つた、願くば觀に來てくれと、嵐溪これを疑つて翠峰を携へて往つて觀た、が構圖も用筆も觀可きものであつた、然し吾が畫いたものではなかつた。主人にこれは自分のかいたものでないと嵐溪が言ふと、「イヤ此前先生が人に送致させたものだ」と言ふ、傍にゐて翠峰が叩首して是れ私の罪であるとその實をつげた、一坐のものが驚いた、嵐溪は心に其進境に驚いたが師名を冒したにより容す可からず遂にこれを逐ふた、翠峰は惶惑した、二峰から罪を謝して貰はんとした、嵐溪が二峰に言ふには「榮吉(翠峰のこと)は吳下の阿蒙はでない、予に從ふも益ない、唯た古名蹟を臨作させて懈らしめてはならない」と、そこで二人で紹介して郡中の收藏家を歷訪して其の秘藏幅を觀せしめ遂に新潟に出でしめたのであつた。翠峰は新潟に出ると山崎彌平方に寓居し、翌明治三庚午歳二月長善寺境内の蓮池内の別莊に移居し其翌四年辛未の春藤井修作、鈴木長藏其他の人々の厚意に依て厩島に一家を建築し同年十月に落成して之に移り五年壬申四月新宅養素軒に賀會を開き友人を招いた、六年癸酉春新潟縣公債局に出任したが其職は記名公債の裏書にて日當金貳拾錢の雇であつた、同年十二月に辭職し、七年甲戌二月更に編輯課に出仕し、八年乙亥二峰が建築した西堀通正福寺門前の家へ十月中移轉し九年丙子貳月職を免せられ、これより畫を以て立つに至つた、門人頗る多かつた、川田小堤小史、寺井四市郎等があつた、また小林日昇と交り深く畫學と經學とを交換敎授した、初め新潟に行くや市人眼なくその年少を侮つた爲め技は甚だ沾れなかつ

た、時に函館が始めて開け、人多く物寡く、家具の類多く新潟に仰いた、その製が粗惡で函館行と言はれた、それは屏障の類が尤も甚だしかつた。翠峰は毎日これを畫いて生活とした、けれど坪井竹坡や藤田吳江等と遊ぶに及び始めて知られ畫名漸く著はれて來た。明治十年に内國勸業博覽會へ出品の畫を同年六月に畫き裝潢師山内忠藏の名義で青綠山水と花卉の二幀を出品し褒狀を得た、今は二峰の家にある。同年七月二十六日蟹の中毒で死んだ、年三十七。二峰が曾て翠峰の爲めに配を定めんとした、香火院某寺に二女があつた、一は慧、一は魯と言つた、初め二峰は慧子を翠峰に勸めたが合否の夕、魯子を慧子に替へた、翠峰が始めて誑かされたことを知つたが恩人の意に違はれぬので自ら安んじた、所が内助善しからず、生計の爲めに繪を賣らなければならなかつた。また大都に遊ばんとしたが家が纏綿して果すことが出來なかつた、歿前に一夕、人が蟹を贈つた。翠峰は甚だこれを嗜んだ、烹て酒の肴した、殘つものを明日食する爲めに厨に藏してゐた、時丁度秋暑であつたので腐敗することを恐れて妻に烹なほしを命じた、妻はこれを遺れ佯つて言ふには命令通りに烹なほして置いたと答へた、翠峰は知らずしてこれを食ひ、遂に其毒に中つて死んで了つた。釋楮庵の「禪餘畫談」に「石川侃齋恆に歎じて曰く『噫吾爲ニ死後侃齋一』と亡友翠峰の如きも亦た此歎を同うす、予一日其全紙に十六羅漢を畫くを見る、潤筆を問ふ、廿五錢なりと、聞く侃齋の半截山水、米一升に易へしと歿後聲價漸く高く今や數金に値す、翠峰亦た然り、然れども其れをして生存せしむれば亦た唯だ廿五錢のみ、若し數金を獲んと欲すれば幽鬼となりてこれを畫かざるを得ず、九泉の下侃齋と共に抵掌して哂ふべきなりと文人窮厄古今同慨と言ふべし、予また之を聞く、藤井無事、彌岳父子尤も翠峰の才を惜み、之に漫遊を勸めて曰く、子但だ行け、家眷の如きは予代りて之を養はんと、翠峰感泣、歸りてこれを婦に謀る、婦魯事を曉らず但だ謂ふ良人吾を棄つと。悲涕泣號生を欲せず、翠峰奈何ともする能はず、事竟に止む、會々彌岳事を以て西京に遊ぶ、翠峰自ら一帖に畫き、彌岳に屬して曰く予の大都に遊ぶ能はざるは命なり、幸に名家の一言を得ば晨夕展觀以て自慰せんと。彌岳爲めに山中靜逸の題跋を請ひ、歸れば卽ち翠峰已に歿して二日なりと言ふ。帖現に彌岳の哲嗣致堂の處に存す。靜逸その臨摹の精を稱せり、而して翠峰これを見るに及ばず、噫何ぞ其志の切にして天命の奇なるや」と

小林日昇翠峰の死を哭し「爲君只惜一杯土。埋却四方汗漫心」と。新保西水は翠峰の行狀を撰した中に曰く

余居曾根。翠峰以余於嵐溪二峰皆爲友也。時就問詩及倭漢典故。嘗觀余寫字。謂余曰。少年於書畫。務事臨摹。故其業日進。老大憚煩。信手塗抹。故多杜撰。夫人一廢臨摹。則其書畫不足觀也已。余歎賞以爲知言。卽此言可以見其志之篤而業之精也。故翠峰之於書畫。宋元明清諸家。無所不窺。山水人物草木鳥獸以至篆隸。無所不能。尤精賞鑒。家雖不富。而其所藏。皆明清名蹟也」と。また「翠峰號才能卓越。而天不假壽。以故名聲未足以副其才。而内無承箕裘之子男。外無稱出藍之門生。其薄命。亦可悲矣」と。楮庵が翠峰に贈る一絕に、

悲何不見知於人。從古名家多隱淪。大雅當年立橋上。清風幾握供龍神。」と。

翠峰は畫技の外に明治二年頃から文徵明の四體千字文に就て學び頗る篆隸を善くし鐵筆をも多少心得てゐた。

明治十七年に鈴木長藏多賀二峰等翠峰の不遇を憐み知人と謀して碑を建てた。小林楮庵(日昇)が文を撰した。その中に友人將建其碑。相謂曰。暗於平素者。修文以飾恐多諛辭。是非畫伯之志。不若有友人之文。而傳之也。余好畫。屢往來。是以推而不已者。大雅與大典善。大雅堂死。大典修其碑文。大雅之名益著。余與翠峰善。惟但恨文章拙劣。不堪叙於其盛德也。」と。また曰く、

「天若假之年。天下妙工應推此人矣。」と、識者皆な翠峰の非命の死を歎せしと言ふ、彼の詩に、

偶成

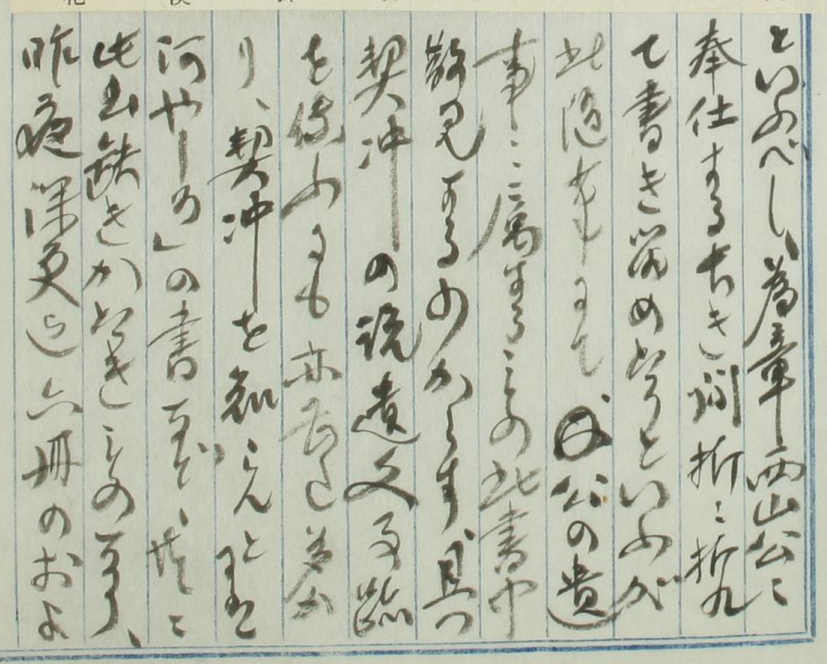
一枝敗筆掩柴關。明月清風意自閒。堪笑先生生計淡。朝々拂紙賣青山。

題畫

惟禽啼過水冷々。古木蒼藤蓋草亭。寒磬一聲人不見。隔ㇾ林溪寺夕陽青。

舟抵大野驛途中所見

長堤十里已斜暉。社鼓那邊響石磯。手揭孤篷回首處。荻芦花外野禽飛。



そを後立し、今相聞こゆ伝を大明神に奉し旦つ遺跡
を伝へん為め二三の事を物すとなり

世継物語 今いへる第見

上の物語四十帖をいつのころかか春梁衛つの尼
といひしなるべし、なほうへ後の古なるべし、月日百重
を添へん春梁かつて泥之とあり 為憲つらく考
へる春梁か心なりそれ時代こうへハす、その年さまん
なりさるところおほけれハ私考一年を定ること難
考物語納め侍り如、まもなくけんハ古へのもの
まし大鏡弟四の奥に世継の名と標して一日宴
二花山こつ明る中納言うまくの巻の名を出しと
ハ栄花物語の巻くれ名なり、まこと後世継

十二行

の序ないたくおほうちたれいせきこのん侍りき
向の安なるん侍りまつり侍りける、名を世継とつけ
おのつからも変せるもとはふん、口ずさみてもはる
物語とうまうて侍るあり、下略 同弟十四巻浪の
巻ゐに出そく、世継（古）おほき 遠長物語 おとしの物栄（紙
さんとそ異まこと博覧の序と云く、世績とハ四十
帖の冊子なるを延喜ら堀河の史事まれハさこし
出ばやうなる異 是等なる栄花物語さて世継
とかうんそこん春梁か心といふん、お日ちハもはれ
以前四ーきこのん侍つ名ハ世継とーきこと物まハ
ふるくハ男子の心とおもいんなること為憲この序
まこすを作りける、又拾物の載ゐ定家の

口の押紙まで世絶物語とあるハ今の業花物語なり

紫式部

今ハ昔物語に　城新寺殿藤といふ八紫式部が親なり此殿時源氏物語のもとをもとめしかさまやうなりもをむすめ有ふせとなり載せあるん勅し為家物すなる光源氏ハ文章のくさなりもわきまくめ無下の人つ侍るなるしかるに尚くの意を天ん おとこなりハ四ひ侍るめるなれとも世の板向なるうへ言葉のつくき一人のおとこなりハ書くしをんの くさなり一部まわとしてくいしるもの人ハ此説に迷ふ人こそ多くなるとまくう為春しくハ為

十二行

妻の著に光第紀七論あり就て見るべし

花生子　傳生子

ちの津國摂津に三ッの花生子謂婦女懐甲後娶為妻妾而生かしこなるハはらみなる女を出ハ此をとりうみとる子のなりなり　又云傳生子謂妻妾假粧身孕使令傳通他人之子　志ひとを子をもつ女の夫なるひハ人の前まえらみなるまゝ成しも他ハ実ひとをみなるものんあらかしをいひあハせ夫ハ此をみのうこと成ハ明りまもとうなる子のなりなり尾まもちこしとあんまんくハ世なるなるなるべし

家持ハ美男

業平の容顔うるハしかりし世ハいひ侍るハ伊勢

拾遺をもとめ人おもきものをもかるがるしくせさせ給へ（たまふ）
萬葉集四十七巻平群氏女郎の歌十二首の御
詞の家相伝の美男うつけるやうに手三の笠
女郎うた馬野の紫ふかく（れ）たひをもとめ（ら）る手
四手八をもとむ今ゆの女郎さいたくまもあまたの女
の心ばくさけり

安元の火

人皇七十四代の安元の火といふは白仁の兵乱の火かとも
あ元の火をもとめ（ら）る手ばの異域のいまこそ
後りさとらさえハ文書の元ひとつも文部四史
注家の記録歌也ものうつ（ら）

已酉安元三年四月廿八日云曉更ニ（先）云物前
火猶未消京中人屋多以焼亡云ニ隆重〻文也
不残一紙焼之ニ又隆職文書多以焼了宮
中文書悉底歟仍實定隆雲資長忠親雅教俊経
等皆帝文也家也今悉焼亡我朝衰滅其期ニ
至歟文平的文書六千巻同時焼了云ニ焼亡所ニ
大極殿以下八省院一切不残（後鳥）

萬葉ニ第の歌
萬葉集ものうつ第のうつ一巻ものうつ文
りのう相式天皇の御宝位聚国史七十
五巻ニ載セラル（延暦十六年十月癸酉宴満
附）皇帝歌ヲ曰くニ　萬葉集ニ淡路廣

帝天平寶字年中までの歌を載せられたれば一首
しるしたるは、稱德光仁の御代なるべし。桓武御こころ
ともろこしらの萬葉をこそ

三十六人集

光明山珠尾契沖阿闍梨の云く三十六人集さ
のかう集めたるもあり後人のわうらなるもあり其
集をとの尾ろをつかうまつれいうる
かうるあらんおほつかうまつる南北八幡宮
のつめなるべし、格ちこうさんなるべし、又康秀
遍照里主良文棟梁元方の四深養父忠岑
躬を除てあんらん及ふすし紀貫の心者を入
なるべおほつかうまつれるつうし人麻呂の集のひとし

十二行

ふる信し雖きこのうち、萬葉集の中うのしたの
哥まぬきは上うの六十よろくをあのあのようる
ぬ、珠の四ろにかくめものうう、さきるる哥のもか
と延喜天暦の後の尼者ぬ志ひとし るるさし

萬葉集、新撰ろうす

ろうは西山宗祧萬葉集を えくひるの時二十
巻の中をくハしく考くらんてまくく新撰の歌
にあるう、大伴家持ひとうきと延ようる私にあうと
至ろうるうとと 西條河内守しくく論したまくう後
の契沖の書至こうあるを見るの集や全国の歌
おようを四十八巻の為へうう

百華百葉譜　一冊を得、米庵自筆と覚しきものなり、書体較〻晩年と異なり、筆譜の初稿と心得る頃の書なるべし、巻首に「作為」の字の享和壬戌の序あり、自分享和頃の米庵の書と見て可なるべかり、巻末に米庵の印二顆を捺す、今米庵花葉譜をもり出し対照する能はざれども内六大日如来の図は、なほ数、但し北宗なるべし、花葉図を欠く、筆譜の刊行前に百華百葉譜と名づけしことあるは之に依り推して知るべし、珍書と為して可なり

明史文苑傳　四巻　寛延四年浪華の関世美の依て刻せる、序文を見るに此頃明史初めて日本に来る所なりとの事、且つ此書三

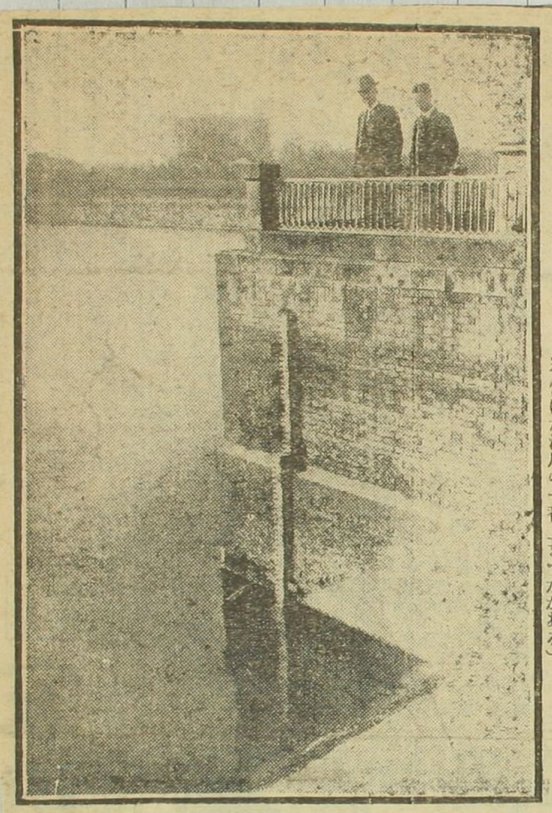
十二行

百数十冊の大部数なれど、巻目に婚姻すべき部分と雲刻せんと欲せし部分とを分ち、先の刻したるべきを、明史小清の法廷玉の撰に係る由初本邦渡書家が之を乞うて鬻ぐ書なりしが、文苑傳は巻二百八十五より二百八十八巻に至る、楊維桢以下六十人を収む、高輿服志職官志藝文志を刻追て刻せんと期したること巻尾に見えたり、他は刻するものなきが如し

繪本徽瘡軍談　三冊　伯州米子の梅毒医の著す所、天保九年浪花に刊行、紙錦(敬祐)の著す所なり、小説に托して徽毒の恐るべきを示したるもの

病藥之戰の狀を叙す、醫官萬實湯五痛殘徹毒大王藥將延壽丸同治養丸同徹效散同象寺良湯　うんど主要人物多、後も相向のうえ敵書に記す露骨なる醫学の多く生じて
うるさく小説うてハ毒と不成功のうえ、此書種の中にあるも小説中のあることを知らざる可し、
梅毒を軽治流行を戒む、抵し醫師か自家度出こ信しなるやあるん、田舎医師の低治不こ恢抵
七日ず、後ハ浪花の蜂山垂春の著也
扶桑略記　官版十五冊　官版ハ抵抗支那の在書を選入て刻し、和書ハ及のず、唯此一書を刻し、乃ち元の文(孝義録もあれど)此書上代を掘河事と

及ぶ首巻ハ原本欠如、末巻に抜萃の一冊あり、文政三年刊する所、本書ハ国史の研究に大切なるもの
り、舊鈔本謬訛少なく、官版ハ最も正確也



減水を物語る水深尺
東京は永々の旱天續きで水源池豫水量減水し東京市水道課では廿八日より水量の節約大号令を爲した、寫眞は平常は水深尺の一番上まで水がある

○一月以来降雨なく元源枯渇の狀国の如しこの大雨も枯渇を補ふべくもあらず、各郡の知列しきんハ所為

電氣七今〻試ヒ不参易の事迹も忘記さん心細き
次第なり

○寛政年間幕府が佐倉の振興を奬励し往史の記
の企書を選び官版とし聖典に於て飜刻されし
事が天保年間まで迄人間の注意と事数
がどんなことあるか、杉山勢一の官版書籍解題略
にあげてあるのが百六十六種に上つておる、此の解
題略は天保十五年の版なり、其後も
版は継続して出たから、数は之以上ある、考
義録抜萃略記のごとき北辰堂版と
徳川幕府時代書籍考に載せる九十三種参照
あるが、之も書漏らしたものあるかも知れぬ如し

十二行

等官版書籍の版木は例行の後書肆に賜り、書肆に
仕来出版を許したから官版の二字を削ることを命
じて官版と賜版との別を立てた、寛政十年二月の
布令を見る

最初官板被仰出諸用達の後板木被下置
成御出版候ハ諭御義、東醫寶鑑と数其
外後令、如官版と後世書肆屋に板
木不相違候ハ令向後官版後官版の文字を歩賜
版面行の文字と相改めて候
とあり、版木の大部分は後一旦山城屋佐兵衛の
手の内に入り、其が数代して、残版六十四種丈が
京四條芝肆の賜に下とて昌平叢書として

御倹約令に、
徳川氏は一面官版を出すと共に諸藩と合して翻刻を
奨励し、各藩は為めに一時競争して、天保十三年六月には諸藩に出版奨励の旨を大目
付に左の如く達した
一文学の儀は事の格別御世話被為在候に付、官
版も被仰付候得共諸家花版に成り候儀
勿論に候、一躰大身の輩は心掛
次第大部之書は二部宛花板いたし著く
後来迄相伝、稀有之儀に候、此段十分
に以上の面々江名指の被仰達
此奨励に伴う諸藩の続いて出版を合して十萬石以下の

大名も志ある者の出版を試みるに至り、のみならず
四書の翻刻が出来たが、是今を遡ること二年、弘化二年に
は米艦の浦賀に来るあり、追て海内騒擾し出版に
代るべき銭鏹乏しきを以て世の中とても
て藩地に仕法を改め、或は或は、江戸の藩邸に於ては
ものも未完で終つたものも無いとは云へない
日本に来て四書出版を自らし或は助力した支那人は
ゴツラフ宣教師三年九月刻字工
陳孟千、陳伯壽の二人が来朝したとある、南都の
北寺で仏典を出版するに北寺二人が共つて為すことの
者（さるを得ぬ）又彦根の佐久人俞良甫が本邦の
乱を知て我国に情化し、京都の郊外嵯峨に

下長し私見とは多くの出版をやつておる、乃ち慶
三年の月江詩報五年の梁山集七年の
李善注文選嘉慶元年の俳注西京雜
柳文集春秋左傳集解等数多出版
北の版を善本と称する人多い。
八倍多くこれあるが、版式は唐版に
奥田北の地名と別にさくある、れんは唐版と呼
ふことを富士田氏もあるとの事。
○要法寺版とは何か明かに要法寺とあ
ることあり無いから推定に過ぎない
ようである、直江要法が文選を出版
したのである、北寺は京都にある日蓮宗に属する

寺で其寺の本地版の意味世雄庵日智日健とあるが
同寺開版の印刷があつたと云うんである、要法寺版と
ゆうて刻されてあるのを論語集解十巻で之れが為眼
科正遠刊とあるから、他の為眼科正遠刊の四書
も要法寺版と推定される、尚要法が文選を出
版したのは慶長十二年で特に銅活字を出版
したとある、乃ち本邦に於ける銅活字の嚆矢である、
北文選の尾に要法寺と刊することは無いが、羅山文集
の題跋の内に刊記とあるから
○世の不謂段氏所用集の原著者とは稍々の流も
あるが、善本である、林宗二である、林家の先祖
は建仁寺の龍山禅師が入唐した初の時伴ひ帰了

我国の文化に林学因であつたことが大変良び後頭屋を
家業とした宗二を其二世の時で明応七年に生れ和
漢の学に通じて居つたといふから、節用集の著者と
云ふことは疑ひない。しかるに此の年代が合はぬ
と云ふ説は北条節用集にもある。明応四年の写本があるか
らと、こんな古い年の書籍は林家が
関係があるから、或いは仁寺と林家が
の仏と関係するものかもしれぬ

○朝鮮の役と彼の活字を合捕して帰り、之を因り
基き年間に種種の新版が出たが為めに慶長新
版の名も起つたが、実は文禄二年に新版
と云ふ説が出て居る、これは後陽成天皇の勅旨に出た

ことが確かであるから、新版の権輿は文禄勅版に帰さ
れねばならぬ。但し此の文禄の版は朝鮮伝来の副産物であ
るかもしれぬ。速断は出来ぬ。或いは早く活版の事が知れ
てゐたかも知れぬ。兎に角文禄慶長は活字版の盛時
として敢て異議なきが、今日迄開印された事実がある。
これは全く高麗の式と異なる洋式の活版術が天正十八
年伴天連ワレニヤーニが葡領印度総督の要請で
秀吉に渡した時、彼は西洋の活字と活字鋳造機械
を秀吉に献じた。これが宣教師の文禄二年先つてある。
と云ふことは疑ひない事実だが、今迄の開印された不思
議に略ぼ同時代に東西の二大国から文字の機械が
日本に輸入されたのである

○家康ハ印刷活版史上忘るゝ可からざる事績なりとす、彼ハ木活字十萬を作りて之れを三要に與へ又銅活字
十數万を作りて之れを相国寺に献じ、又自ら林道春僧
崇傳等を督して銅活字二十萬を以て大藏一覽経
出版を開版せり、大藏一覽経ハ駿府に寄進せしなり
さて木活字を作りたるは家康が伏見に於て開
元寺（北寺後に京都に移る）に作らせたるなり其
活字を著る日光寺活字といふて長方形なり此活字及び三
要の開版に用ひ伏見版といふてあるが、銅活字
を作りたる駿河の家康が隠居後なるを以て其の
版を駿河版と云へども、実は家康の心づかひ
活版をすゝめ駿河版と云へるものなり文禄

十二行

り特活字の発明と比べて区別する方が筋が立つ様
に思ふなり、
今南葵文庫に保存せられたる銅活字大千餘個小五
千五百餘個ハ奥匡郭の文字の缺畫のあるものを以つ
て業とせんハ朝鮮の四書を印刷せしなり、文禄の後
朝鮮より合播したるものなりと
家康が伏見にある時文録を覺えることを思ひ立ち
三要と延利寺の校を起さしめ（伏見に二の校を起さしめ
北日光寺が印ちたれど、）之れに二万の寺領を附し、
三要が十萬個の木活字を以て開板し仏書ハ孔子家
語、三略、六韜、貞観政要、東鑑、周易、七書等なり
あり、後に北寺ハ京都に移る、北木活ハ今も北の

材の用元寺に施されたるものである。

鋼法師の所作に鑄造されたるが、何故か多くの働きをなすものにて、直江が私力で作りたる鋼法師なりしに、駿河の駿府なる鋼法師は、僅うに二種の本を作つたるきり、全体鋼法師は余の長くつゞき、使用の頻繁を訴へたるものである。

のみならず実物働きをなさるゝことは偶然にもあるべきやうに、一寸注意すべきものである。

世界に一番早く鋼法師を創造したのは、朝鮮である。釋敎大師の所義に鋼法師と刻したるは、永樂元年に序のある五流と鋼法を作る記事が挙げ

ある、支那に於ける鋼法の創造は、明の成化弘治の際とされんとするも、なほ朝鮮に較べて相離れること遠しである。而して西洋の活版の発明と先つこと実に五十年である。

○本邦で最初に刻成したるは慶長元年三月で、天海が幕府の命を受け東叡山で開版したるもの始刊以来十二年を経て、こんの一千四百五十部、十三百二十三巻、六百六十四函といふ大部のものである。紙質堅牢なる宣旨の良品と称せる、所謂天海本又は寛永寺本とつゞかんとする。

寛政の九年大正元年に、こんぴらである。

花押は早く弘安年中、僧行円勅旨を奉じて着手し、弘安定成するもこれを入寂したのみ中絶し、北朝の貞和元

年に兵部卿親王宣旨が一切経開版の事を勅任
なしたまふ、係し完成したのかどうかは不明ひまず、降て
寛永十年、延利義持が大内左京大夫の失脚して既
本を求むる書中に「大蔵経開版北方経年刊之孔艱
而未克全備」の語があり、恐し是が貞和の頃始め
人に予業の継続あらんことを、五十餘年の日子
を経て未だ完成を告げざるを嘆ずるものあり、然
るに此の時良好絶倫の方策本蔵経が渡来し
たので、新に能本の印刷に全力を注ぎやうとする
刊版の業は即ち任性を来したらしい（二月七日
録）

○幕末の木活字で苦心を除る一例は韓源子翼の『毛詩』

十二行

の、北方は福山藩の一藩を大四全角（表は文）が著した
もので文化十年木活字版で印刷された、七と本書の
離版は藩の事業として行はんる筆写であったが、
故の為を憂慮延しにて、獨力開版を思ひ立ち、享和
元年先づ玉河氏に刻する千の木活字二萬餘を
手ずから作り、その中に不揃ひあつたので大いに改
修を加へ、且つ不足の分を補刻し、総数三萬を得
たのでこれを共離刻に三人の男子に命じ、家財の
豊かなるを以て、数年を経て漸く完成を告げ
つゝある年の二月を背面の看護をなし
し遂げた彼の辛苦は実に大なるものがあつたと
おもふ。

皆服父業、兄弟三人廻勉從事、遂發紀兒異寢
といへることゝ、以て文獻物の狀を見るべきなり、斯の
ごき紀家庭の開版は、頗る孫とするの迄る、役目ら浜
る天こ俊の印行しこのハ三ヵ部であつて、古版圖録
るハ寶和元年刊とあるけれども、えんハ誘ふ「今義
代辰亟夏乃得字業美」と自跋、この記してあ成
辰ハ即ち文化七年にて、辛酉（寶暦年）の工を紀
ふ、年ふる漸く成を告げけれども、之を全部
流版とい、不体裁の流家成ふるとも此書ハ支那渡
るる迄る好著である
○寶龜版の四種の陀羅尼が現こ存在してゐるのハ日
本ハ世界こ版本の祖として誇つてゐるが、さて之れを次く

ものとうてハ弘法の後のとうてゐる、寶龜版は
佛面書の上木されたこゝもあつたこゝも知れぬが、仮令
抑が存在してゐるのだから、無いとこゝもしれないこゝ、寶龜
ふ面あ相違の記事のガツがある、えんも知れてゐるの
だハ、寶流二年こ開版されたこ称する陀唯識論十巻ハ
陀羅尼こ次ぐの版とうてゐれ、近年江州石山寺
から出現されたこ刊本佛説六字神呪王經一巻と
巻末皆記す天長元年の朱書があるのだ、寶流版よ
りも比較的早いこゝもあることが知れた、内閣文庫
三所蔵の刊本の法華義疏二巻ハ承暦四年
（白河天皇）の墨色があるから、えんも寶流以前のものと
あると推定される、斯のごとく追こ古るいこゝのが顕

ハ元と来るか、○刊年を顧く経巻が多く、版木ゝを年
號を刻し名其部分を彫らゝこゝろとりして、今ところ
て刊年の研究が容易ならぬ。名前述法相の成唯
識論ハ東大寺尊勝院の旧蔵にある、版木の現存
てゐる最も古いのゝ建久六年に開板された成唯識論
述記の版が興福寺の北円堂に蔵されてゐる、或ハ天
あ二年十一月八日の奥書のある成唯識論を以つて陀
羅尼に次く古刊本と思ふものゝ西村氏又
の偽版にあるが、此文ハ延長の年號ある偽版を低る
支那人を欺いたこともあるし、油断がならぬ、
○三十帖冊子ハ宣旨が自から書写(或ハ指定)せる
宣旨を手傳させたと傳へる。伝聞後東寺へ献ぜ

十二行

たるとか、或ハ弘法が勅を奉じて、或ハ高野山に入り或ハ
伊賀の国提寺に隠さん如くもあるとか、延喜の制に
東寺の長者観賢が千日間精を尽して宇多法皇に
奏上の結果特に官符を下して東寺に還附せ
さん、一旦東寺に戻つたが、文治二年仁和寺の守覚
法親王を傳授し、而後留置せ今ある由(仁和寺
に傳へ)ゝ聞くとゝ。
○表題経 法華経に天竺の一族が書写して嘉峰納
めた法華経二十八巻、無量寿経、観普賢経、四阿弥
陀経、般若心経各一巻、係七七三十二巻、外に法華の
勧文一巻、北内四巻ハ法華の自筆で、奥書の年
紀及弘文さんから推して、長寛二年と考へし、仁あ

二年に至る三年間の出来上つたものゝ中に、北畠清定
は権中納言から権大納言内大臣を経て太政大臣に昇
つてゐる。即ち願文の「長元二年九月従二位行権中
納言平朝臣清定奉敬白」の文言がある。般若経巻末
「仁安二年二月太政大臣従一位平朝臣清盛書写之」
の奥書がある。北経巻は華厳義を極めたものゝ
辭を採つてゐる。巻首・廊の像は清盛の為め
建の筆であらうと思はれるが、一寸見
一族が他人交へず自書いたとあるが、北の推測も南
朝と異説からすれば、為経・清盛以上の
外に清盛が各巻首端に数行を書き、之を承けて
教盛が経書そのもの紙金泥水晶軸の手家宮経

十二行

が出来る。これを未に寄附されたものである。
以上九枚は田中敬の近著国書学概論を後に遺
忘に備へるために抄録したものである。者文の表現
上原文に従はず、或は自説をかくに所もある。北吉
こは往々誤謬もあり脱漏もある。早稲田国書部
の有名の写真皇統の礼記の義疏を帝国図書
館の巻本としたり、上朝の言葉を年代を
誤つたりしてゐるが、別に意義を感
せしめた。又日本の古言本中に風の金剛坊
陀羅尼を脱したものは不詳。鑒と云はざるを
得ぬ。北の経巻は日本に存する世にもたるべき宮
経だ。余は割愛した人小川に送つたものである

二月八日之事

○「一刀流家」池永道雲の印譜多し、千文と私印を収む、余前年零本を得て義すこれハ六冊まで完本也巻首に寛政の序あり、康熙年号清人宣明の序の序あり又七井年陽の序六年の跋也、巻尾に組徐の跋あり四枚跋と云る長崎にて正徳改元辛卯秋八月●の跋あり、本邦印譜の歴史に於て尤も早きこと云あるべきなり、刻ハおもしろからざる也、拙印同時代を以て書すること、彼人の印も道雲の刻し成るこの類、刻法解る者、（相自近きこと有り、道）

雲の家ハ今も存せり、日本橋馬喰町と云あり長持一個に遺印を蔵すること有り、此家も大震火に焼失し此日ハ遺印多分失ふ惜しむべし、此印譜の末尾に印箋二紙貼付あり、共に道雲の私印なり刻者不明也、且つ、此印譜中に無きこと多し他人の刻と見へたり、池有の印を中井敬和鎖と道雲の印と為す所以ハ道雲の通称有れ共●こう故と云ふ、二顆共刻者を異にせり道雲の印也、今数使をおさめ左に収めおく、馬喰町の池永の家無ハ

二月九日識

繁亭主人

両面印ニシテ一面ノ「池一峯印」ハ林経朋氏磨滅シテ
今存セス印影耳ヲ止ム同氏印ト倶ニ本紙ヲ贈ラル
明治三十三年七月十四日

道雲ハ若しくは貴家を業とも
今も同じ世系を受ひたりく

十二行

ヲハ有ノ字池永道雲ハ通称
有右衛門ト云ヒ中井敬所云フ
又劉右ハ不明ト云フ

○いろは歌ハ古今集の序のあるまことと立論セラルガ此説
大矢透の研究に據ると天禄の前後から永觀の頃
迄の間(凡九七〇―九八四)の作と定也千載若くハ其
涅槃経の四句偈を写せる歌と云ふ何れにせよ
を忘れず本居や細井広伴世説がいろく云
しかあれども、口誦が流暢ひろまり仮名の活布
しるべ、曾て蒲生報が四音歌を募集し才
一等の撰に入つたのがうまく活潑に出来てゐる位
右ハ坂本氏の説中で、四十七文字を通用の「人」の一
字をかへてゐる
そうそくこゝろ
す、七めさまも、又よあけ知しる

ひんかしの、そらいろばえて、おきつべに、はるあめ
ねむれるみぬ、もやのうちに

十二行

…意見…

大隈老侯の傳と共に刊行さるべき書簡集に就て

名譽理事　市島謙吉

大隈老公薨去の後匆々既に三ヶ年を過ぎ、去る十日(一月)には三年祭が執行された、此の忌辰に當り、私共老侯の傳記編纂の衝に當つてゐるものは、一種の責任感に打たれ痛切に傳記の發行を遲滯しては相濟まぬと感じた、老侯歿後約半歲の後三ヶ年を以つて完成を期して着手した傳記は、本年の六月頃には是非出來上らねばならぬ筈であるが、幸に全部三卷の內中卷は昨年末に組上り、他の一卷は三月中組上る豫定であるから、略々豫定通り進行するであらうと思ふ、此の編纂に就ては其の

良、絹表紙裝の立派なものである。

昔迪傳記には參照として關係の書簡其他の文書を本傳の內に收める例もあるが、これには種々の不便が伴ふて展觀の際卷舒が煩しく、隨つて多くの參照書類を收め兼ねる事から考へて、本篇には必要の挿圖を寫眞版にして收めるけれども、書簡類は一切別々に一册のアルバムに可成多く目つ其の文字を成るべく大きく鮮明にあらはすことにした、乃ち短文のものは原寸大に近かく、長文もの

收め置くことにした、收めた書簡約二百通、緊要の書簡は筆者も幾通も收めた、例へば三條公伊藤諸公の書簡の如きは、皆國務に關してゐるので、何んと割愛し兼ねた、尙ほ書簡にあるものも幾らか取入れた、それを飾る先帝の宸翰を始め、皇后の御筆、今上兩陛下の宸翰ものである、又木戸公の自筆の御誓文のごときも、卷首を一材料となつてゐる、維新の臺に活躍して今は故人となりは傳はつてゐても其墨蹟の多らない諸家の書簡は、特に意て採收した、其中には頗る珍きものがある、斯くして明治り現代に至るまで知名の大家網羅されてゐる、此アルバム見ると、宛ども維新後の大人物に會し大隈老侯を附三

込牛京東
番三一五五牛話電　會友校學大田稻早　番四八八

▼意見　大隈老侯の傳と共に

——目次——

■■■ 意　見 ■■■

大隈老侯の傳と共に刊行さるべき書簡集に就て

名譽理事　市島謙吉

大隈老公薨去の後匆々既に三ヶ年を過ぎ、去る十日（一月）には三年祭が執行された、此の忌辰に當り、私共老侯の傳記編纂の衝に當つてゐるものは、一種の責任感に打たれ痛切に傳記の發行を遲滯しては相濟まぬと感じた、老侯歿後約半歲の後三ヶ年を以つて完成を期して着手した傳記は、本年の六月頃には是非出來上らねばならぬ筈であるが、幸に全部三卷の內中卷は昨年末に組上り、他の一卷は三月中組上る豫定であるから、略々豫定通り進行するであらうと思ふ、此の編纂に就ては其の經過其の苦辛其の成績等に就て語るべきことが少なくない、近かく一二ヶ月の內に、詳細報告書を發表することゝなるであらう、其際には此學報紙上に掲出する積であるが、今爰には傳記に附帶して發行さるべき書簡集に就て大要を語るに止める。

老侯の傳記に伴つて大書簡集が出版さるゝ計畫であるが、先づ其形からいふと、本傳とは全く體裁を異にし、幅二尺竪一尺二寸許の大アルバムで枚數二百、コロタイプ版、用紙精良、絹表紙裝の立派なものである。

昔迪傳記には參照として關係の書簡其他の文書を本傳の內に收める例もあるが、これには種々の不便が伴ふて展觀の際卷舒が煩しく、隨つて多くの參照書類を收め兼ねる事から考へて、本篇には必要の挿圖を寫眞版にして收めるけれども、書簡類は一切別々に一册のアルバムに可成多く且つ其の文字を成るべく大きく鮮明にあらはすことにした、乃ち短文のものは原寸大に近かく、長文ものは折込としたものもある、乃ち木戸公伊藤公の長簡などは三間餘もあるが、一行でも節略しないで全文を收めた、此等書簡の內には、直接大隈侯の言動を裏書するものや、侯の謎を解くものや、侯の寃を雪ぐものや、云はゞ證據書類とも見るべきものが多くあるが、尙ほ他に侯の一身に左まで關係なくして大政に關係あるものが甚だ少なくない、これは明治史の資料として極めて貴重のものであるから、特に侯の傳に關係なきも收め置くことにした、收めた書簡は約二百通、緊要の書簡は筆者が同一でも幾通も收めた、例へば三條岩倉木戸伊藤諸公の書簡の如きは、皆國家の職務に關してゐるので、何んとしても割愛し兼ねた、尙ほ書簡にあらざるものも幾らか取入れた、それに卷頭を飾る先帝の宸翰を始め、照憲皇太后の御筆、今上兩陛下の宸翰の如きものである、又木戸公の自筆の五事の御誓文のごときも、卷首を飾るの一材料となつてゐる、維新の政治舞臺に活躍して今は故人となり、其名は傳はつてゐても其墨蹟の多く傳はらない諸家の書簡は、特に意を用ひて採收した、其中には頗る珍とすべきものがある、斯くして明治初年より現代に至るまで知名の大家は略々網羅されてゐる、此アルバムを展て見ると、宛ら維新後の大人物が一堂に會し大隈老侯を對手に各々議論を戰はしてゐるかの觀がある、言ふまでもなく、手紙は大人物より大人物に寄せてこそ初めて其の內容も非凡である譯だ、侯に寄せた多くの書簡が平凡でないのは此故である、世の中には名家の書簡を寄せ集めて出版したものは强ち珍らしくないが、此の書簡集は悉く大隈侯を相手に國務の機密をさらけ出したもので、世間の選を異にする、すべて此の書簡集の寄せ集めとはおのづから其一通と雖も侯生前に嘗つて世にあらはれたことの無いものである、隨つて讀者に柏案驚奇の感に堪へざらしむる者がある。

元來大隈老侯は誰れも知る通り、自身で手紙を書かぬ人であつた、其の侯の所へ諸方から手紙を寄せた、それが保存されてゐようとは、私のごとき常に侯の身邊にゐたものでも想像しなかつたことである、然るに老侯の薨去後、月餘に及んで、末亡人は私を招き、藏には澤山諸方から來た手紙が保存されてゐるけれども、ドンナ間違でそれが世間に散らぬにも限らぬ、そうなると當家も困り亦人も迷惑するから、一層全部燒き棄てようかと思ふとの相談が出た、自分は深く考へるまでもなく、傳記を編するの第一資料は其の書簡であるから、決して燒き棄などさるべきでないと諫止し、全部の整理を私が引受けて、さて藏より取り出された書簡を見て驚ろいたのは、其の分量の餘りに多いことであつた、大なる支那カバンや行李につめたものが十幾個と數ふる外に大風呂敷に入れたものが三四十個もある樣な仕末で、まるで手紙の海に漂ふてゐる樣な有樣で、最初はどう整理してよいか手も着けかね茫然自失した位であつた、漸やく手を着けて見ると、幸にして明治の初年から同十四年頃に至るまでの書簡が、發送者別にそれぞれ整理して袋に入れてあり、目錄まで出來てゐた、これは夫人の心掛で執事に命じて整理させられたのであると知れたが、私は夫人の心掛の周到である結果此の貴重の資料の立派に殘つてゐるのに深く感激した、實は此の期間の手紙は侯の傳記に尤も大切の關係があるので、それが運よく整理されてゐたのは實に望外の仕合であつた、此の十四年迄が明治史上、大きいエポックを劃して、大創造期、大活動期であると共に、老侯が年壯氣鋭の勢で、最も華やかに最も元氣よく政治舞臺に活躍された時である。當時政治上各般の施設について、老侯が與り知らぬものは一つもないといつて宜い。それにこの時代は前に征韓論の悲壯劇、後に十四年の一大クウデタアがあつて、政治上疑問とせられ、謎とされてゐる點が少くない。また薩長土肥四藩の離合や權力抗爭にからむ種々の秘密魂膽が相當ある。それ等は在來、暗黑のうちに多く放置されてゐたが、その疑問を解くの材料は乃ち此等の書類の內にあらねばならぬと先づ喜んだが、追々調べて見ると果して期待に背かず、此の內から得た材料が約二千通に及んだ、中には大官の私事などに關し讀んで興味のあるものが少なくなかつたが、それ等は其人の子孫の名譽のために公表を遠慮せねばならぬ所から皆な割愛して約二千通の一割計りを此のアルバムに取り入れたので

明すること（三）書道の家に有り得ること、（四）侯の交介在した侯のテリトーリヤ（二）隣国の間に

参稿の筆蹟に自然の如き高度の力

々の貴筆の多く存する事

に触れること、

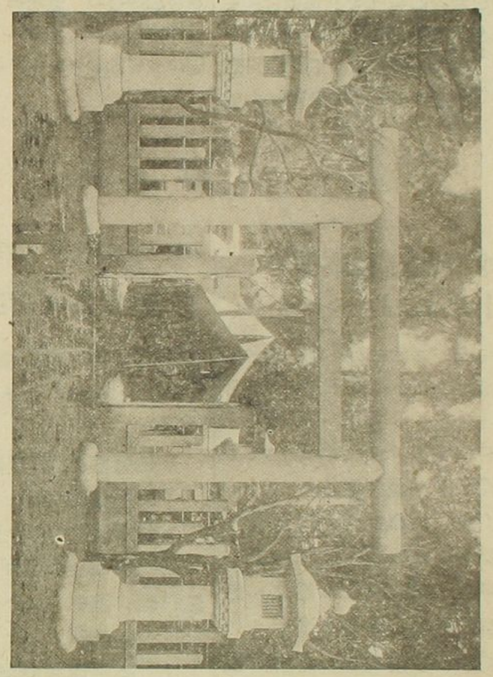
に取かゝる選びになつてゐる。これからは愛玩

ものは、この別冊である光悦会添ふべき

は豊平印刷も終り、此のアルバム

老侯の傳記に大なる光悦会添ふべき

新の風雅帖と見らるゝものである。



城坐の日當祭前墓長總故

家の職務に倣し國家改造の重要問題

に特殊個性を反映せる事）（一）大隠園

極し天下の第一人者で其筆蹟文章が

特徴を発揮せる觀かあり、更らに変化

が略々綱羅され、宛然生きた明治史

あるが、明治年間の主要人物の書簡

が此の書簡の特色である。尺牘が皆な簡はり居り、各般

変化に富み頗る興味ある事）（五）なども

術家などの軍人業業學者文人

際が社會の各方面に及んでゐる結果

た人物、國たるに止まらず、軍に生きた歴史、活き

として軍人業業學者文人

が此アルバムは

○抄紙に美術的意匠を施すことハ古くから行はれてゐる。紙に文字や絵画のことき「スカシ」を作ることハ今迄の日新と知られてゐる事実で、手近く例を本邦ハ越前の一枚紙の半切にも越前の風景ハスカシにあらはしてゐる。又唐い鳥の子紙にも今迄の名刺をスカシにしてゐる例も今の唐く行はれてゐる。

かし此「スカシ」ハ日本の古代すべて絵画行のんなるとき極に思へれる。却て墨流（スミナガシ）といふことが古くから行はれこれハ紙を流す時ハ、回器を充分手を張つて紙を後ろ高度にもハ（たゝき）玄る回のとかく、手面に種々の絵の具び絵をかく、手を去るとき迄入ひ、その後の模様が、六硬きまゝハ紙面と手面に書いとなすく貼

着するのも一種の紋様が出来る。こんを墨流しと名付けて義原的なる紙術が高度の発達をしたものである。紙中紙前福井を紙術と紙術を以て古来ものとこえてゐるが、なほ研究すべき事柄である。平安朝と出来た、京都寺の今三十六人歌集の用紙もあらう、各紙皆高度の美術、且つ珍奇のを競つた紙がある。コシナ形紙に伴ふ美術的高度を凝らした紙色、装飾が大体主となつた時代もあるが、スキコミにすると装飾よりも伝達を防ぐ為めにすることが多く主となつてゐる模様がある。西洋でも早くから紙の漉込みが行はれてゐる。そして之んをウオーター

十二行

マーク（お標）と称してゐるが、また又ワイア、マークを漉込みてゐる。是意匠入標の世型ハ針金で組立てまんをまじかとまもなく紙を厳立して模文様を作ると言ふから、紙名もある。譬へば、佛語にフイリグラー又Filigrawes といふのもワイヤ、マークの意味を外ちまた西洋で北の漉入標を始めたのハ特殊まいつゝ合略しないが、可なり古くから、都市の紋章や家紋をも漉込んだものがあるそれを偽造防止の為めであつたかどうかとかんがへるが、模倣法でもかまはぬ時分とかから、他人も真手の模倣）をやつた、古かし其の模倣が正物と同じもの為めに、後世書史学者の者を比較研究の意味と骨を折らせることもあつたと、勿論学

紙金紙の高標も流り込んだ。この紙が一般に受けかねると自然の其の高標が模様替をされたが、おんハインと云ふ紙家の家紋が牛頭び、其紙が珍重されたりなる多くの紙と牛頭の流入が出来たりとハ其一例たる、或る帝室の用に供せん特種の紙すき王冠を漉り込んだ例もある。四の位の高品(ひ、獨逸)びを薔薇の房、犬や一角牛をを刻印してある。英吉利びとナ六世紀から十七世紀まで、ポスト、ホルンやフールス、カップが流行まで、ポスト、ホルンを郵便配達が吹く笛び、フールス、カップは道化師の帽びであるが、これも終に轉記して或る人の紙を作す紙の名となった。又ポットと云ふ紙もあるが、これも十七

十二行

世紀の頃最少フオリヲ紙に壺の絵を漉き込んだものが終に紙の名と轉じたものである、

北記多の一半八四千数の図書の概論に接して若すポット

二月十日 記

○本年の首務の日誌と北の毎内まで震災に破損した家の改造を行ハ為ふまで未だ帰京の翻意に帰を定め為ふまでと務的を保し此頃きことび年首数と多事を物したれ北の年末まで多事の二月の央まで多事び心身を苦まることが傳説したこんまん的の不景氣を感じまでこと、日清印刷会社も此年から持続した業清原とまで

博多文琳

陳道人

諸大名の家に傳はつて居る名器には種々の傳說の伴ふて居るもの少なくないが、玆に其の一つとして黑田侯爵家に祖先長政以來傳はつて居る有名なる茶入『博多文琳』の事を語らう。

此の博多文琳は豐太閤時代に大茶人として、又大富豪として有名だつた神谷宗湛の愛藏して居たものを黑田家に於て召上げられたもので、宗湛が之れを手に入れるに至つた事情になか〳〵面白い話がある。元來神谷宗湛は博多の貿易商人で、其の高祖父永富は夙に海外貿易に從事し、永享、享德の頃阿媽港に日本町を建てた程の人物であつた。其の子孫も、代々海外に渡航して大規模の通商貿易を營んで居たが、宗湛の先代に至つて家業甚だ衰へたのを、宗湛が朝鮮、支那、呂宋、暹羅、其他南洋諸島との交易を開くに及んで再び隆運に復した。宗湛は夙に韓明の形勢を詳かにして居たので、太閤征韓の役には其の帷幕に參して獻策する所多く、且つ一面祖先傳來の趣味として茶道の造詣甚だ深かつた爲太閤も尋常商人を以て之を待たず、いつも『博多坊主よく參つた』といふ調子で之を厚遇し、酒宴等の場合に於ても麾下の群雄の間に特に席を設けられるといふ有樣であつた。茶人として有名な利休と同時代であつたが、宗湛は利休よりも太閤に愛せられ、且つ重んぜられて居たやうである。

宗湛が博多文琳を手に入れた次第として傳へられる所によると、宗湛の番頭某といふもの呂宋へ交易に赴いた際六萬兩程の大欠損を生じたので、主人に對し申譯が無いとて將に自殺しやうとした。其番頭の妻は支那人であつたが、夫の覺悟を見て、一つの小壺を取出していふには、今早まつて死んだとて失つた金の返つて來るものでは無い、妾の家は楊貴妃の家系と言ひ傳へ、此小壺は貴妃の愛藏したものといふことだが、豫ねて御主人の宗湛ぬしは茶器を熱愛せらるゝ由承はり居れば、此小壺を持參して萬分一の償ひとなし、只管罪を詫びられては如何と諫めた

ので、番頭も尤もに思ひ、博多に歸つて宗湛に一伍一什を語り、件の小壺を以て缺損の罪を許されん事を乞ふた。宗湛之れを熟視して會心の笑を洩し、商賣はいつも利益があるとのみ限つた譯で無い一度の損失に落膽する如きこと無く、急ぎ呂宋に立歸つて更に一旗揚げよと激勵し、快く六萬兩の大缺損を小壺一個に代へ、更に何程かの新資本を與へたので、番頭は宗湛の大度量に感泣して、再び呂宋に赴き、前度の失敗を恢復して非常の成功を收めた。

此の小壺こそ即ち今、黑田家の珍寶となつて居る博多文琳なるもので、太閤は之を見て垂涎措かず百方之を取上げやうとして心を碎いたけれども、宗湛は日本半國を賜はるならば取換へませうと豪語して肯んぜなかつた。かほどの名器も宗湛亡き後黑田家に召上げられ、同家よりは神谷の家に對し所謂お墨附を賜はつたが、それによると茶入代として金千兩、褒美として同じく千兩、外に永代五百石を給するとあり、其の五百石は維新の際迄約三百年繼續したさうであるから、此の一個の茶入は價格に見積れば恐らく數百萬圓に上つて居るであらう。黑田家では歷代此の茶入を非常に尊重し、君侯といへども代替りで無ければ之を取出さず、藩士の拜見は床の間に飾つたのを一間隔て、仰ぎ見る定めになつて居たさうで、是れは今日でも此の慣例に則つて居るといふことである。

金子伯爵が當主黑田長成侯の代替りの節主君に相伴して之を實見するを得たとて人に語られたのを聞くに、此茶入は形は餘り大からず、底に絲切があり、掌上に載せて見ると中身を拔き取つた卵のやうに極めて輕い感じがしたといふことである。此の名器は大形の兩掛中に納められてあるが、其兩掛の中には博多文琳を中央にして、周圍に殆ど同形同大の八個の茶入を併置してあるさうで、是れはいふ迄も無く御家の重寶を狙ふ者に對し容易に其の眞僞を辨ずる能はざらしむる周到なる用意に出づるものと思はれる。

日本電池時報
不載

たる不景氣の今日、殖産興業を唱へ、機械を充分に動かすべきの仕事が多く頗る不成績なりしのみならず、これを為め機械買の方法を講ずること可なり精密を要したるに、訪ふる所皆高の増資を考へ、三萬円の株を募ることゝ取計ひたるが、こんなことなく困難にして、三回分の二は出来たるが、未だ一萬円ばかりの不足があつて、為めに努力を要する、早稲田中学の創立以来、同盟者と協力して倍手を一郎が肝脳を注ぎ入院したるも、多くの日を経ぬ内に新いたるも、学園の一事件にして、多くの業績や業績業と可なりの混雑を来し、ようやく安不幸を見るに及ぶ、[illegible]規に漸やく進行したる大隈先侯の御記録[illegible]新しく役員

十二行

[illegible]を[illegible]厳問があつて、[illegible]をひどく苦しめて終に厳問会をひらくことゝなり、其の結果進行を二三ヶ月延ばすことのやむなきに至つたのは、責任者に取つての大なる苦痛であつたが、斯る折柄、就[illegible]の子弟の[illegible]沼来手形に関して訴訟となつたのが、面倒となつて、弁護士から数度も受けたるの内、[illegible]押が出て来て、市手形[illegible]の責任者を大阪[illegible]あつて来て、[illegible]訴の手続をなすべきものとなり、供託金の問題と移り、[illegible]して弁護士に当る用意の為、[illegible]行人の[illegible]訴取されたことが[illegible]、弁護士の責任問題が起るやうに、差押物件が不足とと

いるを二ヶ所に報達吏が来るやうにて家庭を騒かす
ことも少からず幸に新潟の佐藤士ひ友人の松井新
治が至来中にあるのみ之に頼人と漸やく意思しと
校の仕事、他人の手形に裏書をせさることが自分の主義と
あるのみ、親族の頼とわたくれたれと其の禁を破つたのと
身から出たサビとは云へべきとは其の義務
を果さしるを為すの外なし新潟会の和清することき
不婚を為し、大なるマゴツキを起したことは事実
不都合千番ひ、北の浪花の如きを受けた損害の
くらへ、昨年八一月中より明るまで一ヶ月の事に近年
稀なる面倒を感したことも是なり
○明治十一年聖駕御巡幸に御我ひ御後

二月十日記

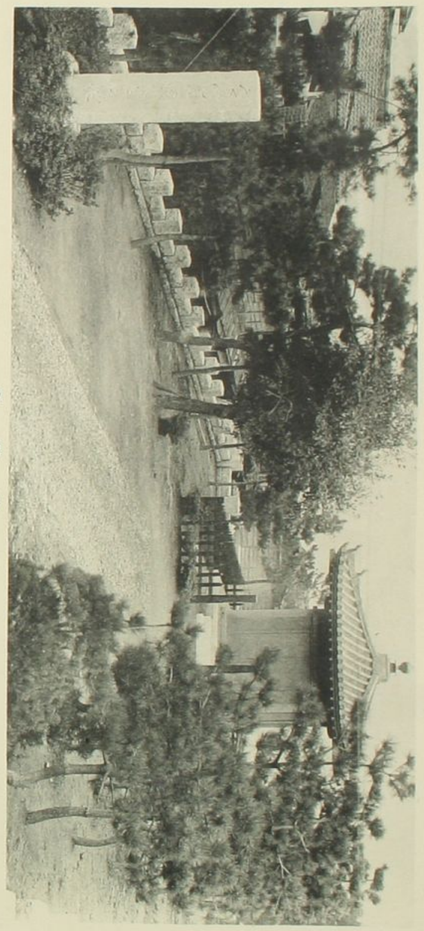
十二行

に於て迎文金化会の為めに刻する詩書帖を
奉書大の帖にまとめ稿の図を描かき間に
風景の図を交ぜ名を概略産業関係を巻
末に聖駕を迎ふる落文を添へ、鶴久山記雪記皆も
文を添へ和紙を用ひ出来たれは刻えとよき
事也、巻尾に業者の御世話と氏名を掲す 一二
の外概略余の知る人也、目録十部の刻する事也
也、四月と相なる人を稀なる事也 前年都市の
に富田七郎も婚ひ入れ婚ひ入れ標
こ元人なれ目に願ひ入れ婚ひ入れ標
転の異の文を補へ変化概略と題四者す
とい

多文字本注子弁を脱し、みな宋版の若干字の名のごとき殊に解説を要せず、但此本巻頭と余が一族芝田市峰氏の花記あり（印文云芝田縦里市峰氏秘笈）朱筆に誤字脱字を丁寧に校訂す、巻尾に丹羽惠棧と云う、則ち丹羽芝田高雅丹羽伯弘の手校なること知るべし、則ち此書も亦孤後因縁のごとしと雖中の珠とすべし

二月十八日記

○湘洲詩鈔一冊上海に於て宋版活字を以て排印せるもの、松雪堂書店より寄せ来る、湘洲八国亡友島田孝之の弟なり、孝之、富山県の人なり、余と共に改進党に籍を置き、余の郷里新潟に在りし頃、新潟の政界に駆馳し、細微の政界を主宰し、余未だ此人に会する機会なくして、而して雁魚互ひに往来、肝膽相照らすこと数年、後東京に会し交ること甚だ深し、孝之業を棄て長し、余と寄する書簡月に数次、往々詩を録することあり、余亦業務の忙しきを思ひ、遂に筆を絶つこと十数年、今此の遺稿を新し、撫然たること久之、北の詩鈔の編者は富山県の人内山松世氏、余亦此人と交誼を以て議員を兼ね、交いること深し、相会せざること七八年、此書に依り其事を惹起し、二月十八日夜識す



良寛堂
立建日六十月九年一十正大

○城後出雲崎の人作蒐古家平須北人出雲崎の郷土史料の調査に心ゐける人なり、良寛堂を建設しなるもこれ北人の周旋に成る、良寛堂の建設地は良寛の家橋屋の旧跡なり全体の地區は三万

住住すること十七年にして貧家を立退くもの多くとなる、堂内は多賓塔あり主として、後の上段には良寛手沢の石造地蔵菩薩の像をハメコミ其下に良寛の和歌刻す、其歌は「世の中を之へりかえる」ぬるの不波ありそ海の東むき出る美越路」歌東のこと蔵書「此歌は才の田之三巻しなる出前の雨ゆ録しなるを摸出して大色紙に其の大きさを刻しなる也、尚ほロタイプ版にしなる市販歌集」と題し一冊を編なる、これは良寛堂建立記念に出版しなる由なり良寛の歌集をなるまゝコロタイプにしなるものもいは摸写を作也不ない巻子にして毎日新聞社の所蔵なるもの、北の

良寛ハ一茶用を勤て遠国に来り居候ものと
立千田と投ぜらるといふ　二月十九の記

地蔵の像ハ佐渡御影石を以て作りたるもの
佐渡産なること明かなりといふ、佐渡なる良
寛の母の家なり名主佐橋屋といふて銘家
を業とす、それ等の因縁も此の像良
寛の手に入りたるなり

○文化四年江戸出版「一茶俳境」上下二冊ハ鈴木忠侯
の集撰に係る故なるの考証を簡単に書きしるす
なり頃の得て熟閲、二三を左に記す

一　俗に云ふ食のさひのうをあハせとらふとう
うつぶ物絵清めまくらの為なるべし
一　神社のもろもろ額をかくるハ異国の法なれハ
ちきちきなり伊勢あるいハきい古法なり、今ハ名所と額柱の名
書法のことと思ひ違ひ額柱を作るを
一　書画をもて参詣するハ、やうくといふハ洋々
の字なるべし論語に洋々平盈耳ともあり
記子の説をもの玉ひしことなるべし
一　目結とらふハ俗にいふ唐子のうろこ　四ツ目結

八日を四つあけ毎日然い目を開くむすび江
さらのうち
一 放生の試としてあの芝をあくろうこうを池の
中略ちとりて詩文章をつくらまるる也人の
読みさせもきためうつうれ和歌をも
吉書始さ ふくろみの題を賜りも八とり船と
のせらんていとあり是 放生の事
後文
一 古戦の人の相手きをさえぼうとのふ紫式部
日記をあやしき戦 女男のさえづりとあり
源氏物語をもまるの伝えつうとあるうう
一 伏見の和歌 を伏拝 の略別うとをあく

十二行

故の人達 京都の方をおとれ あうう
不うう
一 鼻しろは 脆しなること なう脆 まんば鼻の
白くうう 源氏物語おくしかうえ
しろめる人うかしとくとう
一 赤橋花は紅花 うう紅のえうは赤れ咲うえ
はやかて 赤をつもあるえ 新くいふううう
一 おかしは烏帽子のうへ 書を書うう保元物
語 あ養 宮 碁盛 宇治 新くおうう
赤らあやの狩衣 うう 黄 のようひえ上を
赤う烏帽子の上 白 のふを 書とあう
ふおかしは烏帽子 の上 心 とも 有 とうう

後世の到き烏帽子のうへ（ゆゑ曽や宣い着ず
ゆゑ又世も宣を着ず時ハ髪を元とし
市世宣を着ずるなり
一上代ハ市を海文紬といひ賤者を志づい
人も市の衣物を着ずるなり
一伊賀国阿部郡多尾村一作穂生 国見山のふもと田比の荘
龍神ハ伊勢ゆ元禄年中邑人六の塚をひらきそれ
狂業せしこと 国主ゑ新に高成しを聞くれ古四更
好かの骨おゆ代行状記を弁ひ塚ゆおさめ石碑
を建ることいえり 桂園太暦十八の観応元年二月三
日 鳥好左伊州而罪所由有 上皇依勅典薬
院和氣清元趣彼地旦賜米数三十石、七日自伊

賀守橘成忠馳使似奏国所、依尤雖雖沈薬
服用事猶之、米数近村土民汗之ニ 二條良基
公潛下向而問所、十八の夜辛ハ自成忠注進、上
皇主上並諸院御感、彼恩深、彼恩禁、彼需勅旌
廿一日芳尾殘所拘唯古筆、自筆、先子任源
氏物語須磨の石生 神代巻二冊及故手
習書捻二包中 因宿龍命之献所生前
一首并所中御和二條家家司、廿七日賜米数
五十石 鳥日廿貫 薬墓 於田井庄 召偏照寺
僧被命其子、伊州国分寺被新寺、廿七日賜
僧正宣ニ文畧
一 麻と木綿和名由布ハ神事ゆ用ゆるものゆ上古よりも

木綿とふを楮の皮を紙すくこの事を楮と麻とハ
通用する事是ハ麻を糸にすきて麻を
書る事とハ近代のもめんのことにハ
うるうて木綿にすきをする事を誤る事、此代の
めんを延享年中山崎屋人宮を初まりて三河
おるをしめを始其後後を久しく文禄年中
迄ハ是を天竺とんびこと云
といえり

一 狩衣むくりくりの生を無量寺院の花の
神社のとき花を結んで書るのをしんくるを保安
の例と云いふめるとを掛るを砌の机といい
ゆる大神宮儀式帳に見えたり、檢素ともて

十二行

かさり物をるを江次第り絹里木為机を
といふ事會響院の机を又柳葉也机を
いふを貴高の異也

世上困窮に付今般鳥獸並蟲魚の輩へ一統の簡略申付候其外行作惡敷品相改申渡候左の條々急度相守申べき事。

一螢、夜中火を燈し飛行の事町々家込の所は火もとの氣遣敷候得ば遠慮いたすべく候池川田地等の邊は苦しからず候事。

一蛤、春暖のころ己が快晴にほこり樓閣を建候事甚奢の沙汰に相聞に候向後は右體の普請一切無用候もし居宅の柱損候とも根つぎ致申べき事。

一金魚の輩近年ことに華美に相成候向後は金銀の飾一切いたす間敷事。

一猩々、常に大酒を好み亂舞の樂奢の沙汰に候潯陽の江邊にて持出しふるまひ向後一切無用たるべく候據なき儀にて會合有之候とも一種一獻に限るべき事。

一音喚鳥猥に五色の錦繡を着いたし候事甚奢に候向後は何色にても一色に相改申すべき事。

右横井也有鳥獸蟲魚掟の一節

明治文化協會大正十三年度

同　服部金太郎君　同　堀内文次郎君　同　神戸擧一君
同　田崎忠恕君　同　山田松三郎君　同　松下久治郎君
同　福川忠平君　同　小池國三君　同　昆田文次郎君
同　朝比奈貞英君　同　皆川廣量君　同　子爵澁澤榮一君
會長　侯爵大隈信常　理事長　市島謙吉　編輯長　浮田和民
常務理事　森脇美樹　理事　大鳥居弁三　理事　並木覺太郎
理事　杉山重義

一、時局研究事業

震災直後休止の狀態であつたが、世間も漸く鎭靜して來たので三月十六日本年度の第一回を開催してから、毎月一回づゝ開催して十月に及んだ。其後は明治文化發祥記念會開催準備の爲めに休會した。結局本年度における開會數六回研究發表者十二名行卷數二百四十卷其頁十一萬五千頁に及んだ。

性の決定	米ドンキヤスター氏原著 宇田一博士譯	一月刊行
燃料問題の將來	本會編 辻井眞氏執筆	二月刊行
人類進化の歸趨	米コンクリ氏原著 寺尾新氏譯	三月刊行
英國政治思想論	英バーカー氏原著 小島幸治氏譯	四月刊行
折經濟學	佛ヴアロア氏原著 鈴木貫一郎氏譯	五月刊行
インテリゲンチヤ	露ラズムニーク氏原著 三宅賢氏譯	六月刊行
近代科學の諸問題	本會編 武者金吉氏執筆	七月刊行

故侯の寢室を以てした　[illegible]は非常に天下に賞賛を博し、只一日の催としてはと惜まれた樣な好結果を擧げて、記念會に錦上花を添えた樣な次第であつた。

(ハ) 明治文化記念並批判講演會

以上の如く明治文化發祥を記念すると同時に、其の功罪を批判して大正國民に一指針を與へたいと云ふ希望で、市内に四ケ所、左の如き日割で講演會を催した、所が何れも非常な大盛會

其儘銀行に保管してある。

特別寄附金内譯

明治文化發解祥記念會へ金二百圓也　日清生命保險會社殿
同　金三百圓也　日清印刷株式會社殿
同　金三百圓也　早稻田大學出版部殿
同　金十圓也　姉崎正治殿
同　金二十圓也　押川方義殿

大日本文明協會大正十三年度事業並會計報告

本年度の事業は震災直後で年初より諸事業の着手が困難であつたが、幸に刊行事業は豫定の通りに着手する事が出來た。

時局研究は震災後暫く中絶の有樣であつたが、三月に至つて漸く本年度の初會第三十七回を開く事が出來、それに引續き例年の通りに催した。

本期間中特筆すべき事業は、十二月初めに開いた明治文化發祥紀念會で、之れは豫期以上の仕事であり而して豫期以上の效果を納めたと信ずる。此計畫が宮中に聞え、畏れ多くも十二月一日に大隈會長を宮內省に召され御內努金下賜の御沙汰があつた。

大日本文明協會

其の會に於て明治文化發祥紀念會擧行之趣被聞食

天皇陛下より金千圓下賜候事

大正十三年十二月一日

宮內省

會長は拜受後直ちに參內御禮を言上して退下した。前會長大隈侯爵以來の苦心が玆に酬いられた樣な感がして當事者一同は益々本會當初の目的に向つて盡粹せん事を誓ふた。森脇常務理事は翌早朝護國寺の前會長墓前並に早稻田の祠堂に此聖旨を報告した。定めし前會長も地下で嘻ばれた事であらう。

本年度中本會は左の特別贊助會員、評議員の不幸に接した。何れも本會の爲めに終始指導と援助とを寄せられた方々で返す返すも遺憾の次第である、謹んで弔意を表す。

特別贊助會員評議員　和田豐治君
特別贊助會員　宮內二朔君
特別贊助會員評議員　星野善藏君
特別贊助會員　谷森眞男君
特別贊助會員評議員　柿崎欽吾君

顧問會評議員會

五月四日午後二時から青山の大隈會長邸に於て開かれた。市島理事長が十二年度事業並に會計報告をし、滿場異議なく承認。次で大隈會長の挨拶があつた。浮田編輯長は刊行事業に付ての報告と希望を述べた。評議員澁澤子爵は顧問評議員代表の挨拶並に感想を述べられて會を終つた。折柄日米問題の喧しき時で澁澤子爵に此問題に付いての感想を乞ひ、頗る意味ある談話があつた。當日の出席者は左の通りである。

顧問　井上辰九郎君　同　金子馬治君　同　田中穗積君
同　高楠順次郎君　同　淺野應輔君　同　佐野善作君
同　牧野伸顯君　同　井上公二君　同　今井五介君
評議員　石丸龍太郎君　同　服部金太郎君　同　堀內文次郎君　同　神戸寅一君
同　田崎忠恕君　同　山田松三郎君　同　松下久治郎君
同　福川忠平君　同　小池國三君　同　昆田文次郎君
同　朝比奈貞英君　同　皆川廣量君　同　子爵澁澤榮一君
會長　侯爵大隈信常　理事長　市島謙吉　編輯長　浮田和民
常務理事　森脇美樹　理事　大鳥居弄三　理事　並木覺太郎
理事　杉山重義

一、時局研究事業

震災直後休止の狀態であつたが、世間も漸く鎭靜して來たので三月十六日本年度の第一回を開催してから、毎月一回づゝ開催して十月に及んだ。其後は明治文化發祥記念會開催準備の爲めに休會した。結局本年度における開會數六回研究發表者十二名會衆延人員八百餘名。本事業開始以來四十二回に及んだ。

第三十七回　三月十六日（大隈會館）
土耳其の近狀　全權公使　內田定槌君
耐災建築に就て　早大教授　內藤多仲君

第三十八回　四月十三日（大隈會館）
帝都復興と飛行機　陸軍中將　長岡外史君
外より見た日本　全權大使　日置益君

第三十九回　五月十八日（大隈會館）
新經濟政策に立脚せるソビエットロシヤ　梨木祐臣君
メートル法の起原　理學博士　田中館愛橘君

第四十回　六月廿日（大隈會館）
日米問題研究　外務省通商局長　佐分利貞男君
牧師　額賀鹿之助君

第四十一回　七月十八日（大隈會館）
ペルシヤ事情　總領事　縫田榮四郎君
萬國海法會議と歐洲事情　法學博士　松波仁一郎君

第四十二回　十月十二日（華族會館）
燃料問題の將來　工學博士　山本忠興君
排日の眞相と親日の曙其哥　渡邊金三君

日米問題特殊研究會（七月廿日）　工業倶樂部

本研究會は大隈會長の主催で、左の人々が集り、最初澁澤子爵座長席に就き次で大隈侯爵座長席につく、默する人のない會合と云ふ事を表標して開かれたのである。各自意見の交換をする事六時間餘頗る有意義の會合であつた。今後も斯樣な會合を會長は度々催す希望を持して居る。

子爵澁澤榮一君　男爵坂谷芳郎君　大使日置益君　貴族院議員鎌田榮吉君　通商局長佐分利貞男君　加州大學教授乾精末君　早大教授宇都宮鼎君　法學博士山田三良君　代議士植原悅二郎君　法學博士添田壽一君　商業會議所副會頭山科禮藏君　早大教授志賀重昂君法學博士佐野善作君　法學博士中村進午君　海軍中將吉田淸風君法學博士浮田和民君　押川方義君　市島謙吉君（順次不同）

二、刊行事業

例年の通り世界名著翻譯並に編纂書十二卷を十二月中に刊了した其頁數は約五千頁に及んで居る。又此刊行書と並び發行しつゝあつた。文明協會講演集は其任務である時局問題研究の爲め世界文明の鳥瞰圖たるべく一層努力せんと四月より改題して文明大觀と稱した。蓋し之れは前會長の雜誌大觀の名稱にも多少因んだのである。而して本年一月には十二月末に開催した復興問題講習會の講演記事を載せたものを發行した。都合講演集二册文明大觀五册記念誌一册を刊行、其頁數約千二百頁。此等の刊行書は毎册　天皇皇后兩陛下皇太子皇太子妃兩殿下の御覽に獻上し併て二千餘の會員其他に配布した。本會創設以來の刊行卷數二百四十卷其頁十一萬五千頁に及んだ。

性の決定	米ドンキヤスター氏原著　宇田一博士譯	一月刊行
燃料問題の將來	本會編　辻井眞氏執筆	二月刊行
人類進化の歸趨	米コンクリ氏原著　寺尾新氏譯	三月刊行
英國政治思想論	英バーカー氏原著　小島幸治氏譯	四月刊行
折經濟學	佛ヴアロア氏原著　鈴木貫一郎氏譯	五月刊行
インテリゲンチヤ	露ラズムニーク氏原著　三宅賢氏譯	六月刊行
近代科學の諸問題	本會編　武者金吉氏執筆	七月刊行

ひ向後一切無用たるべく候據なき儀にて會合有之候とも一種一獻に限るべき事。

一音喚鳥猥に五色の錦繡を着いたし候事甚奢に候向後は何色にても一色に相改申すべき事。

右横井也有鳥獸蟲魚掟の一節

世界文明の統一　米マアービン氏原著　丸山岩吉氏譯　八月刊行

吾ガ日吾ガ夢　英カアペンター氏原著　宮島新三郎氏譯　九月刊行

日米國際記要　木會編纂　十月刊行

政界は斯くして動く　獨ビスマーク公遺著　定金右源次氏譯　十一月刊行

地球と太陽　米ハンチントン氏原著　武者金吉氏譯　十二月刊行

三、明治文化發祥記念會

(イ) 記念式

大正十一年に計畫した事柄で、爾來其調査に苦心漸く形が出來たので、其發表の意味で十二月七日に開催したのである。其趣旨は明治文化に寄與した歐米人の功績を記念し後昆に傳へて聊か國交に寄與したいとの考へであつた。調査の結果關係國は英國、米國、獨逸、佛國、伊太利、和蘭、瑞西、瑞典、葡萄牙白耳義、露國、墺太利の十二ケ國であつた。此等各國駐劄大公使を主賓として朝野内外の名士約三百名、所謂世界の路の通じた大隈侯の舊邸で、記念式は午後二時より催された。大隈會長の挨拶、志賀重昂氏の開會の趣旨(英語)、石黒忠悳子爵の當時の思出話があり、次いで關係國を代表して英大使サー・チャールズ・エリオット氏の謝辭、加藤首相の祝詞、幣原外相の感想があつて式を終つたのは午后五時であつた。

(ロ) 記念展覽會

上述の式の餘興の意味で明治文化發祥を記念すべき、人や事柄に關係のある文獻や品物の陳列を急に思ひ立つた。會場には故侯の寢室を以てした。數百點の出品を觀る事が出來た。此擧は非常に天下に賞賛を博し、只一日の催としてはと惜まれた樣な好結果を擧げて、記念會に錦上花を添えた樣な次第であつた。

(ハ) 明治文化記念並批判講演會

以上の如く明治文化發祥を記念すると同時に、其の功罪を批判して大正國民に一指針を與へたいと云ふ希望で、市内に四ケ所、左の如き日割で講演會を催した、所が何れも非常な大盛會であつた。

第一會場　芝公園協調會館　十二月七日夜

開會の趣旨　會長侯爵　大隈信常君

近代文化の功過　押川方義君

維新當時の化學的政策　子爵　後藤新平君

プチシュアン師の事　文學博士　姉崎正治君

模倣文化の切罪　法學博士　林毅陸君

第二會場　早稲田大學　十二月七日夜

開會の趣旨　本會理事　宮島新三郎君

明治文化と財政　經濟學博士　太田正孝君

文明と教義　貴族院議員　謙田榮吉君

明治文化を批判し今後の理想に及ぶ　文學博士　井上哲次郎君

第三會場　丸ノ内東京商工奬勵館　十二月八日夜

開會の趣旨　本會顧問　志賀重昂君

余の受けた明治時代の教育　工學博士　高松豐吉君

小泉八雲先生を懐ふ　早大教授　内ケ崎作三郎君

明治文化に就て　全權大使　日置益君

第四會場　東京帝國大學　十二月八日夜

開會の趣旨　本會理事　杉山重義君

世界の大勢より觀たる日米問題　法學博士　浮田和民君

非理法權天　法學博士　下林宏君

(ニ) 記念誌發刊

明治文化發祥記念誌と號し四百頁弱の册子を編纂、出席者及び各方面に配布した。内容は發祥時代の文化を叙し、明治文化に寄與せる歐米人四百餘の略歴を記述し、付するに五十名家の明治文化の回顧錄を蒐錄したもので、貴重なる文獻である。

四、會計

本年度の會計狀態は次ぎの通りである。

資産負債表

負債ノ部

豫備金	一七、〇〇〇、〇〇
假受金	一、四〇〇、〇〇
越金	三、三〇五、八六
本年度剩餘金	一、〇四三、六六
計	二二、七四九、五二

資産ノ部

恩賜金	一、〇〇〇、〇〇
預ヶ金	一〇、九八八、七六
證券	四、六九八、六〇
假出金	一、三九六、〇〇
當座預金及現金	四、六六六、一六
計	二二、七四九、五二

收支計算表

收入

恩賜金	一、〇〇〇、〇〇
特別賛助會費	一一、九一〇、〇〇
特別寄附	八三〇、〇〇
雜收入	一、八七六、六九
計	一五、六一六、六九

支出

時局研究費	一、〇六七、九六
刊行事業費	五、七四八、三七
事務費	三、八七〇、九八
臨時費	三七六、二〇
明治文化發祥記念會費用	三、五〇九、五二
計	一四、五七三、〇三
剩餘金	一、〇四三、六六

附記　恩賜金千圓の使途に付ては評議員會の決議に俟つことゝして其儘銀行に保管してある。

特別寄附金内譯

明治文化發祥記念會へ金二百圓也　日清生命保險會社殿

同　金三百圓也　日清印刷株式會社殿

同　金三百圓也　早稲田大學出版部殿

同　金十圓也　姉崎正治殿

同　金二十圓也　押川方義殿

雜收入内譯

預金利子及配當金　一、〇三六、六九

家賃收入　八四〇、〇〇

建築費勘定

負債

前年度よりの繰越不足金	六、六三一、二三
收入	
本年度領收寄附金	四、二〇〇、〇〇
雜收入	二三一、二三
合計	四、四三一、二三
翌年度へ繰越不足金	二、二〇〇、〇〇

本會事務所建築費寄附者芳名並に領收報告 (二)

金五百圓也　神戸　樂一殿　金百圓也(追加)朝比奈貞英殿

金五百圓也　子爵　澁澤　榮一殿　金五百圓也　服部金太郎殿

金二百圓也　松下久治郎殿　金二百圓也　田中武兵衛殿

金五百圓也　小池　國三殿　金二百圓也　皆川　廣量殿

金二百圓也　青木　菊雄殿　金三百圓也　金子元三郎殿

金一百圓也　昆田文次郎殿　金二百圓也　須田　利信殿

金三百圓也　增田　義一殿　金二百圓也　山地土佐太郎殿

金二百圓也　志村源太郎殿　(十三年度内領收願)

右報告候也

大正十四年二月　會長　侯爵　大隈信常

理事長　市島謙吉

であつた。

第一會場　芝公園協調會館　十二月七日夜

開會の趣旨　會長侯爵　大隈信常君

近代文化の功過　押川方義君

維新當時の化學的政策　子爵　後藤新平君

プチシュアン師の事　文學博士　姉崎正治君

模倣文化の切罪　法學博士　林　毅陸君

第二會場　早稲田大學　十二月七日夜

開會の趣旨　本會理事　宮島新三郎君

明治文化と財政　經濟學博士　太田正孝君

文明と教義　貴族院議員　謙田榮吉君

明治文化を批判し今後の理想に及ぶ　文學博士　井上哲次郎君

第三會場　丸ノ内東京商工奬勵館　十二月八日夜

開會の趣旨　本會顧問　志賀重昂君

余の受けた明治時代の教育　工學博士　高松豐吉君

小泉八雲先生を懐ふ　早大教授　内ヶ崎作三郎君

明治文化に就て　全權大使　日置益君

第四會場　東京帝國大學　十二月八日夜

開會の趣旨　本會理事　杉山重義君

世界の大勢より觀たる日米問題　法學博士　浮田和民君

非理法權天　法學博士　下林宏君

雜收入内譯

預金利子及配當金　一、〇三六、六九

家賃收入　八四〇、〇〇

建築費勘定

負債

前年度よりの繰越不足金　六、六三一、二三

收入

本年度領收寄附金　四、二〇〇、〇〇

雜收入　二三一、二三

合計　四、四三一、二三

翌年度へ繰越不足金　二、二〇〇、〇〇

本會事務所建築費寄附者芳名並に領收報告（二）

金五百圓也　神戸　舉一殿　金百圓也（追加）朝比奈貞英殿

金五百圓也　子爵　澁澤　榮一殿　金五百圓也　服部金太郎殿

金二百圓也　松下久治郎殿　金二百圓也　田中武兵衛殿

金五百圓也　小池　國三殿　金二百圓也　皆川　廣量殿

金二百圓也　青木　菊雄殿　金三百圓也　金子元三郎殿

金一百圓也　昆田文次郎殿　金二百圓也　須田　利信殿

金三百圓也　增田　義一殿　金二百圓也　山地土佐太郎殿

金二百圓也　志村源太郎殿　（十三年度内領收順）

右報告候也

大正十四年二月　會長　侯爵　大隈信常

理事長　市島謙吉

日本文化研究 國醇會略規

第一、本會は我國國初より現代に至る迄の各時代に於ける個有文化の精髄醇要を研究闡明するを以て目的とす。

第二、本會は、毎月一回（廿七日）研究会を開き、全一課題の共同研究、或は各自の専問よりする研究発表、或は会員外の専問家に講演を乞ふ等の方法を以て目的を達せん事を期す。

第三、本会は春秋二季に臨時大会を開き見学旅行等を試むる事あるべし。（大会の会費は其都度実費によりて算定す）

第四、本會々員は、毎月会費壹円を納め出席の節は其都度食費として金貳円納附の事。

第五、本會に入会せんとするものは、会員一名以上の紹介により、全会員の賛同を経べきものとす。

第六、本會の事務所は當分下谷櫻木町■九番地河野桐谷方に置く。

發企人（いろは順）

石川宰三郎
本田穆堂
鏑木清方
香取秀真
田中巴之助
高村光雲
高須芳次郎
中谷練次郎
前田曙山
河野桐谷
齊藤冨三郎
吉川霊華
鰭崎朋

二月中旬より須河野著「新あらえと國醇會」を入会す、せこ江戸時代を研究完成せんとする也

○今日仮間に二三の図書を獲たり、中に一二稀覯のものあり

大正十四年二月廿三日記

校正 後方羊蹄お返志　一折

一名 稀夷漂流

大奉書大の紙に縦横の線を画し、絵美の単語を輯め、音を注し、ものあり、松浦武四郎著述にして安政二年の版なり、先言今甚だ稀覯なり

鍋倉勝図　一折

鍋倉の地図なり、刊年編者共に闕き、時代不明なれども甚だ古色あり、追て刊年を推定せんことを期す

十二行

藥名備攷和訓鈔　七冊

文化年間丹波頼理の纂輯する所にして一部本草の字書なるべきものなり、すべていろはの四十八字の順に和訓の音頭となし、其下に漢名を排列し、其中に仮名を付し、北方に先ず漢名備考の書名、北方に和訓鈔の三字を附し、混同を避く、本草のエレリシヨンに此書を顧みるべしとす、今は稀覯の書也

四診備要　二冊

紙箱細井順の著す所、漢法の醫也、多くも多く草木の図を収む、本

若の出でて見ることを得べし、若者を
十竹蘭山及つの人うた図書をもつて、
出中の図は其の自著に係る、巻尾に
醫話一卷あり、天化四年江戸に刊す
る所也

駐歩泉碑記　一帖

駐歩泉碑　後樂園内にあり、園中の一
邱に草亭あり西行の像を置く、泉
其邱の麓下に出づ、駐歩泉と云ふ
府公西行の什に擬す、今まで所碑へ
公の業に係る、此の碑記は佐藤一斎
の撰并書なりと所云、碑は北園にあり

ふるの常に見るものも抜本寺の縁也、雲
火を経ずして造園兵廠内の北碑、恵
ちきやあれや

寶誌義傳解　合本一冊

童子義傳解　恵空
此書僧恵空の著す、巻首に漢文の
序あり、寛文辛丑四月冬朔旦、拙月亭
拙峯撰と云ふ、恐らく北の二字を注解
しかるべきなれども、其の名を書しきの
ごとく、義傳解とも称するにより、

忠義碑　一冊

此碑は大石良雄の事跡を録したるな

り和蘭の閣史に載せ、崇山潛室、大石と
舊好遺族の所と云し、撰ふ所といふ、
碑は何人にあるを知らず、北文は嘉永四年
九月和蘭伝習生平と伝を刻せら
る、卷尾に是平の跋あり、書も是平の
筆にて成る、跋文中、世人英雄知者故
今刻之以贈同好云とあり、北書八分
備觀のみとす、

京臺　一冊　印本

京臺跋追　寛文七年印本　一冊

北二書の原本今價極て高し、大正四年
京都に於て京都書籍市を刊行したること

あり、北二書も書者中に収む、活字本なれ
ども極彩なれ、しかも得がたき書なり、
得がたきは其の書籍目録中也

增益書籍目録

北目録寛永三年刻まる所書名の上頭
に出版元を掲し下部に價を注す、家義改
に寛文正德元禄等の年号あり寛永
目録又備はるを要す

異本つけ

黄卷文　三冊

延寶三年つるや喜右ヱ門板行にて、大
本にて極彩の宣風の書なり　板改あ
り今は備觀の書なれども　惜むべし

巻を欠く

三冊

晩晴堂画伝

乾隆年間世荘の画を世に行なう所、名賢の図像を収め共に小伝を附す、京都の五車楼あり乾隆年間に覆刻す、風海布本のかくさんたる仕本なり、北日本初摂津版鮮明なる紙を示す也

巻首の跋賢故寶の美を元に倣

新聞書館の建設に当りて

諸家の希望するところを問ふ

[illegible]

帝國大學新聞社

私案大綱を發表して普く諸氏の批判を待つ

正治　崎姉

東京放送局放送聽取申込募集

放送とは

無線電話の學理を應用して放送局から毎日天氣豫報、警報、時刻報、官廳公署の告知、取引市場報告、日日の新らしき出來事、名士學者の講演、和洋音樂聲樂等を發信しますると之が空中に放送されて東京から百哩四方にある幾萬幾十萬の受信機に肉聲音律其儘で聞えて來るのであります其の番組と時刻は豫め發表します實に此のラヂオこそは近代文化の傑作と稱へられ經濟、社交、教育、慰安等の機關として實用と興味とを兼備するものであります、會社、工場、銀行、商店は勿論各家庭に於ても一日も御早く御申込になる樣御奬め致します

放送を聽取するには

第一に受信機を御求めになる必要があります受信機は遞信省電氣試驗所の型式證明を受けたものか左も無ければ遞信大臣の認可を經た機械で無ければ使用出來ない事になつて居ります第二に放送局へ聽取申込をして其の承諾書を受取り之を添へて遞信局長に申請をしますと之に對して許可書と檢定證書とを交付せられます

申込と申請の手續は

放送局に用紙が印刷してありますから御申越次第差上げます遞信局へ御出しになる申請書も放送局へ御持ちになれば承諾書を添付して遞信局の方へ便宜御取次ぎ致します（放送局の承諾書を添へて直接遞信局へ御出しになるも無論支障ありません）尙當局聽取規約や參考法規の拔萃も御申越次第差上げます

放送聽取の料金は

遞信局に對しては毎年度二圓の特許料を納めます之は遞信局より納入告知書が參ります放送局に對しては毎年二十四圓の聽取料（月額二圓三ヶ月分宛取纒め集金す）を支拂ふ事になります

機械の買入と取付及維持

是は放送局では一切取扱はない事になつて居りますから御隨意の會社、商店に御相談になり正式の機械を御求の上御都合に依り其の取付裝置や維持もその會社か商店へ御委せになれば便利です尙取付や維持を受負ふ店も相當にある事と思はれます

法規違反にならぬ樣

前に陳べた如く遞信省の型式證明を受けない機械か又は遞信大臣の認可なしに色々の機械を御使用になりますと法規違反になることがあります又正式の機械を買つても遞信局の許可を得ずして無斷で放送を聽取する場合も法規違反で「一年以下の懲役又は千圓以下の罰金」と云ふ罰則ですから御注意を希ひます

放送聽取の區域は

東京府陸上全部及大島、新島、利島、埼玉縣、千葉縣、神奈川縣、茨城縣、群馬縣、栃木縣、山梨縣の全部長野縣の内上田市、南佐久郡、北佐久郡、小縣郡、靜岡縣の内靜岡市、沼津市、清水市、賀茂郡、田方郡、駿東郡、富士郡、庵原郡、安倍郡、志太郡、東京市を中心としたる百哩の海上

放送開始は何日から

本放送は七月一日開始の筈でありますが夫迄の間に假設備を用いて放送を始める豫定で目下手續進行中であります假設備の間は電力の關係で遠距離には通達せぬ場合があります是等は決定次第公表致します

大正十四年二月

東京市麹町區有樂町二ノ一（有樂町驛前）
社團法人 東京放送局
電話 大手四〇八〇番
同 四〇八三番

東京堂